

元素と小説は使いよう

チル姐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

璃月の誇る、若い小説家。  
彼のたどる日常と、事件。  
そういうものを描く何か。

自己満足小説の極み。誤字誤文間違いなどは感想まで

■■■■、■■■■は■■■■■■■■■■守■■■■■■■■■■。

←

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||294418&uid||348575>

## 追記

みんな、訂正報告ありがとうございます！  
しつかり全部目を通しています。  
助かっています！

2022年10月29日時点でUA一万超え…  
夢でもみてるのかな？（ありがとう）

## 追記

たくさん評価ありがとうございます  
みんな優しいな  
感想待ってる♡

# 目次

## 序章 火文字

小説家・芥川の散歩 一 | 1

小説家・芥川の散歩 二 | 9

小説家・芥川の散歩 三 | 19

小説家。芥川の散歩 四 | 28

小説家・芥川の散歩 五 | 36

第n回 璃月若人お泊まり会 一 | 41

第n回 璃月若人お泊まり会 二 | 53

第n回 璃月若人お泊まり会 三 | 69

第n回 璃月若人お泊まり会 四 | 76

一章 モンドを描く、文字の舞(仮)

モンド編 予告話 (話の脈絡とか) ないです | 89

幕間の物語 (パクリじゃないよ)

ニイロウー凸記念話 | 98

キャンデイス持っていない記念の予告 (生存報告) | 119

ナヒーダ当たった記念幕間予告 | 123

夏 | 137

主人公ステータス | 144

新編 序章 田中の怪異の章

――前略、君は移りゆく時代に流されぬ一つの岩だよ。 | 149

田中の怪異 二 | 158

何の話ですうく!!! | 165

グロシを、引くゾ! | 177

新編 第一章 風を捕まえる異邦人

生存報告

序話 年賀ハガキのインクジェット紙からしか採れない栄養があ

る

一話 電車を寝過ぐして起きたら県を二つまたいでいた。

196

188

185

序章 火文字

小説家・芥川の散歩 一

序章 火文字

小説家・芥川の散歩 一

――  
――  
葬儀。文化があるからしてある物である。

――  
――  
別段変わったところもない、そんな日常。  
私の好むものだ。

――  
――  
小説家の朝は…、柔軟性があるものだ。  
そう、生活を柔軟にしてやる事こそ、筆の載る善い触媒なのだ。

…冒頭の力を存分に無駄遣いして述べ立てた、しようもない言い訳であつた。

私の名は、芥川。

芥川敦だ。

母が稲妻出身だったため、稲妻風の呼び名になっているが、育ちとしては璃月人と言った方が正しい、そんな有様を晒している人間だ。小説を書くことを生業としているものである。

自分の紹介などこの辺で十分だろう。

まして、自分の生活習慣を何かにつけて崩して、それに身勝手な理由付けをして正当化しているような、駄人間の紹介など、長くやっても精々各人の耳垢を増やすくらいの徳しか積むことはあるまい。

閑話休題。

再三いうが、自己紹介など、閑話にすぎない。

さて。

今朝、私は五時に起きた。無論、朝の五時である。

しかし、昨日は三時に寝た。実に、二時間の睡眠である。

最早、睡眠というのが正しいかどうかすら理解出来ない、そんな状況だ。

しかし、起きる時間は一定なので、問題はない。

本人は頑なに言い張ってはいるのだが、どうにも七七くんにはしかめ面を直してもらえない。

ついこの間も、端的に、「ねて」と叱られた。

困ったものである。

何がと言わんが、困ったものだ。

モンドのアイドルは毎朝、習慣づけた何気ない行動を朝にし続ける事で、可憐な愛嬌を維持しているのだそうだ。

我が家の斜向かいに住む、ファンを名乗る一般男がそう言っていた。

コレの信憑性はともかくとして、毎朝のルーティーンを形作ることには感心出来ることだ。

彼女の場合は、何やら特別配合されているらしい特性ドリンクをコップ一杯分、ゴクゴクと飲み干す事が、習慣らしい。

だが、私の場合は少し違う。

この世界は多少女性が強い傾向があるが、仮にも男の身を持って生まれ落ちたのだ。

本業が筆仕事であるとはいえ、運動しない訳にはいかないだろう。故に、わたしは、毎朝起きて顔を水洗いしてから、少々身だしなみを整えて、璃月の街を漫ろ歩くことにしている。

普段住んでいる場所、万民堂の近辺から、走ることもなく歩幅の許すままに歩いて、美貌のサボリ魔の住処を通り過ぎ、小説設定の相談役の職場を少し覗き、銀行の前で門番の若人と世間話をして、作家仲間の子の前を通り、玉京台まで登ってきて、長椅子に座って街を少し眺める。

この辺りで、私の生花の師匠、ピンさんがやって来るので、少し話す。といっても、毎日話す仲であるので、特段変わったことは話さない。

しかし、こういう何気ない生活の中にある出来事が、自分がいざ筆を走らせるといふ折に役立ったりするのだ。

例えば。

先日のことだが、合成台のスケッチをしていたところ、木の上から雨色の何かが落ちてきたことがあった。

不思議に思っけて寄ってみると、何と七星秘書たる甘雨女史ではないか。

すぐ近くで石商が暇そうにしていたので、協力を要請し2人で万民堂まで運んで行った。

丁度、看板娘の香菱も仕込みをしていたので、女史を横にできる場所と氷嚢を用意してもらい、私は取り敢えず白朮師を連れて来ることに成功した。

ちようど起きていたらしい七七くんがひつついて来たので、帰りは背中が重たかったのだが。

七七くんを背負った姿に周囲から驚きの声は上がらなかった。

なんでも、「先生が若い子を背負うのは、最早璃月の風物詩」なのだとか。卯師匠の言である。

納得はいかないが、別に不埒な勘違いをされることもないので、ま



あ放っておいていいだろう。

さて、この話の顛末。

白朮師によれば結局、彼女の病状は、『ただの』重度の疲労だったらしい。

後程目を覚ました本人に聞いたことだが、仙人の頑強さにかまけてここ数日寝ていなかったようで、仕事が片付いてからの記憶がなく、気が付いたらこの場面だったのだとか。

香菱やら石商やら、集まっていた人から心配する声や窘める声が上がっていて、女史はひたすら萎縮しっ放しであった。

個人的には、七七くんが「ちゃんと寝ないと、ヤダ」と言っていたのが自分にも刺さって、少し気まずかったのだが。

：よくよく考えると、その前に師に耳打ちされていたから、多分刺していたのだろう。

とにかく、このような経験も、思い掛けず得ることができるのである。

余談だが、この出来事をヒントに書き上げた小説、「化かせ、八重ちゃん！」は如何やらモンドやスネージナヤの方で好評だったらしい。

ピンさんとの世間話が終われば、また来た道を戻る。

おもちゃ屋を眺めた後、一度家に帰らずに、冒険者協会に寄り、鍛冶屋の様子を伺い、港の朝市を物色し、そうして、家に帰り着く。

毎朝こういう事をしているせいか、運動不足を感じたことはない。習慣が健康に寄与している、良い例である。

今日も毎朝の如くに、散策をし始めることにした。

丁度、香菱が万民堂の仕込みをしていたらしく、可愛らしい鼻歌が聞こえて来る。

「おはよう。香菱、卯師匠。今日も朝から精が出るねえ」

「あーっ！センサー！おはよーっ！」

「おう、センサー！おはようさん！朝飯まだだろう？丁度アンタの好物を、娘が仕込んでるところなんだ。もちろん食べていつてくれるよな？」

「ちよつとー、センサーを驚かせたかったのに、台無しになっちゃったじゃん！あーあ、折角のサプライズだったのにー」

おや、香菱が私の好物を作ってくれているらしい。好物は沢山あるので、果たしてそれを仕込んでくれているのかは分からないが、折角だし、注文しておこう。

「卯師匠、…じゃあ五人前。頼んでおくよ。」

「お、毎度あり！…と言いたところだが、今日はあの日だから三人前なのは置いといて、ちよつと多くないか？」

さ。

多くないか？」

「いや何、折角香菱が忙しい合間に私の好物を用意してくれているんだ。君達二人分の朝食代を出すくらい、訳ないよ。」

「わあああ!!!センサー、いいのー?!あつりがとー!!!」

「だあつはつは、気前の良いことだぜーそれじゃ、有り難く御相伴にあづか…」

「やったあああああ!!!久しぶりにセンサーと朝ご飯だー!!!ひやつほおう!!」

バシヤアツ

「あ、やば」

「クオオオオルルアアアアアツツ!!」

—————

朝食の約束を取り付けた私は、高揚した気分で万民堂を後にする。

香菱？

いやあ、振り上げた手が混ぜていたスープの鍋に当たるとは、災難だなあ。

…人事である。

まあいい、とりあえず。

素晴らしいことだ、まさか朝食から美味な物をご馳走して貰えるとは。

なんと幸福なのだろう！

独言つつ、岩上茶室の前まで至る。

丁度、暁と牙の二人が一堂に会していた。

「やあ、お早う。夜蘭は今起きているかい？」

「…ああ、センサーか。夜蘭様は…、寝ているな」

「…あ、センセ。おはようございます。…ヨイショっ！いやあー、仕事とは言え、夜中立ちっぱなしなのは筋肉に堪えるなあ」

「ハツハツハ、いやさ、夜通しの仕事で大変だとはいえ、筋肉の鍛錬は怠っていないんだねえ。感心感心！」

「無論！美しい精神、美しい所作というのは、美しい身体にこそ宿るもの。美しい身体を形作る最大の要素っていうのが、美しい筋肉なのよ！鍛えるのを怠ることがあるものですか！」

このよく喋る娘は、何やら『筋肉神話』なる物をその胸に刻む、筋肉をこよなく愛する鍛錬好きの10代女子なのである。

…なぜ、10代女子が岩上茶室の門番をするに至ったのかについては、正直璃月の数ある不思議のうちのかなり上位の不思議なのだけだ。

いやはや。機会があれば、是非聞いて見たいものだ。

「…うん。この思想には、俺も納得できる部分がある。」

「…ん、おや、その様子だと昨日に何か良い出来事があったようだね。」

良ければ、話してくれないかい？普段余り喋らない暁君の話、是非とも聴きたいね」

「…実はな、昨日、北斗船長とお会いしたんだ」

ふむ、北斗船長か。たまに、彼女に冒険譚を聴かせてもらうと、なんとも痛快な気分になれる。

きつと、海を股にかける才だけでなく、話術の才にも恵まれた女性なのだろう。

「ほう！かの大船団を束ねる女傑か！数度あったことがあるけれど、中中に見所のある御仁だと感じたのを覚えているよ。それで、彼女がどうしたんだい？」

「…世間話をしていたんだが、その口から出てくる話の数々に、北斗船長の爽快な人柄が溢れているのを感じた」

「フフ、そうか。確かに彼女は、些か豪快到過ぎる所があるが、よくよく所感を巡らせれば、爽快と言える人柄を持っていたように思えるよ」

「…彼女は、どうやら大剣使いであるそうなんだ。女という身で在りながら、身の丈近くもある大剣を振り回して道を切り拓く。俺は彼女に、美しい筋肉を幻視した」

「にゅおおおっつっつ!!ちよつと！何それ羨ましいんだけど！北斗姉貴は、筋肉神話の体現と言っても過言ではない存在なのよ!?うわあああああ！私も会いたかったよー！」

「ハツハツハ！なるほどなあ、北斗女傑が筋肉神話の体現なのであれば、その哲学にも信用性が着くというものだ。さて、そろそろ私はお暇するよ。仕事、頑張りたまえよ」

うむ、普段あまり喋らない彼と久々に話したが、中中に有意義な話が聞けたではないか。

多少私が饒舌多弁であったきらいはあったろうけれど、そうだな。やはり口数の少ないものと話すときは人によるが、色々と補って話す

と上手くいくのは事実のようだ。

先日読んだ、『西風騎士団ガイド心得』。中中どうして、有用ではないか。

作者G氏。一体何者なんだ。

筋肉談義を始めてしまった二人の下を離れて、往生堂の前まで辿り着く。

：鍾離はいるだろうか。折角なので、今日はアレだが、明日の朝食に誘うか。

何、彼の朝食代くらいは私が受け持つても問題なからう。

彼の話を小説の題材にさせてもらっている身としては、これしきの支出、なんともない。

：ただ、今日、あやつ、いない気がするのだがなあ。

戸を開ける。

紙を貼ってある斜光戸から差ししてくる、柔らかな暖色の光が辺りを包んでいる。

暖かく染め上げられた白い紙が散乱している。

受付の机には、緩やかなリズムで上下する梅の花飾り。

：全くもっていつも通りだ。

居ないわ、鍾離。

## 小説家・芥川の散歩 二

小説家・芥川の散歩 二

――

小説には、世界が宿っている。  
なんて、詭弁だね。

――

「…すう、むゆう、うえへへ…」

「全く、どんな夢を見ていることやら。だつらしい緩み切った顔で寝ているものだ」

「…だいはんじょお」

「…この上無く、だらしなない夢を見ているようだな。この馬鹿は」

目の前で散乱した紙を下敷きに、だらしなない顔でだらしなない夢を見ているこの少女。

名は胡桃。

…こんなでも、立派な往生堂の堂主である。

想像できないかもしれないが、こんなでも、御立派なのである。  
…こんなでも。

…なんか負けた気がする。

しかし、この惨状。やはりこうなっていたか。

この時期、まあ月末なのだが、往生堂は月末になるといつもこうなる。

具体的には、経営に関する書類を作成しているのだ。

あの自称凡人の散財癖が、書類煩雑化の一因なのは間違い無いのだ

が、そもそもの話。

先ず持って、璃月の葬儀屋の経営の仕組みというのがそもそも複雑なのだ。

璃月は七国の中で最も古い国である。当然、葬儀の儀式も最も複雑である。

まして、往生堂は老舗。他の葬儀屋では到底できないような儀式だっけ出来てしまう。

儀式をするには、道具が必要である。中には、申請しないと利用できないような物まで、存在する。さらに、儀式自体も下手すれば、実行申請が必要なものすらあるのだ。

…書類が有り体に言って、とんでもない分量になる。

この様子では、鍾離は大方、裏で書類仕事に追われている頃なのだろう。

仕方ない。彼を誘うのは明日にしよう。

万民堂には、明日もお世話になりそうであるが、問題なからう。

「…しゃいにやりやあ」

「…はあ」

取り敢えず、散乱した書類を何とかしてやろうかね！それくらいの手伝いはするとも。

…私、毎月やってるよな、これ。

胡桃の口から垂れた液体を拭いてやりつつ、そう思った。

—————

床に散らばった書類を、丁度出てきた鍾離の秘書に預けて、次いでにこの寝不足阿呆を借りる旨を伝えて、往生堂を出る。

そもそも、今日は胡桃を朝食に誘う予定だったので、毎月のように、散歩に強制連行する。

具体的には、背負っていく。

無論、鍾離を明日の朝食に誘う旨も忘れない。秘書によれば、予定も問題ないとの事なので、丁度良い機会だったのだろう。

「…うひえへへ」

「…群玉閣で、起こすか」

背中から漏れる弛んだ音を聞いて、またしても溜息を吐く。

幾ら堂主とはいえ、過労で寝落ちしてしまえば元も子もないだろうに。

毎月のように思うが、この馬鹿は学習しないのだろうか。

頭は結構冴えてるはずなのに、なんとという様を晒しているのか。

「…おひりゆだねえ」

「いいや、まだ昼じゃないよ」

すると。

「…ああ、もうそんな時期か。原稿を提出しないとなあ」

「…おっと、もうそんな時期なのか。『淑女』に連絡しないとなあ」

「やい貴様等、人がこの限りなく間抜けなアホンダラをえつちらおつちら運んでいる様を月末の時報代わりにしてるんじゃないよ」

「えー、何の話かい？僕は毎月この時期になると見られる光景を見て、今書いている原稿の提出期限を思い起こしただけであって、君達二人を時報代わりだなんて、そんな、あるわけじゃないかー」

「いや、何の話だい？俺は毎月この時期になると見られる璃月の風物詩を見て、上役への報告の日がもうすぐだったなあと思いきこしただけであって、君たち二人を時報代わりだなんて、そんな、あるわけないじゃないかー」

「くっそ、むかつくなあ！というか、タルタリヤ！私を璃月の風物詩扱にするんじゃない。行秋も、貴様まだ原稿提出してなかったのかよ」  
「うっ、風物詩じゃなかったのか。それは失敬！毎月見ている光景だ



から、てつきり…」

「うっ、仕方がないじゃないか。手書きの署名が必要だったんだから、ちよつとね…」

「貴様等…、というか、行秋の字についてはどうにかならんのか」

「…みよんみよんみよんみよん」

「なんだその寝言は」

出会って早々に揶揄ってくれやがったこの男二人は、行秋とタルタリヤ。

行秋は、稲妻ベストセラー連作小説の作者であり、商会の御曹司でもある、片手剣使いの少年。

ただ、致命的なまでに字が汚い。岩書（注・楷書に当たる字体。）が、草書（注・所謂、崩字に当たる字体。）になる。彼の幼馴染の導師の少年が、彼の書いた何の変哲も無い日記を呪物として使うと効果抜群だったという話は、最早伝説である。

タルタリヤは、氷神の国、スネージナヤの特使にして、執行官とかいうかなりの上役であるらしい青年である。

何かにつけて、戦闘に結びつける癖があるが、それさえ除けば、兄弟思いの出来た兄かつ仕事のできる敏腕役人である。なんだかんだで璃月でも有数の資産家らしい。銀行を運営するだけある。

因みに、彼の妹のトーニヤちゃんには、一度サインを送ったことがある。私の作品の、ファンになってくれていたということだ。ありがたいことである。

「ああ、思い出した。明日、良かったら朝食を一緒にしないか？往生堂の客卿も誘っていてな。万民堂で食べようと思うんだけど…」

「直ぐ予定を開ける」

「そんな大袈裟な…」

「だってあの鍾離先生だよ?!あの人の博識は書籍の話の参考になるん

だよ!!」

「だってあの鍾離先生だよ?!あの人の博識は俺の戦闘訓練に参考にできるんだ!!」

「そ、そうか。なんか息ぴったりだな、貴様等」

「こうしちゃいられない!直ぐに原稿を完成させてくる!明日、万民堂だね!絶対いくから!」

「こうしちゃいられないな、俺も仕事を終わらせてくるよ...!明日、万民堂集合だね。絶対に行くしかない!」

「...頑張れよ」

「二応ツツツ!!」

些か、欲に正直な節がある気がするなあ、この二人。似たもの同士なのか?

まあ、いいか。取り敢えず、約束は取り付けた。

次は...、薬でも見に行くか。

—————

池の上の幼女。

璃月の不思議のなかの1つである。

曰く、璃月では朝になると、たまに池の上に立つ藤色の髪の幼女が見られるのだそうだ。

別に、水の上に立つというのが不思議なわけではない。

氷元素の力を借りれば、簡単にできることなのだから。

モンドには、踏氷渡海真君なる異名をもつ騎士がいるらしいし、稲妻には、元素の力で海を超スピードで渡る少女もいるという。

水の上に立つ幼女くらい、なんということもないはずである。

しかし。

何故そこにいるのか。

何故わざわざ水の上に立っているのか。

口を半開きにして、何考えてんのか。

周りを飛んでいるその玉は何なのか。

ギャングスターに憧れていそうな、そのポーズは何か。

これが分からない。

…璃月の神秘である。

あ、目があった。

「…」

「…おはよう」

「…」

「…おーい」

「…」

近づいて来た。

「じー」

「どうしたのかい？」

「なんでもないんざみらー」

「は？」

「ねてないね」

「おや」

「せんせ、ちゃんと、ねて」

「おやまあ」

いつもの叱責であった。  
面目ない。

「…くしやはえたあ」

「うるさい」

寝言にツッコんでしまった。  
虚しい。

「……………」

背中が空いていないことを不満がりつつ、前からしがみ付いてきたこの少女が、先日甘雨女史に赤面せしめた伝説をもつ、七七くんだ。所謂、キョンシーというやつで、見た目通りの年齢ではないそうなのだが、体同様、精神も成長しないので、いつまで経っても子供のままである。

「さんぽ?」

「そうだよ。今日も、玉京台まで登って、ピンさんと話してから帰ろうかなって、思っているんだ。」

「そう」

「…この後、万民堂で朝ごはんを食べに行くんだけど、一緒に…」  
「いく」

「お、おや、そうか。それはうれしいな」

「よろこぶがよいんざみらー」

「流行ってるの?」

何やら妙な語尾をつけるのにハマっているらしい。  
どこでそんな知識を身につけてくるのやら。

子供というのは、そういうところが未知数で、だからこそ面白い。だから、私は、子供が嫌いではない。

私の所感は置いておいて、朝食に連れて行くと決まったのだから、保護者に一言挨拶を入れておこう。

「ほら、もうちよつと上に。そうそう。白朮師のところに、朝ごはんを食べに行くって言いに行くから、一旦そつちに寄るよ」

「うん」

「…毎回思うけれど、この階段、何でこんな長いんだろう」

「しゅみ」

「成程…、加虐趣味か。教育に悪いな」

「へびの」

「そつち?!」

…保護者の性癖では無くて、よかった。いやほんと。

「……………」

「おはようございます、子供の情操教育に悪い加虐趣味白蛇野郎と白朮師。七七さんと万民堂で朝ごはんを食べる事になったので、連れて行く許可を得にまいりました。あと、紙での切り傷に効く塗り薬を下さい」

「いってきます」

「フフツ、では少し待っていてくだ」

「まあて待て待て待て待て待て!!!こんな清々しい朝に出会ってそうそうなんて言い草やねん!何や子供に悪影響しか無いとかドS丸出しとか野郎とかおかしいやろがい!心当たりはないでもないけどそれにしたって出会い頭に言うことちやうやろええ加減にせえ!んで白朮、アンタ何普通にスルーしようとしとんねん肩に乗ってるオレにはわ

かんねんで、アンタがちよつと笑い堪えてんの！そこまで反応するんやったらちつたあツツコミの一つや二つしてやる位の懐の広さを見せたらな長野原の薬師の名折れやで?!ンエエツ?!稲妻出身やのうても関係あらへん！オレが石珀が黒やちゆうたら黒やなくても黒なんねんわかるやろお！ほんで七七や、なあにないことないこと入れ知恵してくれとんねや。アンタ無口キャラなくせして最近妙な個性出し過ぎとちゃうか！何や毎朝のポーズは。あれか。荒瀧飛呂彦の漫画に影響受けたんか。オレがこうてきた『斗斗の奇妙な冒険』読んだんやろ。あの久岐陽院（くきよういん）出てくるやつやろ。あのポーズアレやろ。斗斗立ちやろ。トルノ・トバーナのポーズやんな。アンバツキオとかガイアツチョとか出てくる5部の。…また今度こうてきたるわ。」

「…むにゅあ」

「おや、貴方が背負っているのは往生堂の堂主少女ではないですか。…熟睡ですね。ここまで捲し立てられても、寝てるんですね」

「毎月、この時期になると、いつもこうなのですよ。毎月毎月叱つても全然学習しないし、知っている仲とはいえ男に背負われて運ばれていても、緩い寝顔を晒し続けるのだから、阿呆面としか言いようがないでしょう」

「どういんざみらー」

「…まあ、彼女は幼い身でありながら璃月中を駆け回り、依頼をこなすばかりか、宣伝活動までしているのです。醜態の一つや二つ、笑って見逃してやるのが、泰然たる者の心得ですよ。はい、注文の塗り薬です」

「…そう、ですね。彼女のごとは、嫌いでは、無いですし、少しは優しくしてやりましょうかねえ。それでは、七七くんを借りていきます。塗り薬、ありがとうございます」

「…ええ、また。今度は、起きている彼女を連れて、いらして下さい」  
「はは、出来れば、の話にはなりますが。やってみましょう」

「ンエエツ?!もう行くんかいな!折角、オレが斗斗をお勧めしたろうと思つとつたんやけどなあ。まあええわ!また来いや!そんな時に色々話したる!」

「さよなら」

「いやそこはアリーヴェデルチじゃ無いんかイイツ!」

—————

∴あの蛇、テンションがいつにも増して、高かったような気がするな。

そんな類の感慨をいだきつつ、前には斗斗好きの幼女、後ろにはとうとう私の肩に涎を垂らし始めたゆるゆる堂主、という姿で、玉京台の門前にたどり着く。

金色の屋根と特徴的な丸い門は、どことなく威厳を感じさせる佇まいである。

近くには、瑠璃百合も生えていて、今日も良い景色が見られそうだと、小さく心を高揚させる。

ふと考えついたのでが。

この玉京台、日夜休まず開門しているのだそうな。∴七星は、いつ休んでいるのやら。

気づかなかったことにしておこう。

## 小説家・芥川の散歩 三

小難しい言葉をこねくり回すのが趣味なだけ、  
とは言いたく無いなあ。

璃月の港は、世界最大かつ世界最古の港町である。あらゆる文化が集まる場所にして、あらゆる時間の現れる場所。魔神や神々、仙人に凡人。栄枯盛衰、古今東西、千差万別、天動万象。摩耗すれども、人は滅びず。人の営みを、直視できる空間。それが、璃月港なんだ。人と人との営みの体現たる、この璃月。神の入る間隙は、果たして、有るのだろうか…。

お前はと思う？

なあ、

芥川よ。

：鍾離の言を思い出す。彼奴の言っている事は、間違いなく、この光景を見れば伝わってくる。

群玉閣前、玉京台の広場、璃月人にとっての憩いの場であり、またこの国を統治する七星からの託宣が降りる場所でもあり、かつ七国最古の神、岩王帝君が降臨する、迎仙儀式が執り行われる場所でもある。また、歴史書にしか無い話だが、神や仙人が亡くなった時の葬式、送仙儀式もここで執り行われるらしい。

幸い、帝君が崩御なさるような予兆は私には全く感じ取られていない。



故に、生きている間に私がこの儀式を見ることはなさそうではあるが。

兎も角も、玉京台の広場は、璃月人にとって切つて離すことなど有り得ない場所の一つなのだ。

かくいう私も多分に漏れず。

ここには、毎朝の憩いを求めて、あるいは生活の気分転換に、将又七星の姿を見物に行ったり。

ここにはかなりの頻度でやってくるので、成程、私にとっても蔑ろには出来ない大切な場所となっているらしい。

さて、やはりこの早い時間帯にはこの広場には人は殆どいない。

いたとしても、千岩軍の守衛の方々や、群玉閣勤めの役人達くらいのものだ。

毎朝私が使うベンチは、有り難くも、今日もまた空いているようである。

まだ昇ってからそんなに経っていない太陽が、街全体を淡い色に染め上げて、所々を煌めかせている。

いや、街だけではない。

森も、海も、空も、土も。消えかかった篝火も、建物の灯りも、朝の冷えた空気も。

全てが、祝福されている、そんな光景。

私が散歩をする一番の理由が、この景色を見るため、という事なのだ。

この光景を目の当たりにすると、自然と、筆を取る欲が湧いてくるのだ。

今日もまた、この絶景を拝ませてもらおう。

左となりには七七くんが寄り掛かって座っている。

背負っていた胡桃は、わたしの右に寝かせて、枕代わりとして私の膝を貸してやる。

良い景色のお陰か、心穏やかな儘に胡桃の頭を撫でてやる。

最低限の身嗜みとして風呂には入っていた様で、柔らかな百合の香りが漂ってくる。

「このひとも、ねてないの？」

「そうだな、寝ていない。忙しいらしいんだよ」

「このひと、いつも七七を土にうめようとするから、きらい。でも、ねないのは、だめ。おきたら、ちゃんとしてって、言ってみる」

「ハハハ、七七くんは偉いんだな。でも、手強いぞ、こいつは。なにせ、毎月ちゃんとするように私も叱ってみているんだが、一向に直す気配もない。頑固、なのかもなあ」

「ん。じゃあ、てつだって」

「ほおう？二人で叱るといいうのか。それはそれは。胡桃の阿呆には、いつもより苦い薬を処方する事になるようだ。流星は薬屋のいそろうだな」

「ほめることをきよかするっ」

「七七くん、きみ。さてはいますっごくテンション高いね？」

「このいきおいのまま、せんせに、ココナッツミルクをかうのをしがみついておねだりしてみる」

「別にそれは問題ないんだが…、ちよつと氷元素が漏れ出して凍えそうなのはなんとかして欲しかったりするねえ」

「おつと」

なんだかんだで、七七くんとはこの場所に何回か来たことがある。無表情に見えて、結構喋るらしいこの子との会話は、偶に可笑しなマイブームに入る事があっても、子供らしい純粹さを感じさせられるものである。

物忘れが激しいこともあって、大抵のことは忘れてしまっている七七くんだが、幸にして、何度も会っている私のことは、わすれたくてもわすれられない存在になっているらしい。本人が言っていた。

現に、今日のように氷上斗斗立ちをしていなくとも、ばったり会ったら、駆け寄ってきてしがみついて来てくれる。歳の離れた妹が出来たような感覚を、毎回味わっている。

ただ、兄面をさせてもらっている勢いで言ってしまうと、七七くんの人見知り、というか、初対面の人に対して、脈絡のないことを話し出す癖はどうかならないのか。

緊張のせいか、知ってる人の背中に隠れつつ、応対する様は、如何にも人見知りに見えるが、受け答え自体は出来るのだ。言ってることが二転三転するだけで。

「…ふへへえ」

「そろそろ、おこす？」

「いいや、もう少し待っていてくれ。自分からやったことだが、ここまで苦労させてくれたんだ。緩んだ寝顔の一つや二つ、眺めさせて貰わないとな。割に合わないさ」

「なんか、ずるい」

「ハッハッハ！大人はズルいのさ！…まあ、未だ大人と言えるほどの歳ではないんだけどね」

すると

「あらあら、芥川さん。両手に花じゃあないの。そうなのねえ…、もう

この月も終わりに差し掛かったのね…」

「…貴女まで私共を時報扱いですか、ピンさん」

「ほっほっほ、毎月同じ事を繰り返しているんだから、住民の見物に遭うのは仕方のないことだよ。大人しく時報扱いに甘んじなさいな」

「…ほーら、七七くん。大人つてずるいだろう?」

「忘れっぽいから、いつも、たすかってます」

「おっと、この子も年上だったなあ」

ピンさんが、上品に揶揄いを向けつつ、ゆったりとした足取りで歩いてきた。

—————

七七くんを私の方に少し詰めさせ、眠っている胡桃の太腿を折り畳んで、ピンさんの座る空間を用意する。

「なんだか、結構空間が出来た気がする。」

「御歳の程が全くわからない、アグレッシブおばあさま。」

尋常じゃない量の荷物を平気な顔をして持ち歩いているその様子も、年齢不詳の増長に大いに役立っている。

しかしながら、長机に出して売り出している物は、万民堂の近くのおもちや屋さんのおばあちゃんと何ら変わらないように見える。

不思議が体をとって現れたような存在、それがピンさんという女性である。

「それはそうと、今日は七七ちゃんも一緒なのかい。元気になっていたかしら?今、味覚を励起させる札を作っているところだからね。楽しんでみているんだよ?」

「ん。ありがとう、おばあちゃん」

「おや、七七くん。よかったじゃないか。それじゃあ、それが完成したらもう一度一緒にご飯を食べに行こうかな」

「んあ。連れて行くことを許可するー」

「あはは、私にはその口調なのだね。正直、私はその斗斗とやらを知らないから、あんまり乗ってあげることができないんだけども」

「ほっほっほ、いやはや、仲が良いねえ。まるで

年の離れた兄妹みたいじゃないかい」

「てれる」

しかし、七七くんが妹だったら…、すぐく助かるな。

体調も気遣ってくれるし、喋り相手にもなってくれる。

薬の知識も詳しいし、くっついて来た時には心地よい温度と感触を伝えてくれる。

…真剣に考えてみようか、いやほんと。

暫くピンさんとは話をした。

矢張りいろいろな人の意見を取り入れることは重要だ。

ついさつきまで、私の頭には実地踏査などという言葉はなかったのだから。

モンドを知りたくばモンドに行け。

当たり前の事であるけど、コレがわたしから抜け落ちていた。

流石はピンさんである。物の見方というか、初心を忘れず古きを尊び新しきをも理解する、泰然としたその在り方には、畏敬を懐かざるを得ない。

なんと素晴らしい御縁がわたしにはあるのだろう、泣きたくなるような感動が私の胸を打つ。

「七七くん、私は今、世界に感謝しているよ…」

「ちよっと何言ってるかわかんない」

「七七くん辛辣だねえ…、まあ良いけども。何だろうか、癪ではあるが、この寝坊助にも感謝してやってもいい。私が小旅行を決意するに

至った機会を作ったのだからね」

「せんせい、旅行いくの？」

「ああ、今度の小説の取材に行こうと思いついたんだ。期間等も、また決めておくべきかねえ…」

「…へえ」

「ん、どうした七七くん。俯いたりして」

「…別に、なんでもない」

「そうか？なら、良いけれど」

—————

目を開けると、知り合いの小説家の顔が目の前に広がっていた。

おかしい。

いや、おかしい。

何がどうなったらこうなるのだ。

…遡って考えよう。

確か私は、昨日の、いや違うか、6日前の夜から滞っていた書類整理を一気に終わらせるべく、仕事をしていたはずだ。

書類仕事をしている途中であるとはいえ、やっぱり日々の仕事依頼や、ちやうど回ってきていた大規模な葬式の施行もあった。

それで、色々と仕事も入ったせいで、済し崩し的にずっと寝ないでいたはずなのだ。

…ああ、なるほどな。

…また、やってしまったのか。

大体理解できた。

大方、私の体は五徹に耐えきれず、いつもと同じように寝落ちして

しまったんだろう。

それで、毎日の散歩で往生堂を覗いたセンセイに、また見つかってしまつて、それで。

いつものように、ここまで連行されたんだ。

背負われて。

また、行秋とかに、見られたんだろうな。

辛炎にも、見られたかもなあ。

恥ずかしいな。

でも、一番恥ずかしいのは。

毎月、私をこうやって背負つてくれて、ここまで連れてきてくれて、それで、わたしがまいかいしよるいをあとまわしにしてしまうのをおこつてくれる、そんなやさしいせんせいとの、やくそく。

じぶんのからだをだいにしなさいっていう、やさしいやくそく。

また、やぶつてしまったなあ。

かなしいなあ。

あれ、なんだか、めのまえがぼやけてる。

ほっぺが、ぬれてる。

…こころがいたい。

—————

漸く起きたと思えば、ぼろぼろと大粒の涙を流し始めた。

なんでそうなる。

さて、状況を確認しよう。

ピンさんとの雑談を終え、そろそろ起こしてやろうか等と七七くんと会話していた。

私の膝上で爆睡していたふにやふにや娘が瞼を開けた。

私の目と、次いでに七七くんの目と、ばつちり目が合う。

数刻、固まる。

突如大粒の涙を円い瞳から溢し始める。

嗚咽も漏れ出す。

七七くんが何時もの眠たげな眼を大きく広げて、驚きを顔にする。

ちようど休憩にしたところなのか、群玉閣から降りて来たばかりの

七星少女が何事かとこちらを見つめている。

…ほんと、なんだこれ。



小説家。芥川の散歩 四

文筆を嗜む者は、総じて逃れられぬ読書の劇毒に侵されているのだよ。

しとどに濡れている。

私の腿から腹にかけて、雨に降られたかのように濡れそぼっている。

傘でも忘れたのかというくらいに、濡れに濡れている。

別段冷えるわけでもない。

寧ろ徐々に暖かくなりつつある。

温温とした水が、私の服に染み入っている。

隣に座っていた七七くんは、此方を見つめたまま、固まっている。

とんでもない場面に出会した七星少女は、肩を怒らせこちらの方へずんずん近付いてくる。

斯く言う私は、何処か諦めのついたような心境で固定具が付いて動けなくなつたままに、腹にくっついた艶やかな長髪を緩く撫でている。

さて、何が起こつたのか。

見るものが賢明でも愚昧でも、一目見れば分かることだろう。

ただ、それはそれとして戸惑いが起こると思うが。

なにせ、当事者の私ですら戸惑っているのだから。

簡単に状況を確認してみる。

先頃まで私の膝枕にて惰眠を貪っていた阿呆少女が、唐突に目を覚ましたかと思えば、やおらに大粒の水を眼から溢し出した。

むんずと私の腹部にしがみついたと思えば、しゃくり上げるような静かな嗚咽を掻き鳴らしつつ、今の今まで涙を流し続けているのである。

しかも、時たま微かに「ごめんなさい」だの、「ちゃんします」だの、矢鱈滅多に塩らしい言動を漏らす次第。

はてさて、どうしたものか。

こども反応に困る有様をまざまざと見せてくるのには、流石に私には如何ともし難い。

取り敢えず、胡桃の後頭部を柔めに撫で続けているが、正直言って、気休め以上の意味をなしていない。

取り敢えず、胡桃が落ち着くまでこれが続けようか…。

—————

「ねえ、何か申し分があるなら聞くくらいはしてあげるけど？ 月末の象徴三人衆さん？」

「待て待てなんだその呼び方。何よりもまずそれが気になったのだが」

「げんた誰ごす」

とうとう紫雷ワープを使ってまでして颯爽とこちらの前に現れた少女の第一声がこれである。

うむ、私の印象が撃沈しているのがよくわかる。

「げん…、え？ 何かしら…。ま、まあいいわ。月末になると必ずと言っているほど現れる、少女を背負い抱き上げる男。有名にならない方が

おかしいんじゃないかしら」

「は、はは…、よもや私の知らないところで阿保らしさの留まる所を知らない緋名が広まっていたようとは。…少しこれからの散歩は考えるべきか？…つてあいいったあああああいいいいつつつつ!!」

どうやら、胡桃が私の脛に思いつ切り爪を立てて何かを訴えかけようとしたように見える。

いや、その気の引き方はよくないだろうよ…。

「なんだなんだ、何を言いたかったんだ、胡桃？ものすごく痛いんだけど、ジンジンしているんだけど？」

「いくらなんでもそれは残酷な呼び方のような気がするけど…」

「…もん」

「え？」

「せんせえとお散歩できなくなるの、いやだもん」

…：…そんな私との散歩が楽しみだったのか、此奴。

しかし論が飛躍している気がするが。

別に私はこれより散歩を取り止めよう等と言った覚えはないし、散歩に於いて胡桃と一切の関わりを持たないようにしようなんざこれもまた口にした覚えもない。

ただ、これ以上珍妙不可思議な渾名を知らない内に付けられる前に、日頃の行いについて変容させられるところがあれば少し改善してやろうか、という感覚の意味合いを込めて、発言をしたつもりだった。なんとも早とちり甚だしい娘っ子である。

「それはそうと、この子も少し落ち着いたみたいだし、何があったか話を聞かせてもらおうかしら」

「いいの、刻晴さん。私や七七くんは兎角、貴女は通りがかっただけであるから、この事案に立ち入る必要も無いはずだが」

「ここまで来てはいさよならって冷たくも退散してしまえる程、場の流れを理解出来ない訳じゃないわ。言ってみれば、乗り掛かった

船って奴よ」

「正直、助かるな…、ありが」

「それ、に！年頃の女の子の涙を、変な所で鈍ったらしい男にだけ拭かせるのも、私の心が許さないから。言つとくけど、貴方ほど人の感情を表現するのに長けた人なら杞憂かもだけど、若々しい傷心の少女のカウンセリングを幼女と青年がやるなんて、中々ないことなんだから。微力ながら、手伝ってやるわよ」

「はは、反論の余地も無い。それじゃあ、お言葉に甘えて貴女の頼もしい手を借りよう」

「むう、心外んざみらー」

「そんな言動してる奴には尚更任せたくないわ」

――

私の膝上に座り、顔を曇らせ俯いて、私達の反応を待っている胡桃。落ち着きはしたが、今にも泣きそうである。

さて、胡桃の言い分をまとめるとしよう。

正直、溜息を堪えきれないというのが本音だが。

・毎月、往生堂の書類に追われる月末を過ごしては、寝落ちしてしまい、群玉閣の広場で私に見守られて目を覚ます、という現状にいつまでも甘んじている自分に嫌気が差していた。

・今月もまた、毎月と同じような醜態を晒してしまった事を、目覚めた途端に目に入ってきた私の顔を認識すると共に悟り、遂に自己嫌悪が爆発してしまう。

・毎度私に迷惑を掛けている。私に諭されて自分でも色々試行しているにも関わらず莫迦の一つ覚えの如くに改善の兆しも無い。何時も堂主である事を誇りにしているにも関わらず、蓋を開けてみればこの為体。余りにも情け無く先代皆々様に申し訳ない。

・ずっと仲良くしていた私や他の人たちに、失望されかねないことへの絶望感。私に見離されて、毎月のように関わってくれる事が無くなるかもしれないという焦燥感。其れらを感じて涙を堪えきれなくなった。

こんなところだろうか。

弁明途中、涙や嗚咽で中断したということもあり、意外にも時間がかかったが、一通り聴取はできたと思う。

「…これでよし、と。取り敢えず今の話を纏めてみたが、こんな感じでもいいだろうか?」

「ええ、現状把握としてはボロの一つも無く完璧だと思うわ。というか、この短時間で良くそこまで纏められたわね。…私の助手、やってみない?」

「小説家だからね、状況を言葉に表現する能力については一家言あると自負しているよ。あと助手のお誘いなら、保留で。何かの参考になる経験ができそうだし」

「あら、色良い返事、頂いちゃったわね。やりたくなったらいつでも言いなさいな。門戸は開いておくわよ。とまあこれについては一旦置いて…」

「感想、私から言う方がいいか?七七くんが言うかい?それとも刻晴さんがやるか?」

「全員でいうほうがいいと思う」

「七七ちゃんに賛成。多分結論は一緒でしょう」

「だろいな、それじゃあ胡桃」

「…はいい」

「私の感想、一言、アホだろうお前さん」

「ぐっ!」

「七七も、ちょっと、おアホさんだと思う」

「ふぎゅっ」

「最後私ね。アンタアホね」

「にやああああああ!!!」

満場一致で判決阿呆である。

異論が無いところから鑑みて、筋金入りであろう。

容赦ない判決に、胡桃は胸を押さえて崩れ落ちる。

誰がどう見ても、満身創痍。是非もないね。

「まず毎月私がお前さんを運んでいることについてだが、迷惑だ何だを気にされる謂れは無い。私が好きでやっていることなんだから、お前さんは大人しく自分がもう少し何ができるかを少しずつ考えるだけに留めておけ」

「七七、キョンシーだから、あんまり大したこと、言えないけど、たくさん失敗するからって、自分を嫌いになることは、無いと思う」

「それで、ここままで付き合ってくれている貴女のお友達が今更貴女に失望して疎遠になるなんてことあると思うかしら？杞憂よ、まさにそう。折角自分の職に誇りを持つてるんだし、自分自身と自分の友人にもっと誇りを持ちなさいな」

「鍾離に聞けば簡単にわかることだが、お前さんの先代が全員最初から偉業を成し遂げる大人物だったはずもないだろうよ。寧ろ、神の目を持つに至るまで頑張ってる時点で、歴代最高に近い功を成し遂げているに違いないさな」

「失敗なんて、いつか直せばいい。へびが言ったた」

「私も、甘雨も、凝光様だって、失敗の一つや二つくらい繰り返してしまっただもの。周りを頼ればどうってことないわよ。何が悪いって、貴女が傑物だからって何から何までの責任が二十にもならない少女に寄せ集まっている環境に甘んじているのが悪いわ。私ですら甘雨とか、凝光様とか、いざという時に頼りにできる人がいる。天おじや夜蘭とか、頼ろうと思えばいつでも助けてくれる人だって周りにいるのに」

「歩く万国便覧の鍾離、自称大物小説家の私、薬師見習いの七七、料理研究家の香菱、銀行元締めのタルタリヤ、商会御曹司の行秋。ほら、取

り敢えず挙げただけでもこれだけお前さんの周りには仲の深い人間が居るんだ。一人や二人に頼るくらい、罪悪感を懐く事でも何でもない。それにほら、今日この七星の刻晴も頼れる人間の一人になったじゃないか。もうお前さんは無敵だ」

なんだ、予想はしていたが、皆思うことは同じだったようだ。

この胡桃は幼少から堂主として育てられてきたせい、いろいろなことを自分一人で解決しようとする節がある。

しかし、支えあつてこそその人間だ。神ですら、氷神にはフアデュイという手駒が、岩神には仙人という部下が、風神には教会や騎士団という国を自治する組織が、それぞれあるのだ。

神のような超越者ですら、周りに頼っているのに、比べれば凡人でしかない我々が一人で事を為そうとしても限界があるだろう。

これを機会に、周りにもっと頼ることをして欲しいものだ。

幼少の頃から見てきた可愛い妹分が、心身を衰弱させていく様なぞ、見たくも聞きたくもないからな。

「…」

「どうだ？自信が湧いてきたか？ありきたりな言葉だが、言わせてもらおうか」

「…うん」

「お前さんは、独りじゃないさ。仲間がいて、自分がいるんだ」

「…うん」

「一所懸命頑張ってるのはみんな知ってるんだ。もっと生き生きした姿を皆んなに見せてやれ」

「…うんっ」

「ほら、みんなお前さんを慰めてくれたんだ。こういう時、なんて言うんだ？」

「…みんな、ありがとー！頼りに、させてもらうねー！」

「いつでも、話し相手になってあげるわよ」

「七七に、頼ることを許可するう。おアホさん」

「七七ちゃん…？そのおアホさんって呼ぶのはやめて欲しいんだけど  
なあ…」

「や」

「うわああああああああん!!!」

-----



## 小説家・芥川の散歩 五

—————

七ツ国 巡り巡りて かへり着く 吾が腕には 睡る玉あり  
君の母が遺した歌だよ。

—————

璃月に旅するに、幾ら金を使っても、幾ら時間を使っても、損することは無い。

かつてスメールの詩文学者、シャブル・アヌが自身の旅行記にて述べたように、璃月の魅力というのはいくら掘り下げても調べ尽くせないものである。

その璃月を代表する場所とはどこかと考えたとき、真つ先に例として上がってもおかしくもないのが、この万民堂である。

短時間に再度いうことになるが、万民堂は、璃月を代表すると言ってもおかしくない食亭である。

しかし、その外観は初めてここに来る人間にとても想像できるようなものではないだろう。

店自体はそこまで広くなく、厨房設備に注文受付、後は椅子が2人分という簡素なレイアウトをしている。

二、三階に居住空間があるとはいえ、大人気料亭としては些か狭すぎる感が否めない。

「あつーせんせー、やっときたー！もうご飯の準備できてるわよ！そこに座って座ってー！」

「ああ、ありがとう香菱。それと、卯師匠。いきなりですが、朝食の人数が増えまして…。彼女の分も用意して頂けますか」

「そう言うだろうなと思って、多めに作っておいたよ！先生の食事のご同伴が増えるのなんていつものことだろう？まあ何だ！余つても香菱の腹の中におさまるだけだしよ！」

「ちよつとー！」

食事の話題になると敏感になるのは女性の大きな特徴である。

自身の外見の特徴に繋がりがねないような話題には、敏感になるのだらうと考えている。

香菱もその例に漏れないらしく、卯師匠の歯にももの着せぬ豪快な言に調理の手をそのままに抗議して見せた。

万民堂に戻ってきた我々であるが、驚くことに、急な予約変更にも完璧な対応を見せてくれた卯師匠。その慧眼にはいやはや頭が下がるばかりである。

天気の良い日に青空の下、食事を摂るといふのはなんとも言えない多幸福感を感じるものだ。二の腕の上の方が暖かくなって、その熱が背中にもまで伝搬し、背中に翼を生やし、私を彼方まで連れて行ってくれるような錯覚に陥る。文字通り、空の彼方、星の輝くソラの彼方へと、連れていってくれそうに思えてならないのだ。

何処かの元素学者が男女は須く星である等と曰ったと述べたという話を何処かで読んだ覚えがある。その本は、元素学の段階を百年分進めたと言われている学術書であったのだが、含まれる潤沢な智慧の割に、それをなかなか風情のある言い回しで述懐するのであるから、一方で「学術書に喧嘩を売っている学術書」とも呼称される。かつて、と言つても三年ほど前の話であるが、この本を手にして、私は俗に言う「沼」とやらに大いに囚われたようで、その本の言の数々をひどく気に入って様々に解釈を重ねて、自分の小説に取り入れたりした。

須く星であるという男女。ならば星の下へと還つても何もおかしくはあるまい。翼を手にし、空高く舞い上がることへの純粋な憧れや、星々の配列に意味を見出し、神秘を解き明かそうとするという邁

進。成程。人は星であるが故に、星を目指すのやもしれない。

晴天の下に食事を愉しむことの悦楽から、とんでもない方向に話が飛んで行ったものだが。果たして言える事は、私はこの現在の状況を大いに享受している、という至極当然の真実である。

「七七ちゃん、そのスパイス取ってくれない？」

「や。自分で取って」

「ちよつと、七七さん？口周りがすつごく汚れているわよ？ほら、じつとしていなさい…」

「えん、ありがとう。…せんせい、このすぱいす、いるっ？」

「え?!七七ちゃん?!?!」

七七くんが何やら胡桃を揶揄って面白いことをしている。キヨンシーたる七七くんは、見た目と実年齢が全く異なるというのは理解しているが、いやはやどう見ても年上にしか見えない少女を揶揄うくらいには大人びているとは。意外な発見である。

ちなみに、卵師匠は店が賑わってきたので食事会には不在である。明日は一緒させてもらうとのことだが、重要な人手である香菱を私達との食事に参加させているところが、何とも出来た父親らしさを醸し出している。端的に、格好がいいと言わざるを得ないな。

「はは、ありがたく貰っておくよ。でもそこで扱いの差に打ちひしがれている阿呆に意地悪しすぎるのはよくないなあ」

「おあほさんには、これでいいの。やさしくしないのが、ちょうどいい」

「おや、それもそうか。ならば仕方がないね」

「うええええええ！せんせいなちなちゃんがいじめてくるうゝ!!」

「知らん、甘んじて受け入れろ」

性悪と言われて仕舞えばそれまでだが、この阿呆を軽くあしらって遊ぶのは、嫌いではない。寧ろ、何ならば、趣味の一つになってしまっ

ている気もする。なんというか、年の離れた生意気な妹を相手にしているような感覚になるのである。

「…ほんつとに仲良いんだね、胡桃とせんせー。ちよつと羨ましいなあ」

「!!!…でっしょおー！そうよ、先生と私はとつても仲良しなんだよー！相思相愛の仲でしかないよね！うふふっ」

「…相思相愛は言い過ぎだ。別義ならば相思はあるやもしれないが相愛なんて事はあるまい。こう調子に乗るのを見ると妙に腹が立つから色々やっっているだけなんだけれど」

「ううううう、せん” せい” の” い” じわ” る” う  
〜!!!」

「あと反応がいちいち面白いから、意地悪が捗る」  
「うううううううううううううううう」

「犬じゃん」

猫に餌を与えるのを焦らすような、いいもしれない快感を覚えながら、香菱に色々話していく。ちよつとわかる気がする、等と言い出した彼女は、いったいどこに向かって成長しているのだろうか。父の手をある程度離れているとはいえ、これは予想だにできないだろう。

「…いぬ、なるほど」

「あら、七七さん？急に立ち上がったのかしら」

「…うえ、七七ちゃん？傷心の私を慰めに来てくれたの？…ふふふ、はーはっはー！ほーら先生！七七ちゃんは私の味方になってくれるよー降参して意地悪をやめるならいまのうて」

「お手」「わんっ」

「…よくできました。すぱいすをあげよう」「わーいー！」

「犬じゃん」「犬ね」「犬だね」

何というか、その、なんだ。率先してこの犬つころを玩んでいる立

場で言うことではないけれど。仮にも往生堂の主人が、その為体でいいの。幼女に犬扱いされるレベルで、いいのだろうか。

「むふふふー、七七ちゃん柔らかかい」

「…あつつつつつつつつつくるしい」

…まあ、本人が楽しければいいのか。

…良いのか？

## 第n回 璃月若人お泊まり会 一

第n回 璃月若人お泊まり会 一

—————

難解な本質を衆人分かりやすく伝える技法が比喻だ。

しかし、逆に言えば比喻によって隠される物が本質ということになる。

物事は的確な用法用量用途用向があるんだよ。

—————

かさかさど、乾いた音を纏わせて。

こつこつと、軽やかな音を響かせて。

さらさらと、布地の感触を確かめて。

によいーんと外套の裾に体重をかけて自分の身体を宙ぶらりんにしようとしているのはわかるわかりますわかったけれども私の首が締まるし腰が破壊されるからやめなさいやめてくれ死んでしまますのではやくやめろください」

「…むう」

「いやさ、むうじゃないんだよ。こちとら命の危機だったんだからね？生憎だけれどまだ命を棄てる予定は私の手帳には記載されていないんだからさ」

「七七の悪戯を邪魔した罪は重い」

「悪戯を通り越して殺人未遂に相成ろうとしていたんだけれど？ 私の罪について話すんだったら、その前に話すべき七七君のやったことについてはどう喋るつもりなのか、七七被告人」

「それでも七七はやってない」

「やったんだよなあ…」

バカみたいな会話をしながら、連れ立って歩く黒外套と幼女。もうどう見ても不審者と被害者の構図であり、璃月に初めて来た正義感溢れる人間ならまず間違はなく千岩軍に通報するだろう。いや間違はなくする。断言できる。いかがわしさに溢れる光景に対して何か行動しようとする人間が周りに見られず、何かするとしても景気良く挨拶を交わすのみに留まっているのは、この光景を見て義憤に駆られるような『初見さん』が朝早いのでこの辺りに存在していないということが理由なのである。しかし、それ以前の話、璃月に住む者がこの光景に危機感を抱いていないのである。そして、この怪しさ満点の黒外套と飴色幼女が嫌がり嫌がられのやりとりを交わしているのではなく、むしろ逆で和気藹々としたやり取りを行っているという事も大きな理由として存在するし、何より璃月においてこの黒外套と飴色幼女はかなりの有名人なのである。黒外套の男の名は、芥川敦。稲妻人の母を親に持つ若き小説家である。彼の代表作「夜は短し、駆けるや男子（おのこ）」は、スメールの女学生が同じ研究会に所属する紅顔の男子学生に思いを寄せて、自由人な彼を追いかけて東奔西走する物語であり、稲妻の八重堂主催の文学賞、「カノゴトクヨム！大賞」に選出された書である。彼は他にも「化かせ！八重子さん！」や「3匹の夜叉の大聖どん」、「恐れ知らずのスメールローズ」、「雷元素はアーカーシャ端末の缶詰知識を見ない」など、様々な小説を著し、テイワツト中の小説愛好家を魅了し続けている。

彼の隣で外套を遊ぶ飴色の幼女は七七。不卜盧の薬師、白朮を保護者とする薬師見習いである。彼女は普通の幼女ではない。何百年も前に術を施され、成長なき不死者として生まれ変わったキョンシーの少女である。記憶力が壊滅的に無く、酷い時は朝出会った人の事を昼

には忘れてしまう程のものとなっているため、彼女は懐に備忘録としてメモを常備している。しかし、懐と言っても色々な場所があるのだから、メモをどこに入れたかを忘れてしまうこともしばしば。しかしながら、とても親しい人間のことはよく覚えており、保護者やそのペット、壺を持つているおばあちゃんなど極々少数ではあるが記憶に焼き付いている人間もいるのである。この芥川も彼女の記憶から離れた人間の人である。保護者からお泊りを許される位に打ち解けた関係であり、周りの人達からは歳の離れた兄妹のように見られているのだとか。

「そういうえば味覚を活性化させる符を打ってもらったんだったね。さっきのご飯はどんな味だった？」

「…うー、なんだろう。あま、い？塩辛い？…言葉にしにくいけど、でも、美味しかった」

「そうか、美味しいという感覚が味わえるのはとても幸せな事だよ。色んな言葉で言い表せる様になれば、きつともっと嬉しくなるだろうね」

「わかった。たくさんメモに書いてく。…せんせいは、七七と一緒に食べられて、うれしいの？」

「勿論そうさ、私はいまでも嬉しい経験をしたんだよ。でも、どうしてそう思ったんだい？」

「だってせんせい、ずっと笑ってる」

「…おや、本当だ。これは一本取られたねえ。どうやら私は、七七くん達と一緒にご飯を食べることを、思った以上に楽しんでいたらしいね」

「じゃあ、今日はせんせいとお泊まりするから、もっと楽しくなるね」  
「ふふ、そうだなあ。今日は本当に楽しい一日になりそうだね。本当に楽しみだよ」

非常にほのぼのとした、微笑ましい会話である。

その会話を成しているのが黒外套の男とちんまい幼女であるとい



う、いかがわしきさの塊のような光景であることに目を瞑れば。

—————

氷元素を有する存在は、手が冷たいという話を聞いたことがある。そして、その人はとても情が深いという話も添えて。私には、この話について時たま考えている事がある。後者が真実であることは大いに認めよう。確かに私は、氷元素を使用する者で、人心を深く傷つけるような残忍な人物とは、私はあまり出会ったことがない。むしろ、氷が持つイメージとは程遠く、暖かく優しい想いを有する人間ばかりである。例えば、ここにいる七七くんもそうだ。何を考えているのかよく分からないぽてんとした表情を浮かべながら、体力治癒効果のある球を侍らせ鋭い剣技で不埒者を成敗したりする幼女である。この子の剣先は、時に非道を仕出かす宝盗団や悪党共に向くこともあり、この面では氷の印象に違わず冷徹薄情であると言えなくも無い。何がともあれ鉄拳制裁は誉められた事ではないと考える一般人からすれば、このような感想を出してしまうのも仕方がないのやも知れない。あくまで個人の印象がこうなるかも、という可能性の話なのだから、このことに対して私ごとやかく言う事もないし、七七くん本人が何か傷ついたり沈んだりすることは、まず無いだろう。まあいちいち覚えられないということもあるかもしれないが。しかしながら、この七七というキョンシー幼女は人の心に寄り添うことができる優しい女の子なのである。先頃、大変おあほな落ち込み様を見せていた胡桃に対して、その傷ついた心を癒す慰めの言葉を掛けていたし、ほかにも不卜盧に來た客の体調を気遣う事もできる上、近所の子供たちと遊んでいる時に怪物に襲われれば子供たちを守って自らの傷も厭わず立ち向かうことだって出来る。優しさに溢れた良い子なのである。この子の例は一例に過ぎないが、私が出会った中でも、璃月を支える七星の秘書を努める飴色の半仙が、何某かに恨まれているというよう

な話を聞いたことはあるはずもないし、音に聞こえるモンドの名バーテンダーも酒を飲む大人が嫌いであるとは言いつつも、また本人も唸るほどに不味い酒を提供しようとしているとしても、酒を提供することは辞めないし、何ならば嫌なことがあつて酒場で落ち込む大人に一丁前に発破を掛けることだつてあるらしい。約1名実際に会つたことがない人が混ざつているが、氷元素を使用する者の心が柔らかく暖かいという事は帰納的に証できるものである筈だ。流星にこのようなオカルティックな事象について大真面目にデータ収集を行った事例を、私は寡聞にして知らないが、そもそも強い願いが神に認められた証が神の目であるのだから、神の目を持つものが大人物であると言ふことには異論を挟む余地はないし、勝手な所感ではあるけれど、このことは一般論として真であると主張することに私は何の抵抗も抱くことは無い。敢えてここでは以下のように言うのだが、優しい人物の「多い」氷元素使用者について、前者のように一般化するの少し早計ではないかと私は考えている。そもそも、初めに述べた一連の話について、これのルーツは「手の冷たい人間は、人情深い」という稲妻の古い言い回しの派生であるというのが世間一般の認識なのである。この言い回しの語源として最も有力な説というのは、寒いところでも冷たいところでも人のために力を尽くし手を伸ばして行動している人間は、その努力を反映するかのようには手が冷たくなっていくのである、という稲妻古文説話であり、この言い回しの説得力というのは、「確かにそうかも知れないなあ」という感慨を抱かせる以上の強さを持つものではないと言える。決して、この条件を裏取つて「手が冷たくない者は、薄情である」という論が展開されるものではない。手が暖かい人間はごまんと居るし、その中で情が深い者もたくさん存在している。この意味では、先の言い回しは詭弁に過ぎないとも言えるのだろうか。スメールの元素学者、アボガドル・Oが提唱した「元素波及の法則」によれば、長時間元素に触れ続けた者は、その元素の影響がその者自身に現れ、神の目を有する者についてはこの影響が顕著に現れるという。例えば、氷元素の神の目を持つ者は、汗をかきにくい体質になる事が殆どであり、雷元素を持つ者は、体内電気信号の

流れが速くなり反射神経に長けるようになる。これは、しっかりと実験が行われて確認された事実であり、元素学では提唱した彼の偉業を称えてこの法則の名を「アボガドル則」と呼ぶことが多いのだとか。さて、このアボガドル則によれば、氷元素に触れ続けた者は、体内の生存許容温度が低くなり、氷山でも凍傷を患うことが少なく、それと共に暑さに比較的弱くなるのだという。モンドではドラゴンスパインの寒池に浸かり、暖を取るならぬ寒を取る事を好む騎士がいるのだとか。恐らくその方は氷元素の神の目を持つ人なのだろう。しかし、あくまでこれは生存許容温度の低下、という事だけである。体温が低くなるということではないらしい。同則によると、氷元素の神の目を持つ者は自在に氷元素を操り冷気を従えることができるが、この影響が自らの生存に寄与する事はなく、平熱の低下や熱中症事例の多発を招くものでは無いのである。これは他元素についても言えることで、雷元素をもつ者が体内電気信号伝達の鋭敏化により心臓の鼓動が早くなり平均寿命が縮むということはないし、草元素をもつ者は光が体に当たる事で身体機能が向上するが、水やその中に溶解した栄養素のみを摂取して、肉や魚の様な蛋白源を受け付けなくなるということはない。すなわち、この七七くんの如くに、氷元素を有してはいるが体温が子供の物と同じく高くなっているという事に、何ら違和感はないのであり、氷元素を用いる者の手が冷たいというのは、少々言い過ぎであるという感が否めないといえる。しかし、先に述べた通り氷元素を操る者には情に熱い者が多いというのは恐らく事実である。多少メルヘンチックな感慨になるが、私はこの事の原因は、氷元素の元締めとも言える存在、すなわち氷神の心が慈悲深く温かく、優しいからなのだと、希望して予想している。もつと言えば、そうであれば私は感無量である。

外套を弄ることに飽きた七七くんの手を繋ぎながら、かつて小説の後書きに書いたこんな感じの謎の文章を思い出し出していた。

懐かしい、確かこの頃からだっただか。

小説の後書きとして先の様な話題を上げたことがあった。薬屋で働く男と彼の周りで起こる出来事を描いた『薬屋アモン』シリーズの二巻の後書きだったはずだ。いや、三巻かもしれない。兎角、後書きにてこのような書き物を晒した本が発売して数日後から、ファンレターに露骨にスネージナヤからの者が増えたのである。

薬屋の小説ということで、白朮師に頼み込み不卜廬にて少しの間働かせてもらったのだが、その時にやたらめったに私にひつつく七七くんの体温が高いことに気がついて、その気づきをもとに書き上げた物だったのだが、その時の徹夜のテンションで高揚していた私には、まさか後書きにこの様な副作用があるうとは思ってもしなかった。

出版の一ヶ月後、突然家に訪問があり、呼び鈴に応じて戸を開けてみると驚く事にスネージナヤの上役、【富者】と【少女】であった。

どうにも、私の書く小説に沼の如くハマり込んだ少女が富者殿曰く「実際に貴方に会ってサインを是非貰いたいという願望を、駄々捏ねでファトウス会議を二時間長引かせ押し通しやがり、問題行動の目つけ役と北国銀行の視察を兼ねて私も同行者として巻き込まれ、更にファトウスのトップとも言える【道化】が妙にノリノリで土産として貴方のサインを指定した事も相まって今回の一件の強制力が増し、ここまで来ました」ということになったのだとか。彼は続けて、「案の定私の労苦はとんでもない物になりましたが、銀行員についての名作小説を書かれた貴方に会えるともなれば溜飲も下がるといふものです」とも述べてくれた。突飛な行動をする同僚のフォローに疲労しているからか、言動にやや本心が見え隠れしていたが、かの大手銀行の総取締役に興味を持ってもらえる本が書けたということには素直な喜びを感じていた。

さてこの少女、名前は職務の関係上コードネームでの名乗りとなっていたが、端的にマイペースな人間であった。メガネを掛けて決してその眼を開くことは無かったが、恐らく開いていたらものすごい勢い

でキラキラと星を瞬かせていたで有ろうくらいのテンションで質問を連発し、ハイスピードな質問の数々に私がなんとか答え続けていると、受け答えが気に入ったのか、突如距離を詰め私の隣に移動して、謎の力で私を空中に浮遊させ拘束し、満面の笑みで富者殿に「富者！私この子連れて帰ります！」と曰いやがった。私は、何かあった時の為に常に常備している稲妻名物ツツコミ用具「ハリセン」で思いつきり突っ込んだ。奇遇にも富者殿が静止を入れるのと同時であった。

もう初対面とか男女の性差とか、そういうものは関係なかった。偏に初対面の人間に対しても気に入ったら我儘を実力行使で押し通そうとするその事に対して、相変わらず非常に近い距離で隣に座る少女に対しその純真さを尊重しながらも遠慮を心掛けるよう懇々と叱責を入れた。富者殿からは、その端正な美顔を凄みがある満面の笑みで輝かせつつ「遠慮は入りませんので言ってやって下さい」と快諾を受けているので、応接間の机にて私の作った菓子と茶を楽しんでもらっている。ちなみに私の目の前である。常識外れ？いやいや、仮にも私の住環境が掛かっていたのである。是非もないよね。

最終的に少女は、私をスネージナヤに拉致する事は無いものの、この上ないお気に入り登録してしまったようで、ファンレターと言うより最早文通じゃねえかと言うような手紙を週に一回送ってくるようになった。富者殿とは妙に気が合ったというか、仲良くなり、スネージナヤに行くことがあれば案内をすると言ってくれるまでに至った。さらに後日、千岩軍の方から直接矢鱈と装飾華美な手紙を届けられた。中にはファトウス一同からの感謝状や北国銀行優待券などのとんでもない代物が入っていて、同時に渡された富者殿の手紙によれば、私の家を訪問した後から、少女の問題行動がまだ目立つものめつきりと減ったということらしい。なんというか、それでいいのかファトウス。

今でもこの文通まがいのやり取りは続いている。最近、近い内にこちらへまた来るとか言うことを仄めかし続けているが、どうなることやら。仮にも、あんなんでも仮にも、一国の中枢を担っているのであるから、そう簡単には来られないだろう。

七七くんの手を繋ぐのをせがまれてその温かい手を握ったことで、こんなことを思い出してしまった。おのれ七七くん。この恨み覚えしておくぞ。

…いや冗談だけれども。

「…む、せんせい、何で七七を見てるの」

「いや別に、なんでもないよ。七七くんの手は温かいなと思ってね」

「うん、そう。…せんせいもあつたかいよ」

「そうかい？そりゃあよかった」

—————

変なことを思い出してしまったが、兎も角冒険者協会の前まで至った。

因みにであるが、刻晴と胡桃とは既に別れている。

胡桃は何やらやる気を出したような顔つきで意気揚々と往生堂に帰っていった。あの様子だと、我々の発破というか鼓舞というか、何にせよ我々との会話

が甚く彼女のためになったのだろう。嬉しい限りである。

刻晴は矢張り仕事が差し迫っているとのこと、足早に帰っていった。…真に休むべき人間は例のおあほさんではなくこの若き才女なのかもしれない。

冒険者協会とは、その名の如く「冒険者」と呼ばれる職に就いている人々を斡旋し、彼らに対する依頼の管理や、緊急時の雑務対応などなど、様々な職務が存在する施設である。

丹精な美貌を『どの冒険者協会支部でも変わらず』曇らせることなく、カウンターに来訪してきた客に丁寧な態度を以て接してくれる受付

嬢のキャサリンや、テイワット各地で地図測量や依頼詳細の点検、技能検定試験の設営、そしてモンスターや盗賊といった存在が屯するような危険区域の調査など様々な職務をこなしている冒険者協会員、そしてテイワットに何万と存在する冒険者。以上に述べた彼等彼女等の他にも色々な人間が所属し、各人が協力し合ってテイワットで起こる様々な事件を安寧に導く大きな役割を果たし続けているのが、この冒険者協会である。

とはいえ、このテイワットに住まう人々からの冒険者協会への印象というのは、便利屋、といったところか。

冒険者が便利屋として優れている点、というのは多々ある。主だった理由としては、子供から老人まで依頼料がどんな形であれ存在すれば簡単に依頼を出すことができること。3歳の女の子が大切なセシリアの花の押し花葉を報酬として、お母さんに食べさせてあげてお菓子に使うグクプラムを取ってきてほしいという依頼を出している事から、依頼のハードルの低さが窺える。因みに、この依頼はモンドの火花騎士が達成したらしい。モンドの西風騎士団の職務の広さをも感じさせられる話である。もう一つ理由として忘れてはならないのは、冒険者協会自体の信用度の高さである。高い依頼達成率、報酬や依頼品の授受の確実性、そして何より冒険者協会の職員に課される厳密なマニュアルなど、様々な要素がこの組織の信用度を押し上げているのである。因みに、この冒険者協会マニュアル。完全に暗記しているのはキャサリンくらいらしい。…それはどうなのだろうか。

…とにかく、この冒険者協会は璃月の主要な街である璃月港にももちろん存在している。私は冒険者ライセンスを持っているだけのなちんちゃって冒険者であり、たまに暇ができた時に達成できそうな依頼を少しばかり遂行するくらいしかしていない。私の主だった冒険者協会の利用目的は、主に朝方のキャサリンとの雑談や情報収集くらいのものである。…こういう利用法も出来るのが冒険者協会の良いところである。ただの自己弁護であった。

「そういえば、七七くんは冒険者の証明書持っているのかい？」

「んえ？冒険者証なら、持ってる」

「おや、七七くんも持っているのか。私も実は持っていてね、どうやらお揃いだったようだ」

「ん。お揃い、嬉しい」

七七くんも冒険者証を持っていたらしい。嬉しがるようなものではないのかもしれないが、それでも誰かとお揃いのものがあると言うのは言いようも無い高揚感があるものだ。

—————

冒険者協会には先客がいた。それも、私のよく知る人間である。

「ああ、芥川先生か。丁度よかった、今日一日の予定がたった今空いたところだから、前に言っていた件を済ませてもいいだろうか？」

「おや重雲、おはよう。前の件なら今日済ませて仕舞えばいいだろうね。ちようどここにいる七七くんも私の家に泊まって行くことになってるから、一緒になるのだけど構わないかな？」

「先約、とつたー」

「全然いいよ。僕も無理を言っている自覚があるのだし、それくらいの事どうということもないよ」

「それなら良かった。では少し待っていてくれないか？先に私の用事を済ませてしまうことにするよ」

重雲は、行秋や香菱と同世代かつ親友の敏腕方士である。ただ、些か純粹というか、物事を率直に受け取りやすい傾向にあるので、よく行秋に揶揄われてしまう。また、香菱のトンデモ料理についても、こういう料理もあるのかという感慨を抱くばかりであり、それはないだろうと突っ込む事もない。まあ、こういう性格だからこそこの2人と親友をやっているという節もあるから、悪いことばかりではないのだろうが。重雲の方も、その純粹さから無自覚に2人を振り回す



事もあるから、どっちもどっちと言って仕舞うこともできなくはないのだが。

第n回 璃月若人お泊まり会 二 に続く。

## 第n回 璃月若人お泊まり会 二

第n回 璃月若人お泊まり会 二

—————

コホン、ここで一曲、宝箱のひどいよ風だあ！

—————

「星と深淵を目指せ！ようこそ、冒険者協会へ！本日はどんな御用件でいらしたのですか？」

キャサリン嬢に話しかけると、いつもと変わらぬ笑顔で返答してくれる。私の様な自己弁護野郎でも、このような対応をしてくれるとは、なんて良い所なんだ、冒険者協会っ！さて、では私も仕事に入ろうかな：

「要件は二つで、一つは先日 of 企画の寄稿の文章の脱稿、もう一つはモンドの物件を取り扱う不動産屋を探して欲しいという依頼です」

「え、アレもう出来たんですか?!ちよつと早すぎますよ、無理していいですか?」

「確かに睡眠時間は削ったけれども、些細な事です。筆が良い感じに乗ったので、そのまま書き上げました」

冒険者協会で毎月出版されている雑誌、トラベラーズ・ドライブ、通称はトラドラ。冒険者協会の出版で売上が安定しているからか、割と何でもやる雑誌で、過去にあったものでは、『冒険者の・テイワツト百景』という、取材班がアンケートで寄せられた各地の絶景を何があんでも撮影しに行くコーナーや、『ヤバすぎ伝説任務』という、世の中の不思議な事項を調査しに行くコーナーなど、一体何の雑誌なんだかわ

からなくなるほどに混沌としたコーナーを取り揃えていた。今回私は、この雑誌の新企画、『小説家になりたい!』というコーナーの応援短編小説を依頼されたのである。実は他の人にも依頼が行っているらしく、第3回には行秋の小説が載るらしい。なお、本人が言っていたのでまず間違い無い話だろう。

一昨日にされた依頼だったが、丁度構想だけ出来ていた短編があったので、それを書いていった。昨日からは妙に筆が乗って飲まず食わずで一気にかき上げたのだが、完全に小説が完成したのは夜中の一時であった。久しぶりにスメールの友人達から手紙が来て舞い上がっていたからかも知れない。丁度書いていた小説も、友達数人と連れ立って一泊野宿をする、という話だったので、いい刺激になった。また機会があれば、スメールに行きたいものだ。

「ー肉体情報分析開始。完了。疲労値53%。軽度脳内麻酔状態。対処法立案開始。終了。栄養補給及び6時間の睡眠を推奨。ー：全然無理してるじゃないですか!私の目は誤魔化せないんですから!」

「完全分析を使うのは些か卑怯な気が…、まあ確かに多少寝不足ですけど、寝たら治る程度ですよ。問題ありません」

「体の健康に気を使うのに、卑怯も何ありません!今日はしっかりと寝てください!」

キャサリン嬢には隠し事があまり通用しない。

というのは、彼女は「他人の状態を分析把握する能力」を有しているので、ひとたび疑いを持たれば自分が何を企んでいるのか瞬時に把握されるという訳だ。

先のトラドラの読者欄で、キャサリン嬢にしょっちゅうサプライズを挑む名物バーテンダー(清泉町在住)が有名になっていっているのもこの為だ。絶対に成功しないらしいサプライズが身を結ぶのはいつの事になるのだろうか。

「きゃさりん、心配しないでいい」

「…おや、七七ちゃんですか。おはようございます!それで、心配なくいい、とはどういうことなんですか?」

「ん、おはよう。えっと、今日はせんせいの家について、お泊まりをするから、七七がせんせいを見張れる。せんせいは七七に負かされる運命にあるのだ」

「な、なるほど？それは安心ですね！じゃあ七七ちゃん、さつき作った清心の押し花をあげるの、芥川さんが無茶しないか、しつかり見張っていて下さいね！」

「うん。七七も冒険者だ。依頼引き受けた。七七におまかせ」

「一応僕も協力しようかな。先生には幾らか恩があるからね。身体を無茶に使って倒れられるのは僕は嫌だし、しつかり見張らせてもらおう」

「ふふ、芥川さん？もう逃げ場は無いみたいですよー？」

「ハハ、どうやら私は、今日は潔く休むのが良さそうだね。よし！そうと決まれば今日は存分に休むかな！折角だ、満喫してやるぞう！」

「おー」

恐るべし七七くん、私をそんなにも寝かせたいか。宜しいならば今日は枕投げ戦争だ。枕の貯蔵は十分か。

「依頼達成の報酬はいつも通り北国銀行に送付しておきますね。それで、もう一つの用件の方は…」

「ああ、そうでした。実は今度取材でモンドに長期滞在する計画を立てていましたね。題材との関係上、宿ではなく借家形式で家を借りたのですよ。その件で、良さげな物件を紹介してくれる不動産屋を探しているのです。折角なので、依頼として募集しようかなと思いつて」

「ふーむ、借家ですか。もしかしたら、依頼せずともいいかもしれませんよ？」

「え?! 本当ですか!!」

「はい！実は、冒険者協会が管理している広めの物件があるのですが、色々あって、手放す話が出てきていたんです。立地条件や建物の内装も条件に合致します。芥川さん、この物件、良くありませんか？」

「是非見せてください」

このあとめちやくちや…  
家を借りた。

私の家は万民堂の近くにある。

朝から夜まで街の喧騒が聞こえて来る、いい立地である。屋上もあつて、空を見上げながら本を読むのに最高の環境である。…たまにお忍びの留雲借風真君が日光浴に来るのは心臓に悪いので勘弁して欲しいのだが。元々喧騒の側にいるのが好みだった私には、本当に良い家である。母親には、本当に頭が上がりません。

「ようこそ、私の家へ。母の有する家ではあるんだけど、今私の母は旅に出ていてね。実質的に私の家になっていくんだよ。稲妻式の家だから、靴は脱いでその靴箱に入れて上がってくれ」

「せんせいせんせい、七七のお泊まりセットどこにあるの」

「ああ、お泊まりセットは私の部屋の箆笥にあるよ。場所は覚えてるかい？」

「…覚えてない」

「はいはい、じゃあ一緒に取りに行こうな。そら重雲、済まないが居間で待っていてくれないか？茶を持って行くよ」

「了解した。じゃあ、少し待っておくよ」

「そうだよ、朝ちよつと机の上で色々やってたから少し散らかってるけど、隅に寄せておけば使えるからね」

「せんせい、はやくいこ」

「わかったよ、それじゃあ重雲、また後で」

七七くんのお泊まりセットを準備し終えたので、キッチンに立って  
来客のお持て成しの準備をする。

重雲には取り敢えず茶を出すべきか。

ふむ、なんだか今日はお客さんが多そうな気がするからなあ…。

よし、秘蔵のあの茶を淹れようかね。

「せんせい、七七ミルクほしい」

「おや、ミルクかい？ちよつと待ってなさい、あつたかいのにするかな  
？」

「ううん、つめたいのがいい」

「重雲には茶を淹れているけど、熱いのはダメだったよね？」

「あ、覚えててくれたのか?!僕は体質的に熱いものが苦手ってことは、  
まだ一回しか言っていないと思うけれど?!」

「いやいや、最悪命に関わる体質なんだろう？忘れてくても忘れられ  
ないさ。それに、君のことは行秋とか香菱からもよくよく話されてる  
からね。まあ、行秋の評には若干個人の趣味というかなんというかが  
含まれていたらけどね。とにかく、冷やしておくよ」

「あ、ありがとう!」

「…ふふん。これがせんせいの実力。七七の記憶力をはるかに上回る  
のだ」

「何故君が誇らしがるんだ…」

七七くんが何故かいはっている（無表情）のを横目にしつつ、草元  
素で茶葉の染み通りを進める。こういう事に元素力って便利なんだ  
よなあ…。

草元素とは、読んで字の如く草に関わる元素ではあるが、実際問題

何が草なのかは分かりにくい。元素学的分類によれば、草元素は「有機物の活動を象徴する元素」という定義らしいのだが、実際問題有機物の活動というのは色々種類が豊富に過ぎる。

ただ、解釈がしやすいという利点もある。例えば今のよう状況。茶葉は言わずともわかる通り葉っぱを乾燥させたものであり、草元素を有している。

一般に、大気中で元素は不活性化するという性質があり、なんらかの力を働かせないと元素は活性化しないし、元素反応なんかも起こらない。と言つても、ミクロの世界では別であり元素は元素でも原子を形作る元素もあつたりして、ややこしいらしいが。私は正直本で読んだだけの門前の小僧であるから、詳しくは知らないのだが。

さて、今述べたとおり、この茶葉が含む草元素というのは不活性化している。そこで、草元素の神の目を持つ私がこの茶葉に草元素を流してやるとどうなるだろうか。

答えは単純。茶葉の中の草元素が活性化し、茶葉は元素反応を行う劇物になるのだ。

こんな劇物が大量の水元素の中に入っていれば一体どうなるだろうか。これまた答えは単純。茶葉中の草元素がまた不活性化するまで開花反応を起こし続けるのである。開花反応というのは、時限式で爆発拡散する草元素構造物を生成する反応であるから、あとは簡単。茶葉内の成分が開花反応の拡散で攪拌されて、一瞬で茶ができる。

草元素の神の目を持つ人間にしか出来ないやり方だが、これが草元素の応用法、瞬間茶生成なのである。このワザをレンジャー長のテイナリに教えたら、すごい目で見られた。曰く、開花の爆発は危険だから、そんなことは普通やらないとのこと。実際にやってみせたら、「な、なんでえ…？草元素反応って厳密な調整が…、開花反応ってんでもない危険が…」とか言つたので、「できないのまじ草元素」と言いつつ頭をわしゃわしゃと撫でてやったら噛まれた。ちよつとなんてかわかんないっすね(すつとぼけ)。アルハイゼンには「その発想は流石だな、俺もやってみよう」と褒められたんだけどなあ。

コップに茶とミルクを入れ、茶の方は氷を入れて冷やす。

盆にのせ、コースターとストローも用意して…、よし、完成！  
鉄観音茶（開花済み）とミルク（入れただけ）である。

居間に行ったら、七七くんの札を重雲が書き直していた。なんでさ。

「いや、術式が少し薄れていた部分があったから修復してたんだ。このままだと七七ちゃんは道力の流れが滞って動けなくなっていたから、危ないところだったよ」

「不卜盧でも、たまに札を書いてもらってる。このひと、ゆくあき？と違って字きれいな」

「ハハ、行秋の字の汚さは筋金入りだからなあ…。そういえばアイツ、サインとかねだられたらどうするんだらうか」

「…どうするのだろうな、本当に」

「それはそうと、茶ができたから飲んでくれ。我が家秘蔵の鉄観音茶だ。…秘蔵と言っても単に私のお気に入りだから残しているってだけなんだけどね」

「鉄観音茶か、ありがとう。……お、これ美味しいな！」

「せんせいあとでのませて、のませて、ね」

「それを飲み終わったら入れてやるから取り敢えず落ち着きなさい。お代わりはたくさん作ってあるから。それとな、重雲。それ鍾離に教えてもらった美味しい茶の店のやつだから、そりや美味しいだろうよ」

「成程、鍾離先生か。ならば納得だな」

「ま、楽しんでくれ。それで、だ。今日は私の質問に重雲が答えてくれる会ということにしたのだけれど、良いかな？」

「それは問題ないんだが、方士の知識をどこで使うんだ？…も、もしかして、新作か?!?!」

「あ、ああ。そうだね。そろそろ新作を出すつもりだけれど、どうした？」

「いやっ！先生の新作に関われるなんて、どれだけ、どれだけ素晴らし



いことだろうかっ！なっ、なななんでも聞いてくれっ!!」  
「ハハハ、まあ、色々ゆっくり聞かせてもらおうかな？」

割と真剣に話を聞いて、方士についての基礎事項を聞いた。行秋たちと同じくらい若いのに、ここまで立派に方士の責務を果たしているとは、中々どうして感心できることじゃあないか。

ただ、彼でも説明しきれなかった事が多少有ったため、また機会が合えば彼の知り合いの方士を紹介してくれるそう。名は申鶴という方らしい。一体どの様な人なのだろうか。――食費が掛かりそうな予感がするが、気のせいだろう。――

――

重雲と話をしながら、次の小説の構想を整えて、質問をしたりされたりしつつ時間を過ごしていると、あつという間に時間は過ぎていく。

窓の外から見える雲は少し黄色みがかった朝の味を失い、真白く輝き見るものの眼にその影を焼き付けていた。

「おや、もう昼か。七七くんは…、寝てしまったようだね」

「あはは、ちよつと話し過ぎたのかも知れないなあ…」

「そうだよー。女の子を放つたらかしにするなんて酷いことするもんだねー」

「まあ、七七くんをほつたらかしにしてみましたのは間違いない私の非だから後でたくさん遊んでやるとして、おいお前どっから入ってきた」

「え、えっ、えええっ?!?」

いつの間にやら私の後ろから胡桃が腕を回して来る。此奴はしよつちゆう人を驚かそうとするので油断ならない。

コーヒーを飲んでいる最中に背中を叩かれて原稿に溢した時は、絶望した。軽く数分現実に意識が戻ってこなかった。わぎとじやなかったようだし、大分萎縮していたのでそんなに怒らなかつたが、まあ大分絶望していた。

「つい5分前に入ったばつかりなんだけどなあ…。全然気がつかないからその手紙漁つてたんだよねー」

「人の手紙を勝手に漁るな阿呆。機密情報とかあつたらどうするつもりだったんだ。詳しいことは言わないがスネージナヤからも手紙来るんだからな？」

「らしいねー？この少女？さんからのやつとかでしょ。確か、タルタリヤさんの同僚の人だっけ。内容は怪文書だったけど。…大丈夫なのこの人」

「中身見たのか。……そんな文書くやつが、国のトップなんだよなあ。大丈夫なのか氷神の国」

「ト、トップう?!こ、これがあ?!ほら重雲も見てみてコレ！」

「ちよ、ふ、胡桃?!機密とかあつたら一体どうすれ……………、ああ、大丈夫だなこれ」

「気をつけるよー。その怪文書平然と国の機密暴露してやがるから読み進めると心労で死ぬぞー」

「「え」」

…本当にアイツの文章はなんなのだろうか。改行空白も無いまま

に黒一色の文字がズラズラと並んでいるし、読み進めると唐突に国の機密が出てくるのだ。なので、一週間に一回手紙が来るときには、必ずタルタリヤが家に来ることになっている。不要な機密を読みたくないためである。

…氷の神のスリーサイズとか、会ったこともないファトウスの方の知られざる一面とか、なんで他国の人への手紙に書くのかねえ…。隊長は実は甘いものが好きだ、とか知らんよ。それを揶揄ってやったとかって、報告するんじゃない…。好きに食べさせてやりなさいよ…。富者殿の苦勞が偲ばれるなあ。

「それでこれは誰からの…、ニイロウ?…:…え、ニイロウ?!?!」

「にいろ、え?誰だ?」

「おや胡桃、ニイロウを知っているのか?」

次に胡桃が手に取った手紙はニイロウからの手紙である。しかし、ニイロウの名前を聞いて飛び上がる程に驚くとはどういうことなのか。

「し、知ってるも何も、スマール一の踊り子、生きる観光名所、璃月の雲董スマールのニイロウって呼ばれてるくらい有名な踊り子さんなんだよ?!なんで個人で文通してるのさ!この人親友以上の人が異常に少ないことで有名なのに!」

「そ、そんな有名な人の手紙が、平然と目の前に…」

「いやなんでって、前にスマールに行った時に知り合いになってな。それ以来、会ってはいないが連絡は取り合う仲になることができたっただけなんだが…何か可笑しいのか?」

「…ちなみに何したの、スマールで」

「そうだな、過呼吸になってしまったニイロウを介抱したり、インタビューしたり、ダジャレバトルしたり、砂漠の霊廟を見に行ったり、妹作ったり、英雄譚即興朗読をしたり、無言読書耐久をしたり、ゲリラサイン会したり、新出版社を立ち上げたり、フェネック耳をモフツたり、噛まれたり、アンバーとやらの宣教をされたり、色々したな」

「…満喫したんだな」

「…ホントに何してんの？でも、はあ、そっかあ。陥としちやったかあ」

「落とす？確かにスラタンナ聖処の屋根に登って雷元素で雷を落としたりしてたけど、なんで知ってるんだい？」

「いやほんつつつとに何してんの?!?!」

いやはや楽しかったよ本当に。ナヒーダには結構怒られたが。

「それで他には…あ、眞琴さんから手紙来てるじゃん。あの人今どこにいるの？」

「え、母さんか？…はい胡桃。自分で見た方が早いよ」

「そう？言ってくれてもいいじゃない…、は？」

「僕にも見せてくれ。…『怪盗体験中』？…何してるんだ？」

「つくづく自由人だなあ、ウチの母さん」

「…せんせーが言えたことじゃないでしょ。あ、続きある。『追伸、そろそろ帰ります』だって！わあ！また会えるのかあ！」

「先生の母君、か？その、だいぶ自由人なんだな？」

「まあ、事情で父がいない私の家で、私と母さんの二人で生活してたんだけど、まあ自由な人でねー。よく鍾離とご飯を食べに行っては帰ってきて酔っ払ってぐでぐでしたり、お風呂に自分一人で入れないとか

我儘言っでは私と入ろうとしたり、まあ我が道を行くフリーダムの化身だね」

「…初対面でプロレス技掛けられたのは一生わすれられないなあ」

「その節は本当にごめんなさいでした」

「あ、稲妻からも手紙来てるよ！えーっと、八重、かみこさん？稲妻にも行ったことあるの？」

「神子さんだよ、八重堂っていう出版社の社長さん。稲妻には3回行ったことがあるかな」

「ほえー、3回も？え、そういえば出版社からの手紙ってことは、じゃあ仕事のオフアーじゃん！やったねー！」

「おや、新しい小説の他にも新しい仕事も来るのか。やはり先生は凄いのだな！」

「ふふん！でしょ！せんせーはとってもすごくてーやさしくてーかつこよくてー」

「なんでお前が威張ってんだか。ほれちよつと貸してくれ。仕事の手紙だから、一応それは私が初めに読んでいいかな？…はいよ、どーも。えーと、なにになに？……………」

『芥川敦 殿』

記 貴殿に我が国の国主、雷電將軍より謁見の勅願が降りている。ついでには、鎖国中ではあるが稲妻における最高免許証を送付いたす故、一年以内に稲妻にいらすべし。なお、稲妻訪問の目処が立った際は八重堂に連絡をしてもらいたい。以上

鳴神大社巫女総括兼八重堂総取締役 八重神子 稲妻国主武甕雷  
神雷電將軍此証乃印』

⋮

「二 謁見ーーーッ  
!?!?!?  
「三

「す  
やあ  
「

「



第n回 璃月若人お泊まり会 三 に続く

――――

注、稲妻国主武甕雷神雷電將軍此証乃印は完全オリジナル。「いな  
ずまこくすたるたけみかずちのかみなるらいでんしようぐんがここ  
にあかすのいん」と読む。要は、鎖国中にも関わらず外国人を出  
歩かせる特例を將軍権限で設けた、と言うことを示す印。外交に於い  
て全権を握る事を示す場合にも使われるが、内政で行われる準絶対的  
専制を仄めかすことにも使われる。因みにこの小説では、雷電將軍の  
権威を「武甕雷神」、武力を「布津御霊神」、智慧を「懷兼神」と呼ぶ  
ことがある、という設定をしている。ペルソナア！なお、影武者の事  
を「月夜見尊」と呼ぶんだとか。ダレノコトダロナー

## 第n回 璃月若人お泊まり会 三

あまりの衝撃に、全員で数分呆けていた。七七くんは寝ていたが。次に気がついたのは、呼び鈴が全力で鳴らされているのにふと気がついた時である。

軽く5分は経っていた。

…これがいけなかつたらしい。

「あ、あけ、開けてくれよう〜！私が何かしたのかい!?!ゆるしてくれよう〜」

「あ」

「……………あ?」

「…せ、せんせー。ちよつと待っててねえ…」

「……………胡桃がめちゃくちや冷や汗をかきながら出ていったが、彼女、何かしたのか?」

「…なんかしたんだろうな。間違いなく。大方、来客が来ていたことを私に伝えたと安請け合ひし、そのことをポカンと忘れて…つて具合だろうなあ」

「やけに詳しい予想だな。まあ、帰って来たら聞いてみて…」

ドドドドドドドドドドドド

「何の音だ?!」

ドドドドツ、ガタツ、スパアアアアアアアアアアアンツツ!!

「あぐだがわくううん!!!」  
「うわああああ!!!」

案の定、胡桃に私への伝言を安請け合いされた挙句忘れられて玄関で待ち惚けを食らった憐れな被害者が出ていた。一言一句違わず胡桃のやらかしを的中させて見せた私に、重雲は尊敬の眼差しをむけてくれるのだが。果たして誇れることなのかこれ。

被害者の名は煙緋。璃月に住まう法律家である。彼女は、契約の国ならではの複雑化した法律をほとんど暗記し、かつその法律がどのように民に影響を及ぼすのかをきちんと把握することで、現在進行形で法を悪用する狡猾な苦難に喘ぐ民を幾度となく救ってきたのである。私は彼女を法律の顧問として雇っており、小説の題材についても、現実の問題対処についても、様々にお世話になっているのだ、が…。

「ひんっ、ひんっ…」

「ふー た お さ ん ?」

「あ、あはは…」

「…?!?!」

「すやー」

一体胡桃に何を言われたのやら、さつきから私の腹に頭を突き刺したまま戻らないのである。因みに、重雲は私の右隣なので、煙緋の行動の一部始終を全部見ている。普段の印象では考えられない彼女の行動に目を白黒させているようだ。ふふ愉悦。なお胡桃は正座である。是非もなし。膝の上に七七くんを載せているから辛かろう。

「煙緋さんや、この弩阿呆になにを言われたんだか知らないけれど、私はなにごともないから、安心なさいな。よかつたら、何があつたか聞かせてくれないかい？」

「ひんっ、す、すまないね皆。はしたないところをみせたね。大丈夫だ、うん。私は大丈夫」

「大丈夫なら私の腹から頭を退けてくれないかな？正直に言ってなんか暖かい液体でぐずぐずに濡れてるから服を変えたい」

「やだっ！う、動いたら炎喰いの刑だぞ?!」

「……………ほんとに胡桃お前なんて言ったんだ」

「あー、えっと…、深い意味はなかったんですけどー」

胡桃回想…

『十分たっても戻らなかったらせんせーに何かあったかもだから呼び鈴鳴らしてー』

……………

「って言っちゃいましたねえ」

「言っちゃったかこのおあほ…」

「悪気はなかったんですよ」

「七七くん氷喰いの刑発動」

「顕現せよ」

「ひゃっ！服のにやかに氷がちべたっ！」

「悪は裁かれた」

「グッジョブ七七くん」

「うわあ…」

顛末としてはこうだ。

煙緋来訪↓胡桃襲来↓胡桃失言↓15分経過↓今に至る  
胡桃が悪いわ。

「も、もももーもももしかしてこれは、いやそうだそうだよ間違いない！本物の：稲妻国主武甕雷神雷電將軍此証乃印の本物じゃないか!!!すごい、すごいよ芥川君っ!!一体どこでこんなもの手に入れたんだい!?!?」

「今朝届いてたんだ。何でも、謁見の勅願だとかで」

「わはー！流石は私の弟子だー！こんなものを見せてくれるなんて！師匠想いだなこのこのー！」

「師事した覚えはないんだけどね？」

「この調子で精進したまえー！そしたら、きつと！レアなお宝（法文書）といつか会い見える事がっ!!!」

稲妻の手紙を見せたら一瞬で元気になりました。

マジかこの人、チヨロすg（ry

「に、してもだ。今日は一体なんの要件で来たのかな、煙緋さん。いつも法学の顧問として今日は呼んではいかなかったと思うけれど。…もしかして、この悪戯小娘みたく、何も無いけれど会いに来てみた、みたいなお事だったりするのかい？」

「むう、このお騙しちゃんと一緒にされるのはごめん被りたいのだけれど、確かに私は芥川くんに会いに来てただだよ。…なんだよう、用

がなければ会いに来てはいけないのかー?」

「誰もそんな事言っていないだろう、君が来てくれることは素直に言って嬉しい事だよ。さて、少し待っていないなさいな。お茶を沸かしてあるから汲んで来よう」

「ふっふーん、君のお茶は妙に味が良いから好みなのだよ! コレならば、私が仕事帰りに買ってきた稲妻菓子を輝かせる事ができるかもしれないねえ。うんうん、予想外の出来事もあったが、稲妻国主武甕雷神雷電將軍此証乃印も見られたし、ここにきた甲斐があったと言うものだね!」

「ぼ、僕も頂いても構わないだろうか? 稲妻の甘味には前々から興味があつたのだが、食べる機会が全然取れなくて…」

「勿論だとも! この私が芥川くんに会いに来た幸運に感謝したまえよ?」

「え、煙緋ちゃん! 私もほs」

「おあほさんはお仕置きとしてお菓子抜き。是非もないね」

「煙緋ぢやあああん!! ごめんなさいお菓子食べさせてくだじやいい!!」

「いやあげない」

「うわああああん!!!」

「……わけがないじゃないか。なあんで悪戯には過激なまでに勤むのに、妙ちきりんな所で過敏に反応するのかなあこの娘」

「以前に僕、聞いた事があるな。妙なところで心臓が萎縮して大胆な事が出来なくなる人のことを、稲妻の言葉で確か、『チキン』と言うらしいね? 物音に敏感な鶏のように見えるからと言う事らしいけれど…、胡桃は所謂チキンと言うやつなのかもな」

「重雲ひどいつ?!」

「よし、全員分淹れてきたぞー。そうだ重雲。そういう人間を指す言葉の類義語に、直ぐに人から離れることから晶蝶の心臓と言うこともあるぞー。この胡桃の例をみて覚えておくといい」

「はい先生!」

「せんせーい!! ひどいよー!!」

「煙緋さんを困らせた罰はコレで済ませよう。反省しなさいね」

「はんぜいびまふ」

「草」

「七七くん辛辣だねえ…。さて、じゃあ少し早いがお茶会でしょうかな」

昼食が大層遅くなったのに乗じて、多めの甘味を摂ることでの代用兼オヤツにしてみよう。不健康にしか思えないが、コレが美味しいのだから世話が無い。

七七くんに関しては、今日の夜も私と行動を共にする事が確定している。なので必然的に、夕食も共にすると言うことになるので、今回の昼食はこの甘味とお茶で我慢してもらおうことになるが、仕方がないだろう。夕食を沢山食べてもらいたいから、私としては別に問題は無いし、そもそも先程私に昼ご飯を控えめにする頼んだのは七七くん自身である。

『あ、せんせい、昼ご飯少なめにする』

『胡桃の上に登頂しつっ言うことでは無い気がするけれど、了解したよ。じゃあオヤツをその代わりにする形でいいかな』

『問題なっしんぐ』

『一体キミは何の影響をうけてるんだ？』

『七七くんの謎電波受信は茶飯事だから、慣れておくといいいよ？』

『おあほさん、お仕置き終わってない。センポウヒラケ』

『ぶっつっつっつめたっつ!!』

胡桃は…死んだか。まあ、いい奴だったよ…。

兎に角、本日は私が用意した甘味、『桜餅』と『抹茶クリームケーキ』、煙緋さんが盛ってきてくれた『桜団子』をお茶会の茶請けにする。桜餅は市販のものだが、抹茶クリームケーキは自作なので、感想が欲し

いところだが果たしていかほどののだr「うつつつつまあああああ  
ああああいいいいっつ!!!」∴問題ないらしい。安心した。



## 第n回 璃月若人お泊まり会 四

第n回 璃月若人お泊まり会 四

—————

なんだって?! モンドーの偵察騎士で飛行チャンピオンでもあるあのアンバーを知らないのか?! (くそデカボイス)

…ダメだ、そんなの、損してる!

具体的にあのモンドの風立ちの地の大きな樹が芽生えてからあんなになるまで育つくらいの時間と同じくらいのナニカを損してるな!

そうときまればこの私がアンバーのすごいところを一から説明してやる!

まずはな…

—————

夕ご飯といわれれば、まずどういうものを思い浮かべるだろうか。候補はいろいろある。

香辛料の芳しいスメール料理はどうだろう。カレーやシャワルマサンドなどの脳髓に心地よい刺激を与えてくれる料理である。

口に良く馴染み安心感すら与えてしまうモンド料理も良いかもしれない。風神ヒュツポツトや鶏肉のスイートフラワー漬け焼きなど、深みのある味わいを堪能できる料理である。

三千年以上もの間に培われた玄人の技が光る璃月料理も捨てがたい。麻婆豆腐や杏仁豆腐など、独特かつ癖になる味を恣にしている料理である。

複合する味同士の間が繊細かつ鮮明に現れる稻妻料理も悪くない。獣骨拉麺や握り寿司など、単純に見えるがその奥に芸術とも言える味の協奏を楽しむことができる料理である。

無論、厳しい寒さを生き抜く人の力を彷彿とさせるスネージナヤ料理も、闘争の国に相応しい熱い血の煮えるナタ料理も、大味に思えるがどうしても癖になってしまいうフロンティア精神溢れるフォンテーヌ料理も、選ぶのを控えるようなものではない。

どんな料理を選んでも、きっと私は喜び勇んで頂くだろうし、今日ここに泊まる皆も、苦手なものではないならばきっと沢山食べてくれるのであろう。

となると私が選ぶべき選択肢は、大人数で、騒ぎながらも満足できるような料理、となるわけだ。

ふむ、じゃあこれが良いだろう。これなら、各人で味を変えることができるし、材料さえあればいくらでも作り直せる。

そうと決まれば早速、材料を買いに行こうかな。

「とういこと夜ご飯の買い出し一緒に行く人募集」

台所で冷蔵庫の中身を確認したあと、足りないものを市場に買いに行くべく外出することになった。重雲の体温調節に使う霧氷花は冷蔵庫に保存してあったので問題なかったが、野菜やら調味料やらが全然足りなかったのである。

まず真つ先に手を挙げたのは…、七七くんか。

「せんせい、外ではもしかしたら大雨とか大雪とか大七七が起こるかもしれない。七七を連れていくべき」

「今晴天なんだけど。それと大七七って何さ？」

それ大波を少しいじっただけだよ。

「せんせい知らないの？一週間に七十七回くるあれ」

「いや多いね?!皆目見当もつかないなあ」

「ちなみに七七は生きてるだけで大七七。でもキョンシーだから大七七じゃない。せちがらい」

「おつと災害名ですらないのか。しかもそれに対する感想がややこしいでもなく世知辛いなのも謎を深める一端だね」

疑問が深まるばかりである。これは、璃月七七不思議（注釈：七七の不思議だから七七不思議。七不思議とは言っていない。）にカウントされる一件なのだろう。

「芥川くん、私もついて行ってもいいかな？」

大七七の摩訶不思議に宇宙を垣間見ていると、何故か上下に小刻みに揺れる七七くんを抱えた煙緋さんから申し出があった。…何をしているんだろう。

「外なる理に触れたくないから敢えてそちらには言及しないでおくれど、煙緋さんが一緒に来てくれるとなると心強いな。よろしく頼むよ」

「ふふん♪任せてくれたまえ、正直法律家の天職がこの買い出しの何に役に立つのか分からないけれど全力で君を手伝おうじゃないか」

確かに法律家という肩書きが買い出しの何かに役立つとは思えない。別に何もせずとも付いてきてくれるだけで嬉しいし、話し相手になつてくれればそれでいいので、何の問題もありはしないのだけだ。ど。

「僕も手伝おうかな。ほら、これだけの人数の夕飯を作るのなら買い出しの量も相当になるのだろうか？荷物持ちを買って出るよ」

「ああ、ありがとうね。確かにモノが多くなりそうだったから、すごく助かる」

重雲もついてきてくれるということなので、割り増しで物を買つても問題がなくなつた。やはり持つべき物は頼れる友人なのだ、再認識せざるを得ない。

と、そこで。

不意に胡桃が立ち上がり、私の目の前までニヤニヤとした不敵な笑みを浮かべながら近づいてくる。

そして今にも鼻先がくつつく、というところで立ち止まる。

もちもちと柔らかそうなその顔を、私の耳元に近づけて。

「買い出しの荷物持ちをW買って出るWおもしろーW」

「阿呆なことを言っているんじゃないよ。そういうお前はついて来るのかい？」

「うんにゃ、私は待つておくねー」

胡桃は馬鹿みたいなことを言ったあと体を離し、小さく笑うと留守番をすると言い出した。

「…物壊さないでくれよ」

「ちよつとー!!いくら私でもそう易々とものを壊したりなんかしないってー!せいぜいせんせーの筆箱のペンのインクを入れ替えるくらいしかしないよー!」

おいばかやめろ。それは割と真面目につらい。

「阿保、ペンの色間違えるだけで原稿一枚おじやんになるんだから、やらないでくれよ」

「ふっふーん！まっかせといてー！せんせーは安心して買い出しに行つてくるといいのだ！」

安心？一切できない。嫌な予感しかしない。：けれど、只管一辺倒に信用しないのも良くはないだろう。

「…わかった。じゃあ留守番頼むよ。いつてきます」

「ふっふーん、いーつてらーっしやーい！」

—————

雲ひとつない青空も、流石に夕方ともなれば状況が変わっているように、白く筋のように走りながらその腹を木通色に染めている雲が、夕日に染められて少し柔らかな赤みを帯びてきている空を数匹で泳いでいる。

胡桃を置いて買い出しに来た私たち、七七くん、重雲、煙緋さん、そして私の4人は、家を出たのちにまず下にある市場に向かうことにした。

のであるが。

冬も深まってきてもうすぐで新年を迎えるという時期である。炎元素だから寒さに弱いのだと自称する煙緋さんが、すぐに震え出した

のは言うまでもない。

「ひゃー！すっかり肌寒くなったものだねえ！このまま行くと、海灯祭の時期には雪でも降るんじゃないかと考えてしまうよー！」

「そういえばここ数年ほど雪を見ていないなあ。多分分らないだろうけれど、雪がこの璃月港に降り積もったなら嘸かし綺麗なんだろうね…」

「というかあれちよつと待ってくれ寒すぎやしないかヤバイめっちゃ寒いでしょう」

最後には崩れたが口調は比較的余裕そうに、それでいて仕草はふるふると小刻みに震えて。七七くんを懐炉代わりにひっしと抱きながらそう呟く煙緋さんの言葉に、私は雪に対する想像を膨らませる。

最後に雪を見たのは、一斗兄貴と共にドラゴンスパインまで冷凍肉を狩猟しに行ったときであったか。懐かしいな。

あの時、煙緋さんに教えを乞うているという、彼の部下のお嬢さんを迎えに来たらしい彼と意気投合し、極上の獣骨拉麺を食べたいということで、彼と、丁度暇をしていたらしい香菱と、雪山の調査中の部下と情報共有をするついでということに着いてきてくれたタルタリヤ、あとは薬剤の素材でどうしても採取しておきたいものがあつたらしい白朮師の5人でドラゴンスパインに向かったのだ。

紆余曲折ありながらも、かなりの数の冷凍肉を手に入れたのだが、突然現れた超巨大猪とどうやって動いているのかいまだにわからないう氷の構造物に襲われ、血湧き肉躍る（タルタリヤ談）激闘を繰り広げたのは今でも色褪せない思い出である。

—————

「ハハッ！いいねいいねいいねえ!! 凶体に見合わず俊敏に動く大猪に氷の冷たさを体現したかのような巨大構造物、倒し甲斐があるつてものだよ！嗚呼！芥川！君についてきて正解だったよ！こんなに楽しい闘いは久々だ！」

「おっ！タルタルソースのアンちゃんも頑張ってんじゃねえか！これは最強最大震天動地と呼ばれたこの俺様も負けちゃあいらんねえ！ところで盟友よお、俺様最強の考えを思いついちゃったんだ。このデカ猪の肉も持って帰ったら、獣骨拉麺がたらふくに喰えるってえことだよな?！」

「やれやれ、ここまで大きく運動する予定はなかったのですが、仕方がない。この無相の氷の核は良い保冷剤になるんです。少々本気で片付けてやるとしましょうか」

「うう…、雪山に少し足を運ぶ位なら大丈夫かと白朮に付いてきたのが間違いだったよ！こんな化け物に出くわすなんて聞いちやいない！ああもうへビは変温動物なんだよ畜生！畜生は私だったよこん畜生ッ!! やい香菱！もつと温めてくれ！死ぬぞ！私が！」

「ちよ、無茶言わないでよお！ただでさえすばしっこい猪とすっこい冷たい攻撃をしてくる氷の塊に邪魔されて全然炎を出せないんだから仕方がないじゃんか！そんなに寒いんならグウオパーみたいになら唐辛子でも食べて火を吹いて温まったらいいじゃない！」

「へビの敏感な舌を壊す気かこのアホエエエツツ?！」

「だーっはっはっは!! へビ野郎もちくつと我慢してくれや！すぐに俺様たちがこいつらをぶっ飛ばしてやるからよ！さあて盟友！俺様たちの極上獣骨拉麺はすぐそこだぜ！牛雄オ！気張って行くぞお!!！」

「モオ」

「アツハハハハハハハハハハ!!!! そんな物じゃないはずだ！もつとだ！もつと俺を楽しませてくれ!!!!」

あの後に璃月に帰って食べた獣骨拉麺はそれはもう美味しいものだった…。

そういえば、稲妻の鬼に会うのはあれが初めてであったが、まさかここまで気持ちの良い御仁だとは思ってもいなかった。

部下のお嬢さんは少々言葉の荒いところはあるが、気配りが上手で優しい少女であったし、一斗兄貴の言う荒瀧派というのがどれほど良い一派なのか実際に見て確かめてみたいとつくづく思っている。

その時の冒険を、一斗兄貴の了承を得て彼を主人公にして、筆致を巡らせて本にした、『荒瀧豪傑伝・雪山物怪征討篇』は、何と璃月にて演劇化される計画まで上がっている程に人気を博し、今では私の人気シリーズ物の一つとしてティワット中に知られている。

ちなみに、一斗兄貴の名前使用代として少量（小説売り上げの総量に比べて）のモラを彼の部下のお嬢さん、久岐さんに毎月送っている。毎月届くお礼の手紙の内容の舞い踊り具合に、大変喜んでもらえているのを感じて微笑ましく思っているのは彼らに言っていない秘密だ。

冷凍肉自体は雪山での戦闘に味を占めたらしいタルタリヤがたまに狩ってきてくれるので割と在庫はあるのだが、一斗兄貴が帰国した直後から鎖国が始まった稲妻にいる彼と久岐さんとまた会えるのは恐らく、私が何かの拍子に稲妻に向かった時になるだろうと思うと、いいもしいれない懐かうしさと寂しさを感じてしまう。

そんなふうに懐かしい思い出に意識を浸していると。

前につんのめるような感覚と共に小柄な何かが前からくっついて来る。



「…何をしているんだ君たちは。歩きにくいだろう?」

「ふふふふはははふふふはは! 私は考えついてしまったんだ! 後ろを芥川くんで塞いで前を七七くんで温めれば寒くなることは絶対がないってね! 案の定あつたかい! やはり私は天才だ!」

「天才とかいて紙一重のあっちがわとよむ」

身動きの取れない七七くんの言う通り、紛れもなくあっちがわの所業である。衆目も外聞も恐れない、冒瀆的な所業である。寒すぎて頭が阿呆になったのかも知れない。

頭の正気度がぶつ壊れた煙緋さんを大いに憐んでいると、呆れた様子の子の重雲がもつと接触面を増やそうと猫のように軀を私に擦り付けている煙緋さんにツツコミを入れる。

「その結果周囲からどう見られるかについて少しは考えなかったのか?」

「大丈夫だ重雲! コラテラルダメージ!」

「エモーションナルダメージだよこの阿呆…。ほら、煙緋さん。そんなに寒いのなら私の外套を羽織っていなさいな。まったく、寒いのが苦手ならそんな薄着でいなければいいことなのだけれどね? お洒落は我慢だとはよく言ったものだけれど、それで体調を崩すのは尚のことよくないんじゃないかな」

自らをオシヤレに見せるのもいいが、服飾の大前提とは身体を暑さ寒さから守るということ。これはこれで可愛らしい気もするが、それはそれとして寒がっているのを眺めて喜ぶというのも趣味が悪い話である。

しかし、こう、私の外套を着せていると…、何というか…

「着られている感がすごいな」

重雲…、私が思っても言わなかったことを…

案の定、煙緋さんは多少マシになったぐるぐるおめで重雲に反論する。

「にやにおうー！これは芥川くんの外套の丈が長すぎるのがいけないだ！私の背が小さいとでも言いたいのかー！」

「まあ、有体に言えばそうなんだが」

いや正直だね重雲?!

「うがあー！これは私の背が小さいのではないぞお！芥川くんの背が高すぎるのが悪いんだ！そうだろう芥川くん、君が悪いんだよ！」  
「えんひ、七七より背が高い。贅沢言うな」

七七くん辛辣だねえ…。

「ううー！七七くんがいじめてくるよー！良いじゃないか別に背が高いのを羨んでもー！」

「七七、キョンシー。もう背が伸びない。胸も大きくならない。たいへん贅沢」

あ。

「あっ…」

「ふん、わかればいい」

「ほら、背丈談義はその辺にしなさい。もうすぐ市場につくよ」

「はい」

「わかった」

――

璃月港の市場には、良いものが揃う。魚介でも、野菜でも。鉱石だって上物ばかりだし、文物絵画その他諸々、下らないものがないのである。

それもそのはず、そもそも『下らない』という言葉の語源が、稲妻の文化で璃月に行くことを『下る』、璃月から出ていく事を『上る』と言うことからきている。

下らないもの、即ち『璃月に向かう事がないくらいに品質の良くないもの』。

裏を返せば、稲妻の古人は璃月に行く、下るようなものは総じて質のいい、上物ばかりであるという事を了解していたということになる。

これは鍾離の口癖だが、璃月という土地環境そのものが流通に適しているので、スメールのオルモスの港や稻妻の離島などの交易拠点とは一線以上の区切りを画す流通拠点として、璃月港はあらゆる富の沈着する場所として際立っているのだという。

帝君並みに契約を重んじるといっても過言ではない彼にとって、盤石なる契約の国璃月は碧玉にも勝る至宝であり、同時に誇りでもあるという。

今朝も訪れた場所に再度訪れることになるとは思ってもいなかったのであるが、その意に反して私たちお使い組の一部はそんな鍾離が客卿を務めている往生堂にまた来ていた。

一部、と述べたのは、お使い組の中でも私の家に来た時には宿泊する予定がなかった煙緋さんと重雲の2人が、折角だから夕食後もお話したいという事で宿泊用意の一式を家に取りに帰ったからである。

よって、現在往生堂にて玄関の戸を叩いているのは私と七七くんだけであるということなのだ。もつと言えば七七くんだけである。私は門戸を叩いていない。

いかにも璃月港の昼間に聞こえてきそうな音楽のリズムに合わせてような感じで、拍子良く扉をノックし続けていた七七くんは、突然に顔をこちらに振り向かせてきたかと思うと、無表情でありながらそれでいてどことなく口角をわずかに上げて（いるような雰囲気を漂わせて）、ボスから電話がかかってきていそうなポーズをとりながら言った。

「ぜびゆる、あけろす騎士団だー」

「七七くん？文字が一部入れ替わっているよ」

まあ仮に文字の整序を調べたとしても、そもそも私たちが西風騎士団ではないというツツコミも入るのだけれど。

「ふははは、素数を数えて落ち着きながら扉を開けるがいい」

「なぜ脅しを入れているんだ…」

「2、3、5、7、7、7、7、…あれ？」

「あ、君が数えるんだね?!」

こんなトンチキなやりとりをしながら、一度来たはずの往生堂に来ることになってしまった経緯を思い返していた。

-----

食卓を囲む 一 に続く!

一章 モンドを描く、文字の舞（仮）  
モンド編 予告話（話の脈絡とか）ないです

一章 風と共に去りぬ

予告編

一話 取材はどこか小旅行に似ている。

で、結局。

きみさ、この世界には何をしにきたのさ。

大方、人生を楽しみに来たんだろう？

遠方への取材は、いつやっても楽しいものだ。

今回は、遠方といえど隣国のモンドに行くのだが。

しかし、璃月とかけ離れた雰囲気を感じている国なのは間違いない。

私は、璃月と陸続きではあるはずだが、なんとなくモンド城の門をくぐると別の世界に入った感覚になる。

…とまでは言わないが、宛ら旅行の様に浮き足立つのは否めない。

旅行の醍醐味という話になると、宿泊に票が多く入ることと思う。普段自分が生活するところとは違う、別な場所で寝泊まりをする。宿泊とは、旅行の非日常性を体現していると言っても強ち間違っていないだろう。

景色が違う、気質が違う、寝具が違う、行動も違う。

何もかもが、違う。

何が起こるか、真に予測することは出来ない。

旅行を旅行たらしめる、非日常たらしめる大きな要素こそ、宿泊なのであろう。

閑話休題。

中々に長期間の滞在ということもあり、私は今回宿屋に宿泊するのではなく、町外れの家を借りる事にした。

思い切った事をしたものだ、熟思うけれど、これも取材の一環である。

実を言うと、今度私が書くこうとしている話が、穏やかな日常生活を軸としたものなので、主人公の生活描写を細やかに表現したいのだ。

そのために、モンドの穏やかな暮らしをある程度長めに体験してみよう、と思い立ったというわけだ。

現在私は璃月在住であるが、やはり色々な地域の生活を参考にした。い。

資料は多いに越したことは無いのである。

ただ、昨今稲妻は鎖国中であると聞いているし、スメールに関してはずまず宿泊先が取れずに断念。

ここ最近璃月と良好な国交を築いているとは言い難いスネージナヤは論外であるし、水の国や火の国についてはそもそも穏やかな日常

を過ごせる環境とは言い難い。

まあ、本音を言えば、スネージナヤには熱心なファンが数人いるので、何かの機会に行ってみたいとは思っているのだが。

テイワット情勢は頓に複雑怪奇である。

そんな訳で今私が荷解きをしているのは、極上の酒を振る舞うことで有名なバーテンダーが居るといいう酒場、キャッツテールの裏の家である。

余りにも好条件にすぎる立地だと感じざるを得ない。

情報収集にうってつけな市場や冒険者協会、モンドの住民の日常を彩る様々な酒場に食堂、現地の民と談話することのできる噴水広場など。

ありとあらゆるものが近くにある立地なのだ。

小説家にとって、こんなに良い家はないだろう。

いつそ別荘として購入してしまおうとも考えたのだが、この家の維持をするだけの維持費を掛けられないので、辛くも断念した。

もう少し収入が増えれば、是非に購入したいと思う。

「さてと、取り敢えず荷物はこれで全部か…」

「せんせー!!!お風呂にお湯溜めたいんだけどー!このお風呂どうやってお湯出すかわかんないよー!」

「あー、胡桃まっっているー!すぐそっちに行く!」

「芥川、この本のこの行は解るかい?君の見解が聞かせてほしいんだけど」

「ちよつと待ちやがれ今の会話聞いておけよ行秋。胡桃の用事が終わったから見やるから大人しくその机で座っていてくれ」

「せんせ、体操、終わった。昼寝するから、せんせの部屋、教えて」

「おやおかえり七七くん、私の部屋はその風呂場の真前だ。部屋に入ったら着替えが揃っているか一応確認しておいてくれ」

「せんせー!!!昼ご飯作つとくよー!取り敢えず四方平和でいいよねー?」



「ああ！ありがとう香菱！今日の夜ご飯は私が隣の酒場で外食を奢るから昼ご飯に足りる量だけで構わないぞ！」

「ふむ、芥川殿。この棚に拙者の本を数冊置いて良いでござるか？居間でゆっくりと読みたいと思っただけでな…」

「万葉か、そこなら全員分の小物を置いていくところだから基本何を置いても構わない。確か、衝立が棚の一番下の段にあったはずだから使ってくれ」

「せんせー!!!なんか沢山泡でできたあああにやつつ!!!…いつたあああああああいいつつつ!!!せええんせえええええええええ!!!」

「待てと言われたら大人しく待てぬのかこの緩々阿呆!!!もう行くから大人しく待っている！」

…実は此処で一ヶ月過ごすのは私一人だけではないのだ。

風神信仰とモンドの文化を学びにきた、と見せかけて余りにも過労が目に余るので鍾離から休みを押し付けられた胡桃。

何となく面白そうだからということで、仕事を向こう一ヶ月分以上終わらせてホイホイ着いてきた行秋。

特に理由はなさそうだが、話によれば『寂しがっていた』（白朮師談）から着いてきたという七七。

料理の修行の一環で同行することになった（親公認）香菱。

次なる旅の目的地としてモンドを選んだらしい、北斗女傑の船団の船員、楓原万葉。

私を含めて六人の人間で生活することとなっている。

まさかこんなに大所帯となるとは考えてもいなかったが、まあ問題はないだろう。

—————

モンドの生活には、BGMが着いている。  
ゲームじゃないんだから、とかではない。

稲妻で最近流行中の軽小説の世界じゃないんだから、とかでもない。  
い。

街の活気、人々の喧騒。

その波長に混じって、毎日毎時、何処かで吟遊詩人が演奏をしているのだ。

なんとも無しに、聴いてみるのもよし。

近くに行つて、彼ら彼女らの声と音を耳に馴染ませるのも良い。  
気紛れに、お捻りを投げてみるのも悪くは無い。

生活に、何か音が付録する。

そんな生活が、モンドの代名詞。

牧歌。自由。風雅。無垢。

風立つ地。蒲公英の如く柔らかな空気。

爽やかなセシリアの薫り。酒呑み特有の陽気な態度。

いやはや…。

モンドを言葉に落とし込むには、まだまだ私の語彙では追いつかないようだ。

それもそうだ。当然のことだ。

なにせ、長年住んでいる璃月の事を言葉に載せることすらもまだ出来ていない。

そんな私が、住み始めてまだ一週間も経っていないモンドのことを言葉にしようとする、不自由を感じるの、道理の叶っていることである。

しかし、分不相応にも。

この不自由さが、言葉の足りないもどかしさが、不思議にも、心地良いとも感じている。

まだ、モンドには私の知らない事が眠っているのだ、ということ。如実に私に訴えてくれているような気がするから。

「…フフ、未だ一日くらいしか此処に滞在していないというのに、僕にはこのモンドの心地よさが理解できるような気がしているよ。まあ、具体的に表現しようとすれば、僕には土台無理なだけけどね。全く、自分の語彙の少なさが恨めしいな」

「でも、それがいいんだろう?」

「勿論さ。この感情こそ、僕が書を嗜む者である証拠でもあるから」

「言葉を扱う腕を、どれだけ磨いても足りない圧倒的な焦燥感。私がとても好きな感覚なんだよなあ」

「センサー、変態だよ」

「ぶー、アタシだって、この綺麗な街並みを言葉にしようとしてもなかなか出来ないむず痒い感じ、わかるもんね!」

「仲間はずれ、寂しいの?」

「にやあああああ!!ち、ちがわい!」

「どこの言葉よそれ」

騒がしく喋り合いながら、モンドの街を練り歩いているのは、私を含めたキャッツテール裏六人衆…の内の五人である。

向かう先は此処の名所、モンド城教会。

風神を祀っていると言う建物を、みんなで見に行こうという話だ。

ついでに、風神に、モンド滞在の報告もしようかと思う。

ちなみに。

現在ここにいない稲妻出身の浪人は、昨日キャッツテールにて開催した共同生活決起の宴会にて、勇敢にも、名バーテンダーデイオナくん（夕方に行ったので、普通にカウンターに立っていた。これが夜であれば、大体お父上の下へ帰っているのである。）の作成したカクテルを一气飲みし、そのまま気絶。

翌朝、部屋にて具合を確認すると、二日酔いになっていた。外出もなるべくやめておきたいとのことだったので、家に置いてきた、というわけだ。

曰く彼は、異常に酒に弱い体質であるのだそう。

だが、初めてこの六人で宴会をしているので、酒を飲まないという選択肢は取れなかったのだとか。

稲妻人特有の、類稀な人付き合いの良さが垣間見えた瞬間である。

余談だが。

万葉が倒れた後の話。

ディオナくんは、今回のカクテルに何を入れたか聞いてみた。

「おともだちのクレーからもらった、バクダンになるまえの薬の素と、朝に、ちよびつとだけ残しちゃった、ピーマンよ。この私でさえ、食べられないんだから、あの人が転がっちゃったのも仕方がないわね！」だそうだ。

ディオナくん。

ちがう、そうじゃない。

爆薬の素は、食べ物に入れる物じゃあ、無い。

無いっつらない。

万葉が、妙に体が暖かいとか言ってたの、多分その薬の素の所為だ。

あかんで、ほんま。

長野原弁、出てまうわ。

別に出身あそこちやうけど。

あとな、ピーマンな。

ちやんと食べや、知らんけど。

「…なあ、胡桃」

「んー？どしたのセンサー」

「いや、なんだ。…爆弾は、食べたらいかな」

「え、そりやそうでしょ」

「だよなあ…」

…万葉、災難な男である。

—————

「やあやあこんにちは。モンドへようこそ。君達は、このモンドに、観光目的で来たのかい？」

「はい、一ヶ月ほど、キャッツテールの裏の家を借りて、住まわせてもらおうと思っております。」

「そうかい、それじゃあ。一ヶ月という短い期間ではあるが、その間は我らモンド人の同胞というわけだ。宜しく頼むぜ、同輩諸君」

「こちらこそ、どうぞ宜しくお願いします」

五人で喋りながら、モンド城の上層部を目指していると、前からやってきたどうにも胡散臭さが拭えないスタイリッシュな男性が声を掛けてきた。

独特な言い回しで親愛を伝えてきた彼は、もしや初めて来た土地で感じていた私達の緊張を解そうとしていたのだろうか。

だとしたら、ありがたい限りだ。

「おっと、自己紹介が遅れたな。俺はこのモンドの守護を司っている組織、西風騎士団の幹部、騎兵隊長を勤めている。名はガイア、ガイア・アルベリヒ。まあ、気軽にガイアさん、とでも呼ぶといいさ。ご同輩、改めて、宜しく頼むぜ？」

「何かこの街で過ごす上で、わからないことや聞きたい事があるなら、そこにある西風騎士団に伺いを立てるといい。図書館や研究室もあるから、いつでも気軽に来てくれよう？」

「それじゃあ、俺は団長代理直々のお仕置きから逃げた同僚を追いかけている途中だから、この辺で失礼するぜ。では諸君、風と共にあらんことを」

そう、捲し立てると、彼は、モンド城正門の方に走って行った。

――

幕間の物語（パクリじゃないよ）  
ニイロウ一凸記念話

ニイロウ一凸記念話

米 軽度の過激な描写が含まれます（？）

恐らく賛否両論です。後書きの言い訳を見てください。

オニイサンユルシテ：

「端的に言うね！私、貴方の大大大ファンなのっ！」

「：おやおや、スメールを代表する舞踊姫、ニイロウさんまでも私の本のファンであると言ってくれるとは。私の小説も、存外にも立派なものになってきたということなのかしらん」

「うふふっ、貴方の小説は、いつも私の心をキラキラさせてくれるんだ！子供たちも、貴方の本を読んで、みーんな笑顔になっているわ。貴方の物語は、私にとって、夢を見ることがない私たちに、夢と希望を与えてくれる、最高の宝物なのよ！」

「アツハハ、そうまでして好評を並べられると、ちよつと照れてしまうよ。しかし、夢を見ないというのは、手前勝手な所感だけれど、やっぱり悲しいものだと思うね。そうだな、うん。君の言うように、夢を知らぬ人に夢を与えられるのが私の小説なのだとしたら。私のやってきた仕事は、やっぱり間違いでない、良い行いだっただと、言っ

てしまっても構わないのかもしれないね」

「うん、うんっ！全然、構わないよ！」

「君は本当にキラキラと笑う人なんだね。とても、眩しいひとだ。スメール風に言うなら、『砂漠に輝く星のように、森で輝く晶蝶のように』夢見心地に眼を照らす。そんな笑い方だよ」

「そ、そんなこと言われたら、照れちゃうよう…」

「ハハ、さっき私の事を照れさせてくれたお返しだよ。一端の文学者として、文字で喜ばせることで負けるわけにはいかなかったからね。どうか、一矢報いられたかな」

「もうっ！いじわるー！…あの、あのねっ！取材しに来てもらったのに、私のことばかり話してるのになんだってとこなんだけど…で、でもねっ！もーっと、話したいことがあるの！」

「はいはい、私は今日はここに取材に来たんだよ。逃げたり消えたりしないから、ゆっくり、落ち着いて。自分のペースで話してごらんなさいな。」

「う、うん！よーし、頑張るよニイロウ！ええつとね？私！」

「なにか、言つてごらん？」

「貴方のこと、大好きみたいなの！だから、よかつたら、お友達になつてほしいな！」

「…はい？」

「…あ、あれ？なにか、おかしい事言つたかな…？」

「…ニイロウさん、一旦深呼吸してごらん？ほら、息を大きく吸って。そう、そしたら、細く、ゆっくり。胸のざわざわを掻き出すように、息を吐くんだよ。そうそう、よくできました」

「ふう、確かに落ち着いたけれど、何かあったの？周りのみんなの目が



凄いことになってる気がするけど、私、何かヘンなことしたのかなあ？」

「そうだね、確かにすごいことかもしれないねえ。ニイロウさん、さつき言った言葉、思い出せるかな？できれば、一言一句漏らさずに」

「え？えつとお、『よかつたら、お友達になつてほしいな』？」

「うーん、じゃあ、そのもひとつまえはどうかな？」

「もひとつ？うーん、えーつと、『貴方のこと、大好きみたい』…、くッ!!!びぎつ?!」

!!!

「大丈夫、大丈夫だよ、ニイロウさん。君のことを揶揄ったり弄ったりする人は今はいないから。ほら、落ち着いて、さつき言ったように深呼吸して見てごらん。息を大きく吸つて？」

「はひっ、ぴう、へひゅっ、かひゅっ、ひーっ、ひゅいつ、ひぴっ、きゅっ、」

「…過呼吸か、不味いなコレは！ねえ！その狼の冠の君！水を持ってきてあげてくれ。そうだな、かなりたつぷりめに持つてきてほしい！頼むよ！」

「ああ、了解した。人命がかかっている。すぐに持つてこよう」

「それで、そこにいる赤い獅子の貴女！」

「え、アタシ？何をすればいいんだ？」

「タオルか布かを濡らしてから絞つて持つてきてほしいな。お願いするね。」

「了解！」

「それからその冠の貴女、いまから私がこの子を介抱するけれど、私が疾しいことをしないか見ていてほしいんだ。大丈夫、ただの保証人つてだけだから。よろしく頼むよ。…ニイロウさん、隣失礼するよ。はい、私に掴まって。そう、大丈夫。背中をさすつてあげるから、ゆっくり、そうゆーつたりと、水のように、風のように、草の香りのように、柔らかな日差しのように、あなたはだんだん穏やかな息吹を

取り戻していくよ。さあ、怖くないからね、私がそばにいてあげるから、私の他にも、そのー、えっと、お名前は？」

「あつ、ドニアザードですっ！」

「…そう、ドニアザードさんも。ここにいてくれるから、怖くないよ」「えひっ、ふゆっ、はへ、ひいつ、あい、ぴいつ、うえっ」

「そうら、大丈夫。怖くないよ。苦しいなら私にもたれていいからね、そう、きつと踊りの練習で体が疲れていたのに、急にびっくりしたら、身体もびっくりして引き攣っちゃったんだろうね。でも大丈夫だ。こういう状況には慣れているから、安心なさいね。ほーら、落ち着いてきただろう？辛いだろうからしがみついていなさい、頭がチカチカするなら顔をここに埋めているといいよ。楽になるからね、心臓もびっくりしてたのが落ち着いて来るはずだから、ゆっくり、ゆーっくり、そうだ、よくできているね。ゆーっくり、体を休めて落ち着かせていきなさい」

「ひ、ひゆ、ふいー、ひー、はー、ひあー、」

「作家殿、水瓶とコップを持ってきた。これ位でいいか？」

「イクザクトリイ、最高の仕事だよ。ありがとう！ついでに汲んでくれると嬉しい！…感謝するよ！ほーら、このお水を飲めるかな？口にちよつと入れて、舐めるだけでも、口に入れて、飲んであげたら胸が楽になるからね」

「んくっ、んっ、はっ、はーっ、はひゆー、あえ、はえっ、はー、」

「まだ喋らなくていい。自分の身体の手を落とせ。リズムを整えろ」

「そ、そうよ！ニイロウ！貴女はダンサー！リズムの感は並はずれているの！自分の体の中を、転調させるのよ！」

「…いいアドバイスだね、本質を射ているよ。そう、ニイロウさん。身体を整えることに専念するんだよ。怖くても、私にしがみ付いて居れば、漂流することはないから。大丈夫、私はここだよ。安心して、すぐに良くなるよ」

「悪い、遅れた！濡れたタオル貰ってきたぜ！」

「ありがとう、丁度いいタイミングだよ。そら、身体が熱くなっている

から、汗が出てきている。顔を拭ってあげるよ。…これでいいね。どうかな、だいぶ落ち着いたと思うけれど。まだ、このままでいるかな？」

「はー、はーっ、は、いつ、ごめんっ！なきひっ、ふーっ。もうちよっ、とっ！このおっ、ままで、」

「わかったよ、大丈夫だよ。じきに良くなるさ。怖くても、震えてても、私がついているから、安心して、な？」

「なんっーか、手慣れてんだな。こういう経験あんのか？」

「後で話すよ。いまは、ニイロウさんが快癒することが最優先だからね。ん？なんだい？背中をさするのかい？…お安い御用だよ。ほら、楽になってくれよ？」

—————

「…よし、まだ脈拍には不整が見られるけど、呼吸は取り敢えず安定したよ。みんな、協力してくれたこと、感謝するよ」

「いや、ともすれば人命に関わりかねなかったんだ。協力しないという選択は、俺には取ることはできなかった」

「それでも、だよ。セノ、君の迅速な行動が一早い快癒に繋がったんだ。謙遜するより、誇るべきだと思うよ？」

「…そうか、いや、そうだな。ならこの一瞬、俺は自分の行動を誇るとしておこう、どうだ？」

「……………フツ、その、なんだろうな。こう、どうにも言い難い達成感を感じているよ。兎角、治って良かったよ、ニイロウさん」

「!! そうだなっ！ 治ったとはいえ油断は禁物だ！ 少しばかり体を休めておくことだな！」

「なんだコイツ、急にテンション高くなりやがったぞ。それより、ドニアザードお嬢様。コイツ、看病にかまけて不埒なことしてませんか？ たか？」

「もうっ、デイシア！ この人の真剣な看病の仕方見てなかったの？ 断じてそんなことしてなかったわよ！」

「わ、悪い、お嬢様。いや、まあ、念の為というか、な？ あ、ほら。このニイロウもモンドのシスターに並ぶアイドルのような存在なんですから、万一の事があつては大変ですし、念の為ですよ、ええ、念の為です」

「そ、そうだったの?! 私、そうとは知らずにデイシアを詰っちゃったわ！ ごめんなさいね！」

「い、いえ。私も説明してなかったのが悪いといえは悪いですから、謝らなくても大丈夫ですよ（言えない…、普通に疑ってたなんて言えない雰囲気だ…）」

「はは、まあまあドニアザードさん。そもそも、1番近くにいたとはいえ男の私が介抱するということ自体、かなり危うい事だったんです。『念の為であれ』なんであれ、デイシアさんの対応は間違ったものではないのですよ。でも、デイシアさんが謝罪を必要としていないのですから、そう丹念に謝ることもないではありませんか？」

「…そうですね、わかりました。でもデイシア、形がどうであれ、私の友達を気遣ってくれて、すっごく嬉しかったわ！ ありがとう！」

「（こいつ気付いてんな…）：ハハ、護衛として、当然の仕事を為したまでですよ。でも、謝辞はしっかり受け取っておきます。どういたしまして」

「あ、あのう…」

「ああ、どうしたんだいニイロウさん。もう呼吸は大丈夫かな？」

「あ、うん！もう大丈夫だよ！その、不甲斐ない姿を見せちゃって、しかも看病までしてもらって、ほんとにありがとうね？」

「いや、全く問題など無かったとも。君が無事で居てくれたのが何よりの報酬だよ。まあ、こういう事には慣れてるんだ。こういうのは、苦勞のうちにも入らないさ」

「それだ、小説家の兄ちゃん。さつきははぐらかされたが、今なら聞いてもいいだろう？あんた、なんでそんなに他人の、それも若い女の介抱が手慣れてんだよ。怪しんでる訳じゃねえけど、小説家っていうには少しばかり小慣れてたからさ。気になっちゃってよ」

「ふむ、それは気になるな。この同志が一体どうしてこのような機敏な応急看護ができたのか、なかなかどうして気になる事だ（チラツ）」  
「……………ああ、別に大したことではないよ。ただ、私の年下の幼馴染が幾ら諫めても どうし てか無茶ばかりして身体をしょっちゅう壊してしまふ、まあ どうし ようもないお馬鹿な少女でね。こんな風に過勞が祟って呼吸も儘ならなくなるのもしばしばだったんだよ。どうにも、親ぐるみの付き合いたつたらしいから、放っておくこともできなくてね。 どうし ても必要だったから、身についた技術だった、ということだね。まあ幸い、私の住まいは璃月港にあるから、かの有名な薬屋、不卜盧が近くにあるものだから、そのノウハウを習得する良い機会だと思って、白朮師に応急手当を教えてもらったんだよ。そのおかげで、私の応急処置の腕はそこらの 童子 には負けな位に成長してしまった、ということだね。こういう理由だったんだけれど、納得は行ってくれたかな」

「…フツ…フハツ…！」

「ホントさつきから何だコイツ。まあ良い、そういうことなら分かったよ。白朮の名前は私みたいな一端の傭兵ですら知った名だ。ソイツに教わったってんなら、あんな手慣れた手つきなのも肯ける。なんだ、疑って悪かったな」

「まあ、結局共 同し て作業することになったんだから、問題はないよ」

「ブツ」

「……ああ、やつと意味が分かった。…えー、あー、なんだ。…あのなあ、アンタらバカかよ。真面目な話かと思っただらシヤレのぶつけ合いなんかしてたなんてな…、あーなんか一気に脱力しちゃったよ」

「え？ねえデイシア？どういうことなの？そのセノさんが急に笑いだしたのも芥川さんがさつきからニヤツてしてるのも何か意味があるのかしら？」

「お嬢様嘘でしょ?!この阿呆極まるやりとりをよりによってアタシが説明するんですか?!勘弁してくださいよ…!」

「あのね、ドニアザード、さつきからセノさんと芥川くんはね…?」

「ふんふん、…え？会話の中に『どうし』を混ぜ込んでシヤレを作っていた?…何してるんですほんとに」

「ハハ、流石に大マハマトラといえど、言葉の扱いの上では私の方に軍配が上がるらしいね。まあなんとというか、所謂小説家の本領発揮、というやつだよ」

「クツ…世の中にはこんなに面白…、強大なライバルがいたという訳なのだな…。悔しいけれど、これは完敗だな…フフツ」

「思い出し笑いしてんじゃねえよ」

「あれ？私はこのやりとりとつても面白いと思っただけれど？ねーえー、面白くないのー?」

「正気かニイロウ？嘘だろ、今のが好みなのかよ…。うっわ、スメール末期かもしれないねえ」

「(ふむ、どうやらニイロウさんはほぼ完璧に快復したらし私も、洒落は好きよ!…思考に割り込むのはやめなさいナヒーダ)さて、ニイロウさんもしつかり回復したことだ。衣服を整えて、取材を再開しようかな」

「フフツ、同志よ。また機会があれば話したいものだな。ではまた会おうツ!」

「…大マハマトラって、結構親しみやすい性格だったのかよ。なんとというか、情報は鵜呑みには出来ねえな」

幕間の物語 バザールの踊り子

「そうと決まれば早速、取材を再開していこうかな。…と言っても、私の取材は殆ど終わっているんだけれどね。後はニイロウさん、君とお話するだけだ。スメールにおいて舞踊を究める少女で、ついでに私の本のファンでもあるらしい少女との会話を、私の今度の小説の参考にしようと思っっているから、よろしく頼めるかな？」

「あ、わ、わかったよ！頑張るぞお！」

「ハハハ、すっかり元気になったようだよ。身体に巢食っていた疲労も取れたのかもしれないね？ではその流れのまま、私の右腕をそろそろ離してはくれないかな。まだ不安なのだったらこのアーカーシヤ端末に録音するから良いんだけど、取材はできることなら手で書き留めておきたいからね。どうか、大丈夫そうかい？」

「え？何を、言っ……、くくくくッ!!」

「うえっ?!ちよ、ちよつとニイロウ、なんで私の後ろに隠れるのー?芥川さんとおはなしするんでしょ?面と向かって、きちんと話さなきや！」

「だ、だっ……。なんだか恥ずかしいんだよう……」

「そんな事気にしないの!命を救ってくれた恩人さんなんですよ?お

話しするだけなんだから、張り切っていきなさいよー！」

「で、でもお…」

「…なあ、ニイロウ。大勢が観客として見ている中でお前は堂々と踊ることができていたんだ。ちよつとハプニングがあったとはいえ、たった一人との会話なんだし、何も恥ずかしがることもないと思うけどな？」

「あうあうあう…」

「もし緊張するのであれば、俺の渾身のシヤレをお見舞いしてやってもいいぞ」

「あええ？お、お願いしようかなあ…」

「なあお嬢様、大マハマトラ様がなんかめっちゃおもしろー奴になつてんぞ…」

「アレ通常運転らしいわよ」

「マジかよ…」

「フツ、任せろ。抱腹絶倒間違いなしだ。気を抜くなよ」

「なんでアイツ自分からハードル上げにかかってんだ」

「何を任せるのかしら…」

「そうと決まればこういう時のために用意していたコレを…」

「ハハ、何か小道具まで準備しているとは、期待できそうだね」

「期待どころか不安しかねえよ」



『このピタピタピタピタ』

「ブツ」

「……………ニイロウ？」

「……………ウツソだろオイ…」

「…ンフツ、どうだ、中中いいシヤレだろう？ピタというスメールの郷土料理の名称の語感を擬音語として繰り返し使用することでインパクトのある印象を押しさえつけると共に頭に残りやすいリズムを作るために敢えて文字通りのピタピタではなくピツタピタとフツツ小さいツを入れてやることで跳ねるようなリズムが頭の中に直接入ってくるような担っていてなあと単純に語の並びが面白いから最強のシヤレと言つても過言ではフツツ」

「ウケてテンション上がってギャグの解説までし出して思い出し笑いで撃沈するとか側から見りや地獄でしかねえよ!!おい小説家の兄ちゃん！收拾がつかないからなんとか言つてやってくれ！」

「……ンフツ、フハハツ…!!」

「ダメだこの兄ちゃん変なツボに入ったまんま帰つてこねえ！」

「ピタピタのピタ……ふふ」

「ニイロウもダメね。はあ、このテイワットにいる芸術家つて、どこか感性が外れているのかしらね…」

「十分位撃沈し続けたアンタらのフオローでそこそこ走り回ったアタシたちに何か言うことは？」

「あざっした」

「あ？」

「ごめんなさい」

「もうちゃんとお話しできるわよね？」

「う、どうかなあ」

「できるわね？」

「ピイツ！できるよっ！」

この後めちやくちや…  
インタビューした。

――――

――後日、グラントバザール

「……おかしいなあ」

調子が出ない時というのは多々ある。足が妙に重かったり、動きが油を差していない遺跡ドレイクみたいにギシギシになったり。ひどい時には、筋肉が言うことを聞かなくなって立ち上がれない、なんてこともあった。

でも、そういう時には、ちよつと休んで、甘いピタを食べたり、お友達とおはなししたり、シナモンチャイを飲んだり、スラサンナ聖処

に行つて風に吹かれたり、カレーを食べたり、団子を食べたり。そう言う息抜きをして調子を整えると、不思議と調子が元に戻つていて。

自分も、治つているんだからいいじゃない、と。自分の体の不調がどこから来るのかについて、追及を怠つていた。色んな賢者の人からあんまりよく思われていない、芸術の分野を専門にする私だけど、それでもやっぱリスメールの民だもの、クラクサナリデビ様の国に住んでいるんだもの。謎に対する姿勢を正すのを嫌がらないくらいには、未知への好奇心があるんだよ。

でも。今回は違つた。

「調子はとつてもいいんだけどなあ…。でも、胸がずつとくにゆくにゆしてゐるんだよねえ」

調子は悪くなるどころか、むしろ良くなつてゐる。練習を見る人も、なんだか調子良いね！と話しかけてくれたりするくらい、調子がいいのだ。

なのに、調子がいいはずなのに、身体の奥が熱を帯びたようにホクホクしてゐるのだ。ふかしたジャガイモのように、お鍋で煮込んだニンジンのように、焼き立てのチーズنانのように。やわやわと？ほくほくと？アツアツと？あの人じゃないんだから、わたしにはこの気持ちをしつかりと言ひ表すことはできないけれど。胸の奥が、あの時からずつと疼き続けるんだ。

気になる。気になるよお！なんでこんなに身体がポカポカして胸の奥がくるくるしてるのに、身体はいつもより沢山動けるのか！いつつも夜になるとあの時の事が浮かんで寝るのが遅くなつてるのに、ずつと調子良くなり続けてるのか！わかんないよう！うわーん！

――

――教令院地下、ファトウス構成員『博士』のラボ

「……………ウツソだろコイツ」

「博士、花神誕祭の輪廻計画のキーマンの状態が高揚を続けておりますが、計画にこの要素も組み込みますか」

「……………組み込みたまえ。恐らく、この前接触した『少女』のお気に入りの作家が再度接触しない限り、この状態良化は対数関数的に続いていくと思われる。用意は周到にするものだ、繰り返してのチェックは怠ってくれるなよ?」

「は、承知いたしました。…ところで浅学の身ながら一つ質問したいのですが」

「……………ハア、そうだな。このムカつきは他人と共有するに限る。何を質問するかは間違いなく予想できているが、今の私はどうやら解答をしたい気分のようなのだ。言ってみたまえ」

「は、それでは。何故この少女の状態は良化の一途を辿っているのでしょうか」

「……………今回の一件はだいたい非科学的ではあるがね、腹が立つが説明しよう。君もオニキスの感情曲線というのを知っているだろう」「たしか、『感情が肉体に及ぼす影響は対数関数的グラフを描く』というものでしたね。……………まさか?」

「話が早い奴は嫌いではない。この小娘の絶好調は確かに感情が原因だ。馬鹿馬鹿しいがグラフを一応取っておいた、ホラ。確かに対数関数に似たグラフを描いている。低級理科の実験を見ているような懐かしい気分にはさせられたよ」

「おや、本当ですね。中綺麗なグラフです。しかし、一体何の感情が起因しているのでしょうか。事前の調べによれば、この少女は聖人のごときお人好しと聞いていますので、慈愛や責任の感情は確かに貯まりやすいのですが、違う気がしているのですよね」

「慧眼だ。この女は度が過ぎたお人好しで、怒りや怨み等の忘却補正が掛かる負の感情を滅多に抱かない性質を持っている。個人的感傷ではあるが、正直キシヨイ。2人しかいないから誤解を恐れず言うが、この女の精神性が人外レベルで異質なのだよ。下手すれば、神やら眷属やら、そういう奴等よりよっぽど化け物だな。神の目を持つものは多かれ少なかれ異常だと言う仮説が帰納的に証明されつつあるな」

「……………ハア、成程。大体理解しました。この少女、恋しましたね。それ

も初恋」

「おや、大正解だ。流石に私の部下というべきか、中中に早い回答だな。しかし、一応聞くがどうしてこう早い解答を為すに至った？私はヒントを与えた覚えが無いが」

「いえ、先までの会話そのものがヒントでしたよ。化け物、異質な精神、帰納的証明、長期持続する感情、異性が関係している。古来よりこのテイワットに積み重なる異類婚姻譚や英雄譚を帰納的に利用すれば自ずと分かることです。古来より、異質を普遍たらしめるのは、愛やら恋やららしいですから」

「あくまで物語はフィクションとして扱うべきじゃあないのかね？」

「それこそ件の小説家が書く小説であればフィクション扱いをすべきでしょうけれど、今回はその限りではないんですよ。私の同僚が公子様の部下をやっているのですが、彼から聞いた話、テイワットに残るああいう伝説は大体が真実の利用らしいですよ」

「ソースは信頼できるのかね？」

「人を伝っているので多少の誤謬はあるやもしれませんが、情報源は岩神モラクスだそうです」

「成程、これ以上ない証人だな。さて、合格だ。君には私の苛立ちを共有できる権利をやろう。光栄に思えよ？」

「光栄かどうかはさておいて、奇遇にも私、この先の展開が予想できて胸から角砂糖を吐きかねないと錯覚するほどに胸焼けしているんです。博士の話、どうか聞かせて下さい。」

「ハハ、宜しい。些か敬意が足りない気がするが些事だ。私のストレスの軽減につきあい給え。件の花神誕祭の輪廻計画だが、一応今回の創神計画の要とも言える計画だ、私の方でも収穫した夢のチエツクを行なっているのだよ。例えば、淫夢の排除だとか、機密性の高い内容を含む夢の修正だとか、そういうことをやっている。仮にも雷神の現し身のオリジンたる素質を持った奴を、インキュバスだの情報爆弾だのにしたくはないのでね」

「成程」

「夢の輪廻の基点とする人間として、さつきも言ったようにこの化け



物レベルの精神強度を有するコイツを選んだわけだが、どういう訳かある時点から夢の願いの強さが一気に上がったのだ」

「願いの、強さですか」

「ああ、話していかなかったか。神の目というのは各人の強い願いに呼応し、その願いの結晶として生まれる存在だ。これを逆説的に考えて、神の権能は各人の強い願いで再現可能であると理論付けたのだよ。実際、この計画もこの理論がベースになっているんだがね」

「理解しました」

「話を戻すが、願いの強さというのはそうそうな事では変化しない。人間というのは出来事に左右される存在であるが、これは逆に出来事がなければ人間の進歩は停滞するということも意味している。つまり、この小娘に何らかの出来事が起こったとしか考えられなかった、という訳だ」

「おや、アーカーシャ端末の過去遡及は実現が難しいのではなかったのですか？」

「計画の要たる小娘に関わる事態だったから、無理を押しして過去遡及の実現を視野に入れようかとも思っていた。まあ、必要は無かったが」

「…というところ？」

「御丁寧にも、この小娘はあの小説家と出逢った日の出来事を夢の中で詳細にリピート再生していたからだ。週に一回スケアプランとして夢の多重化を行っているが、この小娘は多重化した夢の全てがああ小説家との邂逅のリピートか、彼と自分についての自分のあまりにも幼稚な妄想でしか無かったのだよ。気が乗らなかったが、そこに缶詰知識として一つ保存してあるから見たまえ」

「拝見します……………、うわあ……」

「異常者は常人的成長に置いて常人に大きく劣るとは全くもって本質を射た言葉だ。この小娘は、踊りや劇作活動については常人に追隨を許さない発達を見せているが、常人が成長する中で身に付ける恋愛観について、幼少から全く成長していなかったということだ。先程アーカーシャ端末の思考盗聴機能を試用したのだが、無作為設定にしたら

よりによってこの小娘の端末に接続してしまつたらしくてな…、その、なんだ。あまりの幼稚さに呆れた。『胸が疼くのに調子が良い』だの『身体が熱いのに風邪じゃない』だの…、阿呆過ぎんだろコイツ」「は?!この女(こ)までの事しておいて恋に無自覚なんですか?!」

「最早性知識が拙い幼児並の思考回路だった。あの様子だと、他人に真実を教えられても気が付かんよ。それでいて夢の効果は他人の物を大きく引き離してぶっちぎりのものだから始末に追えない。一応神の義体として奴が搭乗する巨人型端末を用意してはいるんだが、このままだと…」

「…どうなるんです?」

「小娘の夢の効果が大きい所為で、行動がメルヘンになるだろう。具体的には、必殺技がア○パンチになる」

「……………神としてそれはちよつとなあ」

「……………一応、散兵にもこの件は伝えている」

「…反応は如何でしたか」

「……………声も出さずに泣いていたな。アレはアレで面白かったが正直面白さ以上に同情の余地が有りすぎて愉悦する気にもならなかった。よって、計画を一部変更し、あの小娘の夢は単純なエネルギーに変換することで神の義体の燃料にすることにした。せざるを得なかった。このように計画変更を決意した直後に君がここに来たと言う、そういうわけだ」

「……………珈琲、かなりにがめのですが、飲みますか。深煎りの、砂糖必須の珈琲ですけど」

「……………頂こう。胸のあたりに溜まった糖分で十分だろうからな」

「……………なあにが『新種の風邪』だこの救いようの無い馬鹿めが！唯の恋煩いに決まっついていようが！一体全体どういう成長をしたらこうなるというのだ！この小娘さては脳内花畑か、いいやそうだったこの小娘の脳内は花畑どころか聖人構造をしているんだったな！クソツ、爆発しろッ！」

「……………淑女様から聞きましたが、モンドには爆弾魔の騎士が居るらしいです。……………拉致して連れて来ますか？」

「…一瞬実行を命令しようとした自分に著しく腹が立つ！物凄く魅力的だがそんなことはせん。…オイお前！今日は呑むぞ。酒の代わりにコーヒーをな！」

「お供します、いえ、させて下さい。ちよつとこの純粹さが私には眩しすぎて、呑まなきややつてられないです」

「ちよつと博士?!部下を殴ろうとしたら腕がロケットみたいに飛んでっただけ?!正直アレは好きな改造だったから全然許すけどするならするつてちゃんと言つてくれない…、か…。……………一体どうした？何がどうなつたらこうなる？」

「いえ、大した事では…、いや、大した事なのか…。創神計画で使う輪廻計画の要の少女が思っていた以上にメルヘン脳で覗き見た博士と私が糖死したので、酒の代わりにコーヒーで鬱憤を晴らしているところなんですよ」

「…ああ、…あれか。……………すまない、僕も一緒したいな。酒も持つてくるよ。……………必殺技がアン○ンチになる絶望感をまた思い出したから、さ。……………は、ハハ、アハハハ」

「…やけ酒、ご一緒しましょう」

「コーヒーツー！飲まずにはいられないっ！」

## キャンデイス持っていない記念の予告（生存報告）

キャンデイス持っていない記念話

「デュエル開始イイイイイイツ!!!」

「布団が吹っ飛んだっつ!!!」

「甘いっ、ジャングルチーターがおっこちターっ!!」

「ふむ、キノコンいキノコンのか…」

「…」

「…」

「…」

「…え、アタシも何か言わないとダメなのかよ。えーと、あー…、赤念の実が見つかからない積年の恨み…」

「…」

「…フツ、完璧に負けたよ。やるね、デイシア。君こそこの一回戦の勝者に相応しいよ。続く2回戦のステージで私たちが成長するのを待っていてくれたまえ」

「…まさかこんな高度な洒落を見せられるとはな。俺もまだまだということだ、痛感したよ。デイシアよ、一回戦勝利おめでとう。二回戦で待ってて欲しい」

「俺の洒落が一番だと思っていたが、お前のそのギャグセンスならば俺が負けてしまうのも仕方がない。俺の理論的思考に基づく冗句も、まだまだ伸び代があるということか。俺はまた一つ成長したな」

「…褒められてるのに全然嬉しくねえ。寧ろ腹が立つ」

「セノ、アルハイゼン。敗者である私達はギャグセンスを磨く特訓をすべきだと思うんだ」

「奇遇だな、芥川。俺もまさにそう思っていたんだ。アルハイゼン書記官、ここは一つ、千本ノックという方法を取るべきかと思うんだが、どうだろうか」

「ふむ、洒落を数百回言い回す事でセンスを養うということか。反復試行による脳信号の鋭敏化が期待できる良い練習方法だな。いいだ

ろう、ならば今からアアル村に到着するまで特訓だ…！」

「応ッ!!」

「霧切の断面はスツキリギリツツ!!」

「辛えカレーを華麗に食べるツツ!!」

「デーツナンの味はナンダフル…!!」

「まだまだア!!」

「忍者は一体何人じゃッ!!」

「このおじさんは荷物を持参っ!!」

「スメルローズの近くに住めるろずっと…！」

「もつとだあっ!!」

「アタシこの雰囲気もうやだあ…、早くアアル村

に着いてくれえ…！」

「まあまあ、折角の旅なんだから！景色とか楽しもうよ！それとも…、私とおしゃべりとか、よかったら、する？」

「ニイロウ!!お前…！いいやつだなあ!!」

「わっ！ちよ、ちよつとお!?急に抱きつかれても困るよお〜！」

「(でもなんでだろうなあ)」

「アーカーシャ端末、あ、カシャカシャ鳴るツツ!!」

「石珀でできた席の迫力は凄いッ!!」

「イグサは痛い、グサツと刺さるから…!!」

「(子供っぽく全力で遊ぶ芥川さんを見てると、なんだか心がホミユツてするんだよねー、なんでだろう?)」

「オノコロ島に忘れ物！シマツタアアツツ!!」

「モンド城にいるもん、ドジョウツツ!!」

「軽策荘にて実兄搜索…ツツ!!」

「まだ行けるぞツツ!!」

「「応ッツツ!!」」

「(なんだか、かっこいい?)」

「(アアル村はまだなのかよツツ!!)」

「皆様、アアル村へようこそ。私はこの村のガーディアンをしています、キャンデイスと申します。それで…、皆さん何をしていらっしゃるのです?」

「あ、あはは…」

「キャンデイスう…」

「クツ、まだまだ、終わりじゃない!」

「そんな、芥川! しつかりしろ、傷はまだ浅いはずだ!」

「:フフ、すまない。俺はもうダメらしい。これ以上(の面白さ)を望めないな」

「な、何を言っている、アルハイゼン! お前はまだやれるはずだ! お前はこの大マハマトラたる俺が認めた(洒落の)好敵手だ! こんな、こんなところで終わって良いやつじゃない!!」

「いや何、俺はあの赤獅子の女傑にセンスで勝つことができないと悟っただけだ。ああ、ここで俺の(ギャグ)人生は終わってしまうのだろうか…」

「何を弱気になっっているんだツ! お前は、お前はそんなやつではなかったはずだぞ、アルハイゼン!!」

「ア、アルハイゼン…、正気を取り戻してくれ! そうだ、前に君が、君こそが言っていただろう? 『人間の可能性に限界などない、これは

「データが示す動くことのない事実だ」と！

「…！」

「そうだ、そうだぞアルハイゼン！いつもの過激さはどうした！明晰な思考回路はどうしたんだ！その頭脳で冷静に考えれば容易にわかることだろう、まだお前には成長の余地がある！諦めてはいけな！」

「……フ、フフ。どうやら、繰り返す敗北に、俺も少し感傷的になっていたらしい。だが、もう心配無い。まだ、俺はやれる、やれるんだ…！」

「そうだ、その意気だ！」

「…デイスアよ、数々の敗北はまだ続くだろうが、俺は成長し続ける。いつか俺が成長して、お前を負かす時を楽しみに待っていてくれ…」

「私からは、ただ一つ。『待て、しかしして期待せよ』」

「いつか俺が、俺たちが越えるべき壁、デイスア。必ず俺たちはお前に勝ってみせる！」

「…デイスア？どういう事か説明してくれる？」

「勘弁してくれよお!!」

「(頑張る芥川さん、キラキラしてるなあ!)」

続くだろう。知らんけど。

## ナヒーダ当たった記念幕間予告

注意 本編から約二年前の時系列です。

コレイはスメールにいます。

ニイロウ幕間の前です。

その出会いは唐突であった。

いや、出会いというのは得手して唐突なものであるのだから、今の言は今更言うべきことではないのかもしれない。まして、話の冒頭に持ってくる言葉としては尚更相応しくないものであろう。

しかしそれでも、ありとある出会いの中でも群を抜いて唐突なものとして、私の中に永遠に記録されるだろう出会いだったといえる。

そう。今現在、マグカップを頭に引っ掛けて呆然としているこの若い女の子との出会いは、唐突であった。やはり、そうだ。

「はへ…？」

「…キミ、どこから入ってきた?」

宿屋に備え付けのティーポットからいつものように淹れた紅茶を飲もうとしてポットを傾けたら、突然ポットが光って白髪の幼女が現れたのだから。これを唐突と言わずして、何というのか。



私、芥川敦はテイワットでそこそこ売れている小説作家である。自分で言うのは本当に恥ずかしいのだが、本当にそこそこ売れているのだ。ありがたい限りである。なお、この自己紹介は八重堂の社長直々のリクエストがあつてのものである。決して自発的にしているものではない。ないつたらない、ホントだよ……いつか会った時には、絶対にあの八重堂の社長をぎゃふんと言わせてやらあ……！聞いた話によれば八重堂の店主は狐の姿を取れるらしい。……私のモフテクでグデングデンにしてくれるわ！

それはさておき。私は小説を書くにあたって、下調べというのを大事にしている。

ところで、私は小説を書く上で取材というのを重んじていて、資料による取材、聞き込みによる取材、そして泊まり込みによる取材など、様々な方法を使って、より面白みの滲み出る本を作ろうとしている。

幸いにも、事前に調べ物をしっかりした小説ほど読者を集めているらしい。八重堂の統計によればそうなっている、と手紙にて連絡を受けている。それにしても、八重堂の本社が稲妻にあるのだから仕方の無い事かも知れないのだが、私は八重堂の構成員に一度も会ったことがない。稲妻出身の母が保証しているのだから悪い組織ではないのだろうが、やはりそうは言っても気になるというものだ。稲妻には何かの機会に赴きたいとは思っているが、いつの事になるのやら。

スメールの話を書きたいと思った私は、スメールに取材に行くべく旅程を計画していた。

……のだが。

しっかりと宿も取ることができ、いざ明日出発である、というときに我が母が家に帰ってきたのだった。というのも、私の母、芥川眞琴はテイワットを旅する凄腕の旅人であり、家に帰ってくるのは一年に数回あるか無いか。事情があり片親しかいないわたしには唯一の肉親であるから、数少ない家族団欒の日を大切にしたいというのは容易く納得して貰える話であると思う。

そういう訳で、折角だからと、私はスメールへの取材の旅に私の母

も連れて行くことにしたのだ。勿論、母は旅人であるので、一つの所に長く滞在は出来ない。なので、私の約二ヶ月の旅程に完全に付き合わせるのでは無く、最初の三日程だけ共に過ごすことにしたのだ。

さて、私の母は、各地を好奇心の赴くままに流離う旅人であるからか、非常にお転婆である。息子が実地調査に分があるのもこういう訳なのかもしれない、と言える程にお転婆なのだ。

「あつー敦く!!こっちにおいてよーほらー、おーいーでー!」

「なにさ、母さん?また食べられ無さそうだけど食べられなくも無いキノコを見つけたのかい?なんだつけ?あのー、ルツカデヴァーダケ?だった?極彩色のマイタケみたいな」

「ああ、アレ?アレはたくさんとって宿に着いたらシチューにするんだから、潰したら駄目よ?ホントにマイタケみたいな味するんだから。それにしても、ルツカデヴァーダケって…、あの子もまさかこんなキノコの名前になるなんて思ってもいなかったでしょうねえ?」

美味しい(らしい)キノコを見つけてかれこれ二時間キノコ狩り大会に興じたり、近くにいたキノコンの馬だか鳥だか分からない謎の生物を手懐けて乗って歩いたり、モンドで貰ったらしい風の翼で上から急に突撃してきたり。

ちなみに、このキノコンウマトリ(後にキノコンの成体マツシユロント判明した)は母さんの「キノコの出汁使ったお鍋っておいしいわよねー」という一言によって『鍋リウス』と名付けられることになった。まさか食べるつもりなのか…?

「あの子って、母さんスメールに知り合いいたんだ?どんな人なのさ」「何よ?まるで私の友達が少ないみたいない方じゃないの。そりや居るわよ、友達の1人や2人。伊達に長生きしていないもの。あの子は…、そうねえ。私はハマルちゃんって呼んでただけど、とつても真面目で、とつても我慢強くて、でもとつてもにぶにぶさんな、私の妹みたいに天然気味な子よ。あの子頭はすつごい賢いのにねえ?なんていうの?無知シチュ製造機?率直に言って、面倒臭い子ね」

「賢いのに無知って、ホントどんな人なのさ…。というかさ、母さんの知り合い面倒臭い人なんか多くない?だって、ほら。稲妻のめっちゃ

力が強くて都度都度脳筋思考になる鬼のお姉さんに、璃月のやたら熱血思考してる癖に変な所で乙女が出る仙人さんと、めちやくちや真面目そうな顔で平然と爆弾発言する爆弾製造機の仙人さんでしょ？後は年取ってボケて長年の親友に喧嘩吹っかけて見事に反撃されたお爺さんに、最近盟友に構ってもらえなくて捻くれてるらしいお兄さん、そんで、母さんの妹に喧嘩売ってシバかれて拗ねた所を少年に慰められて見事にシヨタコンに目覚めた阿呆のお姉さん。：どうやったらこんな性格の渋滞事故を引き起こしまくってる人をこんなにも引き寄せてこられるのさ」

あとは、からかい上手のお姉さんとして振る舞うくせにちよつとモフられるとすぐに陥落する獣人の巫女さんに、正直食べ物のこと以外を考えている所を見たことが無いくらいずっと何か食べている熊の獣人さん、自分の家を汚されるのがなによりも嫌いな潔癖症の癖に人が来ないと拗ねるお姉さんとかいたか。

ホント面倒臭いひとだらけだなあ…、母さんの友人だったらしい鍾離も、金銭感覚が自由すぎる解説愛好家だし、面倒臭いと言えば面倒臭いのか。

「知らないわよー！気が合う人みんなこうなっちゃってるんだからー！みんな良い子なのよ？面倒臭いけど。というか、私この件悪くないよね?!特にあの阿呆の鳴姐とか私何にも関係ないわよね?!」

「はいはい、落ち着いて。別に悪いとは言って無いじゃないか、ただ感慨を抱いただけでさ？まあいいよ。それで？私を呼んだのは何の用だったのさ」

「あーそうだった、敦呼んでたわね。さつき村のレンジャー？の人が喋ってたの聞いたんだけど、クラクサナリデビって、何？」

「あれ、旅してるのに知らなかったの？えっと、なんだったかな。ああそうだ、クラクサナリデビは二代目の草神の名前らしいよ。確か、先代のマハールツカデヴァータが生死不明となって失踪した後に見えられた幼い女神で、神に就任したはいいものの知識が見た目相応程度しかなかったのでスメールで彼女はあまり信仰されていないらしいね。姿を見た人が殆どいないらしくて、幻の女神とも呼ばれているの

だそうなの……、どうしたのさこんなこと急に聞いてきてさ。というか大丈夫？さつきから黙り込んでるけど」

「……………ああ、そう、そうなのね。ごめんなさい敦。急に変なこと聞いちゃったわね……。……ところで、今から旅程を変えることって出来るのかしら？」

「今から?!?!:…どうだろう。だって私宿取っちゃってるからなあ、でもどこに行きたいかによったら、後から向かうって事もできるかも知れないなあ。ちなみにどこに行くつもりだったのさ」

「えーと、スメールの砂漠におつきなピラミッドがあるのは知ってる？アソコに行きたいのよ」

「え、キンググデシエレトの霊廟?……………それなら行けるかもしれないな。母さんは三日くらいしか宿に居ないんだよね?」

「そうねえ…、スメールで見回りしたいところもあるし、敦も仕事でスメールに来てるのに邪魔するのも嫌だからねー」

「ならちようどいいや。一緒にその霊廟にいけると思うよ?璃月に戻るとかじゃあないんだから、旅館のチェックインを夜に変えてしまえば何とかなるはずだし」

「ホント?!ホントにいいの?!?!敦の旅程すつごく曲げちゃった気がするけど、ホントのほんとにいいの?!?!」

「別に何も困ることは無いよ?取材が足りなくなったらまた滞在期間を伸ばせばいいだけだし、そもそも母さんと一緒の時間を作りたいって言い始めたのは私だ。私はこの労苦に納得こそすれ、不快感を抱くなんてあるはずもないよ」

「~~~~ツ!!敦大好き~~~~!!」

「どわっ、急に抱きつかないの!!ほら、葉っぱもすごいついてるじゃんか……。じつとして、葉っぱ取るから」

人は似たもの同士が集まるものだという。優しい人の周りには優しい人が集まり、面白い人の周りには面白い人が集まる。

…母さんも大概、面倒臭い性格をしているのかもしれないな。

「何か言った?」

「イエツ、マリモツ」

と云うことで、夜になる前にスメールシティに到着すべく、かなり急ぎめで砂漠地帯まで赴いたのだが…

「あつっづい!!!母さん?!まだなの?!”

「まくだく、あのデカイピラミッドよく。ハマルちゃんの大ファンだったデエレットの隠居用の家なんだけど、相変わらずデツカいわねー」

「デカイのは身に染みて分かったけれど全然近づいている気がしないよ?!”

「これでもこのクローバー使って速くなってる方なのよ?ほら、グデツとしないの!シャキシヤキする!”

「あゝ暑くて体が溶けてしまうよゝゝ」

ぜんぜんつかねえ

砂漠特有の距離感の掴めなさと言うか、かれこれ一、二時間は歩いているのに全くピラミッドに近づいている気がしないのである。

割と絶望である。

「炎元素の癖に暑さに弱い煙緋ちゃんのセリフ取らないの!あとちよつとだから!”

急遽予定を変更して砂漠に急行した私達であったが、些か砂漠の暑さを舐めていた。…これで夜に寒くなるとかもう考えられないんだけれど。

というより、あのピラミッドほんとにデカすぎないか？いくら近づいても大きさが変わらないのだけれど。

「あーなんだか今ならものすごくかめは○波が撃てそうな気がするなあ!!」

「脳の錯覚よ！しっかりしなさい！」

拜啓璃月のフタ上。私このままピラミッドに辿り着けるか心配になつてきました。溶けそうです。

――その頃、璃月のフタ上は。

「ひゅー！ここならいい詩が書けそうだー！」

「久々の休みだからってここここんなたた高いところに行く必要はないんじゃないかな?!というか、なんで私を連れてきたのさ!!」

「え？リアクションが面白いし」

「うわーん！芥川くんに言いつけてやるー！」

「ぎんねーん！せんせーは昨日からお母さんと一緒にスメールに行つたのだよ！ふははは！わかつたら大人しく観念して私に連れ回されるがいいー！」

「あぐだがわぐうんく!!みすでないでおぐれよおおー！びえええええええ!!」

…酷かった。

つきましました。

あれから多分30分は経ったんじゃないかな。軽く意識飛んでたね。しかもなんだか暑すぎて寒くなってきたし（矛盾着衣）。

まあ、着いたからいいさ。

「で、ようやく着いたけど、ここからどうするの？どうやって中入るのさ」

「こまったわね…：だいぶ砂に埋まつてるじゃないの…、あ、そうだし！」

「ん？なにか思いついた？」

「…まず刀を取り出します」

「は？」

「続いて元素力となんかすごいパワーを全開で出します」

「え、ちよ」

「その後に敦を捕まえます」

「え？え？」

「そして高く飛び上がって…：刀に元素まとわせて振りかぶって…、地面を叩ッ斬る!!!」

「何をしてやがりますか…?!?!?」

「……ここが……遺跡の隠れていた地下か。」

「なんというか、凄い草が繁茂しているな……」

「砂漠とは、一体……？」

「砂漠の環境程度、ウチのハマルちゃんには通用しないのよ！ハマルちゃんなら、雪山にだって火山にだって、おっきな木を生やすくらいお茶の子さいさいなのよ！草だけに」

「草」

「……ねえ敦、さつきからキノコン群がりすぎじゃない？」

「母が言う通り、私の周りには大量のキノコンが群がっていた。……愛着が湧かなくもない。」

「……ピンさんから頂いた壺で連れて帰って、外の世界に連れ出してやりたいなあ。いやただの自己満足だけどき」

「いいんじゃないの？好きにすれば。懐かれているのは確かなんだから、外のマツシユラプトルの所にでも連れて行ってあげるのも悪く無いんじゃない？」

「マツシユラプトルというと、キノコンの王とも呼ばれている成長を重ねた強力なキノコンだったっけ？王って言うくらいだから、邪険にすることはないかな。うん、じゃあそうするよ」

「喜べ敦、君の願いは漸く叶う……」

「あれ、母さん。もしかして空に会ったことあるの？それ絶雲の唐辛子マシマシの麻婆豆腐が好物なアイツの部下の人の真似だよね？」



「空…が誰かは知らないのだけど、私が真似したのは鍾離と良く行く酒場でたまに会うキレイさんなのよ？でも、確かに酒場なのに麻婆豆腐を食べてた気がするわねえ」

「何してるんだあの人…」

これは余談だが、璃月に帰った後その酒場に寄ったら確かにいた。何でも、酒と麻婆豆腐を同時に楽しめるのではぼ常連と化しているのだとか。因みに、香菱がノリで作った最恐麻婆を平然と食べ尽くした伝説の神父もこの人だった。西風教会の神父の資格を持っているのでそう呼ばれているのだそう。

—————

懐いたキノコンを壺に回収しつつ、彼方へこちらへうろろしていると、霊廟の最下層にたどり着いていた。

「意外と時間もかかっていないらしいね。さて、ここが噂に聞く側近さんの墓なのかな」

「そそ。遺言の再生装置もしつかりあるらしいし、確かにここは墓地みたいね。さーて、肝心の遺言はどこかしらー？」

「…ん？おや、ここにもキノコンがいたらしい。なんだい、そんなに袖を引っ張って。其方に何かあるのかな？…おっと、これは」

「敦いー、どうかしたー？」

「成程、道理で見つからない訳だ。母さん、ここに何かのクリスタルが……」  
「あっ！敦一、あったわよー！これこれ！コレがああの時代の伝統で残された遺物……、あら？敦も見つけたの？まあいいわ。どっちも聞きましょ」

「……公式YouTubeの映像見やがれ……」

「フフ…、コレは稲妻に戻った時に自慢すべき事に追加しないとね。さて、じゃあ次は敦が見つけた奴見てみましょうか」





――

「…なんだこのおっさん」

「ええ…」

## 夏

季節は夏。

煌々と照りつける日差しに、肅々と撓む木々のさざめき。

照り焼きの屋台の芳しい香りに、所々で見える手持ち花火の光。

朝も夜も、情緒に満ち溢れ活気の纏綿とする空気を孕む季節。

稲妻にとつて、夏とはそういうもの。

祭りの季節であり、花火の季節であり、そして何より風情あふれる季節である。

長野原の倅が目を爛爛と輝かせ、あっちゃこっちゃに走り回り、熱気のせいか眠れぬ夜を過ごすむじむじだるまが見られたり、なぜか意味もなく居合切り（もしかして：元素スキル）を連発する神里のお嬢様が居たり、執務中にやたらクラゲを侍らせる現人神がいたり（もしかしなくても：元素スキル）、まあ、こう、すごいのだ。

打って変わって璃月。

稲妻における蝉の鳴き声やオニカブトムシの羽音、何故かやたら増える野良猫の鳴き声と同じようにして、今日も夏の風物詩たる鳴き声が聞こえてくる。

「えあつづえいいい」

あんまりにもあんまりな情け無い鳴き声。

コレには、風物詩としても威厳もない。

煙緋である。

普段のきりりとした冷厳たる態度からは想像の付くはずもない、だらけきった態度をとっている。

コレには思わず側で見ていた夜蘭も、冷え切った目線を遣らざるを得ないというものである。

「あづくでひがらびそお」

でろでろに溶けた煙緋が液化化している。

液化化しているのだから湿っているように思うが、本人としては干からびそうらしい。謎である。

七七の使役する陰陽玉を抱え込み、間拔けた声を上げる彼女に、呆

れた目線を送るのは何もおかしな事では無い。寧ろ、奨励さるべき行為であろう。

「動いてなえのに、あづいよお” おお！」

ちなみにこんなに暑がっているのに本人は頑なに水着で海水浴をするとかいう思考をしない。なぜなら水着を持つていないからである。これは実装が待たれるなあ（白々）。ちなみにどことは言わないが某世界のウゴアツとトントンなので、あれを着ることができなくもないのである。北国商会（株）ではツノクジラ浮き輪を売っているので、ちようどいいのかもしれない。閑話休題。

さて。この日は芥川の執筆活動も落ち着いている謂わば暇な日と  
いうのであり、その日を目ざとく見極めて色々な人が彼の家を訪問し  
ている訳である。

「煙びっぴく、死んだら言ってね〜」

「阿呆、死なせてどうする。せめて頭が痛くなって来たら、とか熱中症  
を気遣うくらい心のやりでいいんだよ。」

「うへへー、八割冗談だよー。でもそーだよねー、熱中症が死因の死体  
は足が早いから、個人的には死ぬのは熱中症以外にしてほしーよねー  
！そう思うでしょせんせー！」

「死体に足が早いとかいう表現を使うのは間違いなくお前くらいのもの  
だよ」

あまりにも物騒な事を言っつて戯れ（？）る胡桃。

「せんせ、腕、疲れて来た。もう戻していい？」

「やめ”ておくれ”よお”おお」

「…あー、あと5分頑張れるか？」

「んー、たぶん。じゃあせんせ、あとで棒アイスほしい」

「はあい、それじゃあ後であげようか」

あんまり長い間出さない陰陽玉（クールタイム30秒）をずっと出し続けていて流石に疲労感を覚えて来ている七七。

「あのねえ、仮にも璃月が誇る有数の法律家なんだし、それ相応の振る舞いをして欲しいモノなんですけど？お世辞にも私が言えた口ではないのはわかっていけるけれど、いくら何でもぐでぐでし過ぎているんじゃないかしら？」

「えー！そんなこと言わないでくれよお！ここ一ヶ月くらいこんなえあつづい中働き通しだったんだよお、芥川クウンのところでもダラダラするくらいいいじゃないかあ！親しき仲にも礼儀ありなんて法律は今のところないんだぞう！」

「法律以前に世間一般を生きる上での当然の倫理観なのよ、それ。みんなのが璃月一の法律家だなんて、テイワットも世紀末になったモノねえ……」

「因みに世紀末ではないけど、稻妻の元号が変わるっていう噂は聞いたよ？鎖国が終わって国自体を心機一転させるっていう心意気なんだって！まああんまし知らないけど」

「黙りなさい、全く話関係無いじゃない。」

璃月一の法律家の成れの果てを目の当たりにして若干の辟易を感じて、頭を抱えている夜蘭。

そして。

「いやはや！中々に良いモノだね、この風呂という文化は！芥川先生、全く以って痛快な経験をさせてもらったよ！」

「おやおや、それはよかったねえ。それはそうと、今更だけれど、留学のホームステイ先を私の所にしてしまったのも良かったのかい？この惨状をみてわかる通りお世辞にも過ごしやすい環境だとは言えないけれども」

「いやいや！寧ろこんなアットホームな有様をたくさんの人が見せて



くれる方が、色々な観察になつて勉強になるんだ。これに文句をつけるなんてするはずが無いだろう！この家具は実地ではどのような使われ方をされているのか、この家屋の形ならどのような家具が置かれて、どのように住む人が動くのか。参考になることはたくさんあるから、このような状況は大歓迎だとも！」

「うへへ、テンションが高いなあ、今回のホームステイの子は。ま、私達もゆっくりしているから、ぜひゆっくりしていくといい…」  
「ん。開花のお兄ちゃん、よろしく」

スメール教令院より、留学の申請があり、ホームステイ先として部屋を一つ貸すことになった、カーヴェさん。

普段は、あのアルハイゼンのところに居候しているとのこと、中々に親近感を感じたりしているのだが、芥川はこれを本人には言っていない。前の食事会にて聞いた話では、今の生活に対してそこそこの不満が存在しているらしく口角泡を立てて愚痴を溢つ彼を見て、芥川がアルハイゼンと親交を持つていることを言つてしまえば要らぬ心労を彼にかけてしまうかもしれないと感じたのである。

しかし、アルハイゼンの性格上、気心の知れた相手に対しては自らの言葉の選別をやめる傾向にあるので、側から見れば言葉が鋭く尖つた針の筵のように感じてしまうというのはよく感じるのだが、真逆彼の言葉にこうまでも翻弄されている人間がいるとは思わなかったようだ。芥川は彼の言葉に対してある程度の受け答えをできるせい、その可能性をのつけから排除していたのは言つてしまえば怠惰だろう。この世の中にある無限の可能性を考慮してこそその文筆家である。彼は後に、この事を自分の未熟を再確認させられた良い出来事だとして、雑誌の寄稿コラムにて述懐している。

このメンバーが現在芥川の家の間集まっております、思い思いに言葉を交わしているのである。  
すると。

コンコン

ドアから乾いた音が数回聞こえてきた。

「…ねえパイモン、言われた通り私がノックしたから、敦先生を呼び出すのはやってね」

「うええ?!そ、そんなの聴いてないぞお?!」

「ついでだから、誰か先生の知ってる人の真似をしながらするのも面白そう」

「うわあああ!!!どんどん無茶振りが増えていくぞ!うう…、これ以上仕事が増える前になんとかしないと…」

「楽しみだね」

少しの沈黙。

「束ねるは氷の息吹、輝ける豊穣の光。受けるが良い!シンカク」

「カリバアアアアアアアアアアアアアアアアあああつしはいるか!!!!」

ドガアアアアアアアアアアン!!

「うわああああ!!!オ、オイラが申鶴の真似をしたらドアが吹き飛んだぞお!!!!」

—————

ヴェルーリヤ・ミラージュ

く水の中より現れる夢(うつつ)く

第一幕

ダジャレ騎士団?!

くこのイクラ軍艦、いくらで売るんだ?く

「モンドと一緒に行かないか、だつて?」  
「おう! キャサリンからお前が暇だつていう話を聞いたから、オイラ達について来てもらおうつて考えたんだよ。そうと決まれば早速行こうぜ!」

申鶴が吹っ飛ばしたドアを丁度工芸のモチベーションの高まったカーヴェさんが直している最中に、パイモンがとんでもない勢いで旅の同行を誘つて来たのである。

「そうと決まれば」の使い方を盛大に間違えているパイモンであるが、誰も彼もが頭いっパイモンなので突っ込む事をしない。

「待て待て待て待て待ちなさい。誰も今すぐに行けるとは言っていないだろう…。とりあえず、何日くらい出ることになるのか教えてくれないかい?」

「何?! 敦は今日から長いこと帰つてこないのか?! それはいけない、我の食べる晩御飯がなくなつてしまうぞ。そういう訳で敦、主には我の食べる晩御飯を作つてほしい」

「お前は本当にマイペースだね申鶴! 取り敢えず、私の予定とも照らし合わせたいから、一旦その冷蔵庫の昨日の残りの冷や麦セットを食べて落ち着いておきなさい」

「え? 先生向こう一ヶ月くらい暇だよね?」

「胡桃さんや、なぜ君が私のスケジュールを把握しているかについて小一時間問い詰めたいところだが、まあ今は予定の照らし合わせをする時間が省けたことに素直に感謝しておくよ。…という訳だから旅人、どうやら行けそうだよ」

「うん、キャサリンから二ヶ月弱くらい暇だつて聞いているから行けるのは知つてたよ?」

「何故キャサリンさんは旅人に対して私の予定を平然と伝えているんだろうか…」

「あら？芥川君、外出するのかしら。鍵は私名義で岩上茶室が預かっておきましようか？ついでに、私も羽を伸ばしがてらついて行くから、そのつもりでいてね？」

「あああつ！ずるいぞお夜蘭！私も芥川クンと行くんだー！」

「おや、芥川先生。旅行に行かれるのかい？丁度いい、早めに璃月建築学のレポートは終わらせてあるから、この機会に僕も貴方に同行させてもらおう。モンド建築も様々の参考になるから、これも勉強になるんだ。ということでは先生、お願いするよ！」

「…何、行ってしまうのか敦！こうしてはいられない、我も敦に同行できるよう師匠に直談判してこよう！それではまた後で会おう敦！冷や麦、美味であつたぞ！」

「ああつ！直したばかりのドアは壊さないでく…、ちゃんと閉めている…だと…」

「せんせー、七七も、行きたい」

「七七くんは…、白朮師に聞いてみようか。多分用事があつたらうけど、一応あとで聞きに行こうか」

「貴様、申鶴から話は聞いたぞ。あやつを傷つければ承知はせぬからな！よくよくその頭に銘じておくがいい!!!」

「どっから湧いて出たア留雲!!」

ということでは、芥川のモンドへの旅が急に決まったのである。

いや本当に急だなこれ。

## 主人公ステータス

芥川敦 男(?)

出身 スメール

在住 璃月(冒険者協会の二つ隣)

元素 草・雷

生年月日 十二月五日

所属 璃月港

武器 法器

声優 どうぞあなたの思うが仮に

テイワット中で愛される若き秀才小説家。彼の信条は「輝かしい世界」。彼の描く物語には、美しく輝く煌めきが含蓄されている。

武器

素晴らしき世界の記憶 星五

璃月の古い言い伝えには、こう書かれている。汝過去を手放すべし、さもなければ汝を絡める檻とならん。しかしながら、こうも書かれている。汝過去を愛するべし、さすれば汝が思慮は輝かん。ある小説にはこう書かれている。過去とは、執着するものでは無く、嗜むもの。過去を愛せよ。終わりゆく世界であろうとも。そこに残される記憶は素晴らしい。

天賦

通常攻撃 麗しき物語の叙述

願いの行先は、願いの通り。夢の様な物語を。

草元素の魔法攻撃を六段放つ。

長押しで草元素と雷元素を含む重撃を与える。

スキル 稲光と草原の権能

不滅にも刹那にも、永遠は在る。そういう知恵を得た。

通常攻撃の元素を入れ替える。

また、入れ替えた時に会心率依存の超開花反応ダメージを与える。

元素爆発 夢想せよ、煌めく心象

物語に優劣などなく、爾して世界は面白い。

草元素構造物を創造し、その周囲の広範囲に永遠の智慧の世界を築く。永遠の智慧の世界の中では、常に雷元素が付着され続け、また草元素に関する反応の効果が50%アップする。そして、永遠の智慧の世界の中にいる味方に自分の会心率に依存する回復効果を定期的に与える。

固有天賦 ハローテイワット

世界の定義とは、全ての美しさを含有する空間のことでもある。

キャラを交代した時に味方の元素エネルギーを15回復する。

固有天賦 思い出を今ここに

過去から、少しだけ顔を出してもらうんだ。

魔神任務の達成度合いに応じて、追撃を発生させる。

固有天賦 カクノゴトクヨム！大賞初代受賞者

本を書くことは大の得意でね？模写なんかもできるのさ。

天賦素材を合成した時、必ず合成物が二倍になる。

ストーリー

1 面白いことに、彼の小説が売れなかった試しが無い。それは、感覚だとか主観だとか願望だとか、そんなチャチなものなどではなく。しっかりと八重堂やドリーキャストなどの統計で出ているデータなのである。彼にとって、売れないというのは最も縁遠い事象なのかも知れない。

2 彼は綿密な取材を重んじる作家である。まだ若い作家であるにも関わらず、三年丸々を取材に費やした作品もあったのだという。それが、連作伝記冒険小説「夜叉が踊る」である。爆発的人気を誇るといわけではないが、史実に基づきつつそれを最大限に活用して心躍る活劇を描き上げているのだ。

3 不思議にも、彼の周りで笑顔が生まれません、という日がないらしい。彼と付き合いのある者が口を揃えて述べることだが、彼の周りにはなんかこうあったかいような優しいような…、そういう空気が漂っているのだという。言い表すなら、「ほのぼの」と言えればいいだろうか。

4 読み込み失敗

5 読み込み失敗  
r a s y o p o i p o i p o p o i  
p o i n a n o d e s u h a

ボイス

好感度1

やあ旅人。君は今日何をやる予定なのかな。なるほど、そうかい。なら、楽しんで行っておいで。帰ってきたら、たくさん話を聞かせてくれるかな。

好感度2

君の周りでは本当に面白いことが沢山起こるんだね。まるで、君自身がこの世界にとっての特異点であるかのようだ。…え？大正解？ふふ、私の勘も捨てたものじゃないみたいだ。

好感度3

神について、か。実は私もそんなに多くを知っているわけではない。そうするのは私ではなく母や妹に聞いてくれた方がいいと思うな。でも、私の知る限りで言えば、あの空島に住まう得体の知れない奴でない限り、神は悪い奴じゃないさ。

好感度4

私の近くにいるとポカポカする?…ハハハツ、なんだい、それ?私と親しい人はみんなそうやって言うんだね。おかしいなあ、私は草元素と雷元素しか持っていないから炎元素とは関係ないはずだけれどねえ。まあ、落ち着くなら一緒にいても大丈夫だ。

#### 好感度5

結構長く付き合いがあるのに私との距離が縮んでいるように思えない、だって?…本音を言えば、最初に会った時から君に対して好感を抱いていたのさ。それも、結構強めの好感をね。君には凡ゆる難が襲い掛かるうともびくともしない強固な精神がある。そこに私は惹かれたんだよ。ま、これ以上無いほど君を評価しているから、それで満足してくれたまえ!…おや、どうしたそんなに顔を赤くして。

#### 芥川真琴について

私の母は些かお転婆でね。会えばきつと退屈することはないだろうね。おや、もう会ったのかい?それはそれは。もし今度あったら、そろそろ帰ってこい、とでも言っておいてくれ。

#### 胡桃について

あんの阿呆また各所に迷惑かけているのか?!ちよつと待ってほしい、一回あの緩々お花畑に鉄拳制裁をお見舞いして…、おやその胡桃さんコツチに來なさい言いたいことがあるんだそうとつても大事なことが言いたいんだようんうんそうそうここまできて…、迷惑掛けるのはいい加減やめなさいアイアンクローツ!!プラス反省しやがれのくすぐりーツツ!!

#### 七七について

おや、七七くんの話かな?彼女はどうかやら私の事を覚えていてくれるらしくてね。彼女とは普通の子供と接する感覚でお話しをしてあげているよ。…まあ、私も不老不死だし、彼女も寂しくならないだろうから、採算が取れてていいんじゃないかな?

#### 香菱について

彼女の作る料理はみんな美味しいよ。え?ゲテモノを結構入れている?美味しいんだし、別にいいと思うけど。それより彼女、私に配ってくれるご飯の量が妙に多いんだよねえ…。まっ、太らないよね…



？

家族について

私の家族かい？ そうだね、わが妹は何年もの間非道な仕打ちに堪えて、その上他人を分け隔てなく思いやれるとても強くて優しい娘だ。弟は言葉遣いこそ彼のたどってきた道行の影響からか乱暴に見える部分があるけれど、その粗暴さを上回るほどの家族愛と友人愛に満ち溢れた優しい子だよ。末の妹は、些か他人の言葉に従いすぎるくらいがあるけれど、いざというときはとつても頼りになるとつてもいい子なんだよ。もし君が出会ったならきつといい友達になるだろうね。その時は、よろしく頼もうかな。

浮舎について

：彼のいたずら癖は昔からのものなのかい？ いや、問いかけたわけじゃないよ。単なる事実確認さ。

荒瀧一斗について

彼の勇猛果敢さには、目を見張るものがある。私が書いた彼の武勇伝なんて、彼の剛毅大胆な生のごく一部なのだからね。私の書いた本が少しでも彼ら荒瀧派の一助となれているのなら、うれしい限りだよ。

八重神子について

あんの小娘、次から次へと仕事を増やして行くのはどうにかならないのか…。次あったら小一時間尻尾モフリ倒してくれ…。

ニイロウについて

このテイワット大陸において、彼女ほどに神を愛する舞踊家はごくごく稀だろうね。彼女が話してくれる神々の話には、その解像度についても驚かされるよ。ただ…、些か純粹すぎるくらいがあるけれどね。その時は何とかなつたけれど、平然と詐欺にあいそうになつていたのを見たときは凍結反応をこの身に受けたような心地になつたよ。

新編 序章 田中の怪異の章

――前略、君は移りゆく時代に流されぬ一つの岩だよ。

律者。

理を掌るもの。

世界が、宇宙が、そうあれかしと望んだ存在。

星の海。

泡沫となり、重なり、混ざり合い、響き合う世界群。

世界の隙間を満たし、自身の肚をゆらゆらりと蠢動させる。

調停は既に為り、天理は狂い果てた崩壊の力によって満たされた。

方舟は大きく育ち、文明は新生と消滅を繰り返すばかり。

世界はかくまでも恐ろしく残酷な機構を駆動させてきた。

そのもつで、人類という種はかくまでも愚行愚昧を曝してきた。

しかし、だからこそ。

人類という存在は、そのものが尊く、美しい。

残酷なる世界の中で、偽りの空の下で。

いくらでも愚かさを曝しながら、遂には美しいものを見つけ出すのだから。

そこに命がある限り、運命が続く限り。

人類は、至宝を手に入れることができる。

――目を覚ましたまえ、覚まし給えよ。

人類が悲劇から抜け出せるのは、至宝を手に入れられるのは。

そこに希望があるからではないか。

今、希望は人類から離されている。

魔獣に世界は侵され、運命の紋様は傷つけられ、希望は永らく失われている。

であるからこそ、貴様の出番であろう。

世界が自滅しようとしている今だからこそ、貴様が出なくてどうす

るというのだ。

人々に希望を取り戻させるのが、貴様の使命だろう。

…目を覚まし給え。

空の樹、よ。

—————

「……………、ふむ。よし、冒頭はこんなものでいいだろうか。いやはや、英雄譚を執筆するのは久々だからねえ。思いのほか時間がかかってしまったよ。この調子では、この小説の完成はいつのことになるかとやらな」

赤く染まった空の光を視床に受けながら、長い時間同じ姿勢でいたために固まってしまった体を、うんと伸ばす男性。

気の抜けるようなセリフとともに、自身の執筆作業のひと段落を告げる。

「ん？せんせい、お仕事終わった？」

「ああ、今日のところは冒頭部分を書くだけにしておこうと思ってね。八重堂からの新作の催促に何とか応えたんだから、ここで息をつくことくらいは許してしまってもいいじゃないかって思ったのだよ」

「そう。お仕事終わったなら、ちようどいい。お散歩に行きたい」

光を反射して七色に光る一房の髪をもてあそびながら、自身の仕事机から離れる男性の姿を確認し、一人の少女がココナッツミルクのコップを持ちながら、彼に近づく。

眠たげに瞼を二割ほど落として、口調にも抑揚はない。しかし、その瞳には燈火が揺らめくかのような光を湛えて、元気一杯、…に心なしか見えなくもない雰囲気を出している。いや、どうだろう。そうでもないかもしれない。わからない。

…ともあれ、その雨色の髪の少女、七七はつい先刻執筆の仕事を終えた男性、芥川敦の小袖を控えめに引っ張り自身の願いを告げたの

である。

「ふうむ、散歩、か。いいね、やろうかしらん」

「おー（天下無双）」

「いようしっ！そうと決まればさっそく、外行きのお着物に着替えてこないとね。七七くんや、自分のお着換えをとってきていらっしやい」

「おー（同音異義語）」

季節は秋である。璃月（リーユエ）と呼ばれるこの大陸最大の港町では、食の歓びを祝う月逐い祭が須らく終了し、冬支度を始める時分となっていた。肌寒さの目立つこの時期に外出するのには、やはりそれ相応の準備が必要になるわけで。特殊な事情があるとはいえまだまだ小さい子供相応の身体機能を有している七七に対して、着替えを薦めるのは至極当然なのである。氷元素の使い手とはいえ、寒いものは寒いのだ。寒中水泳大好き浪花騎士？知らん単語だな。

芥川は徐に立ち上がると、箆筒から服を一式取り出し、室内服をすすると脱ぐ。

脛を覆う脚捲（レッグウォーマー）を着用し、踝を覆う長さの靴下を履き、裾の広い水国袴（ズボン）に脚を通して、襯衣（シャツ）の袖に腕を入れて、莫大小（メリヤス）地の衣を羽織り、仕上げに飲み込まれるような宵闇色の外套を着る。

彼の散歩着はこのとおり。楽さに磨きがかかった、所謂駄目人間装束である。

男だからこんなものだ、という甘言に身をゆだねて、服飾の手間を省いた怠慢であった。

日常の生活の彼此を筆致を尽くして、脳味噌に汗を掻き掻き、表現するはずの小説家という立場にはあるまじき、表現の自由を水底に放り投げた装束であった。

それでもなんだかんだ格好好く見えるのだから、もはや救いようはない。

ところで、「ルーズな男はよくモテる」とは誰が言った言葉だろうか、全く、真理を突いた言葉の足りない文言である。

顔がいいからルーズでもモテるのであるから、乾酪牛丼を大層に好む私がこういった装束に身を襲しても、罷り間違つて視覚認識の狂い果てた優しさにあふれた美女でもない限り、他人がそんな私のことを魅力的に思うはずもなく唯々「ルーズ」な男程度にしか認知しないのが行き着く先の果てである。

あゝ無情也や、この世界。結局顔なのだよ此畜生。

男はつらいよ、おいでよ柴又。

閑話休題（それはさておき）。

身支度を終えた芥川は七七の部屋に向かう。

「七七くん、用意は終わったかい？」

「んあー、ちよつとまって。今開ける」

間延びした声が扉から聞こえてきて後数刻、控えめに戸が開いた。「はい、失礼するよー。準備ができたかどうかの質問に回答がなかったってことは、恐らく多分何か着たい服があるのかな？」

「おー（感心）、大正解。せんせいにこのまえ買ってもらったもこもこに着たい。あれがどこにあるのか、一緒にさがしに行く。つれてって」

「わかったわかった、わかったからね。この服の裾を引き延ばすのはやめておいてね。あの上着は確か居間の上着掛けにかけておいた筈だから、一緒に行こうか」

「おー（計画通り）」

「でもその前にちゃんとそれ以外の服を着なさい。いくら気心の知れている間柄であるからって、下着のまんま家の中を歩き回ることを許した覚えはないよ」

「…七七わかんない」

「？おっしやい、メモに赤文字で書いてあるぞ。何ならこの扉にも同じことを記した張り紙が貼ってあるよ」

「…せんせいてつだつて」

「はいはい、手伝いますよお嬢さま。じゃあこっちに來なさい。着る服はこれでいいのかい？」

「おー(せいかいのおと)」

最近の七七のトレンド、もこもこなふく。

単純な裏起毛の服も肌にもこもこが触れるので好きらしいし、見た目がもこもこなスエーターでも、自分が毛玉の塊になった気分になるから好きなのだという。

幼い子の感性だから、斯くも不思議極まる言動になるのも時偶にはあるのだろうが、そうであっても毛玉の塊になりたいなぞと曰う幼女は中々いないであろう、と言う推論も浮かぶ。

筆者が思うに、七七にとつてのもこもこことは自分の心と体を温めて癒してくれる究極の素材であるのだ。

そんな最高の存在に七七自身がなること、それは他人を温めて最高の癒しを与える存在になれると言うことである。

自分が気に入っている存在に対して、癒しを与えるのは、自分がその対象を気に入っているのだと言う事を言外に伝えるという意味にもなる。

本人は特殊な立ち位置であるため、無意識の裡の行動なのだろうが、それでもそう言った意味に取られかねない事を平然とやってのけるのだから、ある意味確信犯とも言えるのかもしれない。

惜しむらくは、その気に入っている対象が朴念仁極まりない間抜けであると言うことと、本人が自身の感情に対して答えを出せておらず、何となく居心地が良い位の認識しか持っていないということだろう。

「しかし、七七くんの肌は綺麗だねえ。これは私も装飾のし甲斐が在ると言うものだよ」

「ふふん、これも仙法。白朮の作った入浴剤を思いきりにお湯に投げつける術。しぶきがとんで、きもちがいい。後でせんせいにも見せてあげる」

「其つて果たして仙法なのかな…。まあ好いかな、ほら七七くん。両手を上げなさいな」

ところでこの幼い少女、七七は、不卜盧にて薬師見習いをやっている少女である。

忘れっぽいその性分に見合わず、対象にどういう薬が適しているのかを正しく判断できる知識を持ち合わせており、それに加えて、他人の不調を慮る気遣いも有している。

彼女に適切な知識を授けている師匠は白朮という名である。彼を保護者として日々の薬師の勉強に励んでいるというのが、彼女の日常なのだ。

彼女の居住地は、この白朮の仕事場兼棲家である不卜盧であり、信頼できる保護者の彼となんかよくわからないけど居る白蛇（なんだその物言いは）との三人暮らしをしている。

しかし、現在この不卜盧には白朮と蛇はいない。というのは、彼は隣国スメールに薬学研究の特別講師として招かれており、約一ヶ月の滞在をしているのである。

璃月随一の薬師である彼は、その称号に違わず優秀な薬学の知識を有している。

故に、薬品製造の関係からフォンテーヌに招かれたり、薬学研究の為にスメールに臨時に滞在したり、さまざまに出張する事は珍しいことではないのである。

ここで漸く今現在の状況に繋がる。

こう言った深い専門知識を必須とする仕事の数々において、七七のような見習い薬師は、その年齢（公的には幼女である）やその未熟さが仇となってしまう、些か力不足になってしまうのだ。

もちろん、見稽古や単純な勉強といった意味合いではしつかり役を果たせるであろうが、今回の仕事は、研究一辺倒のはつきり言っ詰まらないものであった。

七七は飽きた。

やる気が出ないのである。

そこで、本人の希望や白朮の依頼もあり、白朮が出張中の一ヶ月間、七七は芥川の下で助手として庇護下に入ったのである。

なお、このような事は実を言えばそう珍しいことではなく、現に七七は一年の内半年を芥川の下で過ごす位には頻度が高い事なのだ。

実際、薬師見習いという立場も七七の特殊すぎる立場を偽装（カムフラアジ）する為のものであるから、こういった事例が大きな問題となる事はない。

芥川自身も、七七のことを年の離れた妹のように考えており、万一にも不埒な事変が起こるはずもない。

やはり、璃月は平和なのだ。

あ、なのです。

「ん、そういえばせんせい。今日はあとどれくらい空き時間がある？七七、お外でご飯が食べたい。いい？」

芥川に着替えさせられるがままになっている七七は、唐突に外食の希望を口にした。

因みにこういった経費はしつかり白朮が出してくれるので芥川に負担がかかることはない。

しかし、芥川が自分から七七の為に様々に世話をするので、白朮は実質半分くらいしか負担していないのだが、芥川が願っていることなので、然程の問題はないのだろう。

「ふむ、そうだねえ…。今日の分の執筆はこれくらいにしたら、夕ご飯を外で食べることに出来るけれど、肝心なのはどこで食べるかだね」「どこがいい？七七はお野菜が食べたい」

「うん、野菜か。流石に予約も無しに今から琉璃亭に行くのは無理だろうし、同じ理由で新月軒も却下。万民堂の夜の営業は…、今日はやってたかなあ…？まあ屋台で食べるのも悪くはないからなあ」

芥川は思考する。

予約必須の料亭に今から突然に行くというのはまず無理なことであるし、第一向うに迷惑である。



かといつて、なるべくなら七七のような幼い子を夜風に晒しながら  
屋台で食べるというのは、悪くはないが避けておきたい。

思惟する。

申出通りの野菜を食べるならば、一番好いのは万民堂の二階を使わ  
せてもらう事だが、果して開いていたかどうか解らない。

思索を数秒程巡らせた結果、彼が出した答えは。

「取り敢えず万民堂に行つて、空いているかどうか確認しよう。駄目  
ならそれはそれでまたその時に考えればいいかな」

「おー（知らんけど）」

「ほら七七くん、できたよ」

「ん。序に居間まで運んでほしい」

「はいはい、仰せの俣に」

思考を後数刻の自分に任せる丸投げである。

炎スライムを下投げする丘々人も驚愕のぶん投げ振りである。

—————

居間に入ると不審者がいた、その時の状況を端的に表せばこうなら  
ざるを得ない。

まるで今からいたずらをしますよと宣言しているかのような腹立  
たしい微笑をそのモチモチの顔に浮かべつつ、「おかえりー」とのんき  
な声色で彼らに挨拶をする少女。

戸締りをしていたはずのこの家に招いた筈のない人間が我が物顔  
で居座っているのである。

不審者だね、わかるとも。

「やあ今日の家宅侵入不審者壱號。生憎乍ら今日のお仕事は此れで終  
いにして、今から此の七七くんを食事に連れていく事にしたんだ。何

所も予約していないから空いてる店を一から探さないとならない。だから、余り長い時間御前の応対をする時間が無いんだよ。済まないね」

「いいよいいよべつにい。それに、未だ何所のお店にするのか決めて無いなら、都合が良かったね！」

「ほう？その様子だと、何か私達に提案があるかのようなね」

「だーいせーいかくいつ!!!今日は此の後から暇だから、せんせーと七ちゃんをお茶に誘おうと思ってたんだー!もう今日はせんせーのお仕事が無いのなら調度好かったよ、せんせー私とお茶しなくい?」  
如何やら、店を探さなくとも好かったみたいである。

続く

## 田中の怪異 二

所変はつて場所は万民堂二階席。

厨房にて腕に縊りを掛け料理を作っていた卯師匠に芥川が三名の食事が今から可能かを聞けば、チョットの間も無く二階席に案内された。

この店の独り娘は今日は不在とのこと、日銭を稼ぎに店員の日雇い仕事をしていた某占星術師に注文を伝え、今現在は料理が来るのを待つ小休止だ。

「思うのだけれど」と、芥川は目を欄干に向けながら、呟く。

七七は椅子の背凭れに身を預けたままで、暗然と宙を瞞めている。その代りだと言はんばかりに、「んん〜?」と、胡桃は反応を見せる。

先刻までは小声で十只丘々子（通称：本格的（♂））ヒルチャール兄貴の歌）の一節を口誦んでいたと云うのに、まるで耳を聳っていたかのような素早い反応速度で彼女が返答したので、芥川はその心中で相も変わらず耳が良いなど考えながら、先の発言の続きを話し始める。「この見渡す限りの星空が動かない欺瞞の天球だとすれば、星の数に限りがあるはずなのではないかな」

芥川は、厭にロマンチストな言を更に宣い続ける。

「さっきの星詠みが昔にくれた話では、この世界の星空には、個人個人に固有の星座が存在するということなんだそうだ。人間にも仙人にも、神にだって自分の星座があるらしい。」

「ふうん? それで?」と胡桃は面白いことを待ち望んでいるかのような眼で芥川の口が開かれるのを待つ。

「はは、まアそう難しい話では無いんだよね。ほら、星空が動くことがないというのは、テイワットの共通認識だろう? となると面白いことに、各人の持つ星座に使われている星々はある一定の割合で共通していることになる。つまり、だ。私の持つ星座と、君の持つ星座の中にももしかすると同じ星が共通して使われているのかもしれない。荒唐無稽に聞こえるかもしれないが、星々が共通しているからこそ今日の私たちの関係性が成り立っている、ともいえるのかもしれない。そ

う思うと、運命というものも何も馬鹿にできるものではないなと思つたのさ」と、芥川は何とも夢見心地な感慨を口にした。

「おろ？どうしたの、せんせー。今日はなんだか表現が詩的だねえ？」

胡桃がいつもとは何か少し違和感のある芥川の様子に、揶揄い交じりの問いかけを投げかける。

ところで。

いつもの芥川、というのはどういうものか。普段の彼は飄々とした態度をとりながらも、出会う色々な事項を穏やかな懐で受け止めて、和やかで楽しい空間にしてしまうという態度をとるのである。言つてしまえば、璃月の人々にとって芥川は「頼れる面白いおにいさん」なのだ。

たとへば。

仙人に愛される少女、ヨオーヨがいる。

彼女はどういう人物かというのを簡単に言へば、ひたすらに面倒見が良く、その幼い年齢に見合わないほどの聡明さと世話焼きな態度をみせる「おませさん」な子どもである。

山間に隠居している両親の元を離れて、ピンさんの下で武芸・勉学とともに弟子として学びに励む彼女は、そのふるまいの可愛らしさと面倒見の良さから璃月中の人民に愛されている。

一部には、彼女を母と崇めて丁重に扱う「ヨオーヨママを守り隊」などという荒唐無稽な集団も存在しているほどである。因みに、彼女の師匠……の友人である削月築陽真君は、「あの組織については名前は兎も角、その活動は認めてやらなくも無い。仙人の弟子はある程度守護されて然るべきだからな。だがしかし、あの阿呆な組織名は如何にか為らんのか？」と言ったという。

矢張り仙人といえど、孫のような存在に対して多少甘くなるのは凡人と然程変わらないらしい。

## 閑話休題。

幼くして既に万人を魅了する母性を身に着けつつあるこの槍使いは、果たして今現在術学的な持論を吐き出しているこの文筆家に対して同じき魅了を仕掛けているのか。答えは意外にも、否である。しかも、詳細はより意外である。

というのは、ヨオーヨという少女はこの芥川を兄のように慕い、挙句の果てに彼のことを「敦にいに」とまで呼んでいるのである。そう、彼女は彼を魅了するどころか、彼に魅了され返されているのだ。

：というのは些か言い過ぎかもしれないが、とにかく、ヨオーヨは彼に自分にはいない父性、ならぬ「兄性」を見出している、というわけだ。むろんこの事象は多方面の反応を活性化した。母親の事情から年に数回自宅を訪れていた仙人諸兄は月に二回くらいのペースで芥川の監視、もとい自宅訪問に来るようになったし、件の「守り隊」の面々からは顰蹙を買うどころか「守り隊特別顧問」だとかいう謎の役職に（いつのまにやら勝手に）祀り上げられている。

この例で何が言いたかったかといえば、いつもの芥川とは、万人、母性満点の少女をも含んだ万人を虜にする、「お兄ちゃん」たる雰囲気をととも強く醸し出す、いうなればいつでも頼れる存在なのである、ということである。

対して今はどうだろうか。

果たして自分の脳内で繰り広げられる幻想世界を蛇口の栓が開いたままになっているときのようにザバザバと垂れ流すその様子には、果たして頼りがいを感じ得るのだろうか。

答えは、どうあがいても否、である。

寧ろ、自分の中に彼に対する不信感が沸き上がったたり、ともすれば嫌悪感まで生じるかもしれない。

この、軽い言い方で妙に「ウザい」彼のその珍妙さを、胡桃はいつもよりおかしい、と言い表したのである。

表現が詩的、とはただの気遣いである。普段変人極まる行動により少し周りから敬遠されている彼女にも、最低限度の良識はあるのだ。目的のためならばその数少ない良識を思い切り放り捨てるだけなのだ。決して良心が欠如しているわけじゃないのだ。

…だよね？

ところが芥川も自分の返答に対する胡桃の歯切れの悪さに気が付いたようで、少し苦笑いをしながら、

「おっと、いけないいけない。少し気性が興奮していたらしいね。申し訳ないなあ。」

「今日は英雄譚形式の小説を書こうとしていたからね、さっきの娘のこともあって、少し引つ張られているのかもしれない…。いかんかん、切り替えないとね」

と、すぐさま理性を取り戻した。

胡桃も、芥川のその理性的な眼の光が戻ってきたのを見て満足げに頷く。

「せんせーちよつとお疲れなんじゃない？最近執筆続きだつて聞いたけど、最後にせんせーが寝たのいつなのさ。場合によつたら、今日は強制的に寝かしつけるよ？」

「いやあ、二週間前から碌に寝れていないと思うから、その過程が本当だとしたらオマエの手助けを借りることになるねえ」

胡桃は思わず口角を引き攣らせた。まあ仕方がない。最近多忙だと聞いていたこの文筆家が、思っていた以上に追い込まれていたのだから。逆になぜ今まで気づかなかつたんだ。

「うっわあ…。思ったよりひどいじゃんせんせー」

「今日は寝られる予定だから、心配しなくていいさ。」

「そんなんじゃ七七ちゃんの保護者代わりとして及第点はあげられないねー。よっしー」

そういうと、胡桃は椅子から離れて立ち上がり、天にある外なるソラと交信をしていた七七を横目に芥川を指さして宣言する。

「今日、せんせーん家にお泊りしまっす！拒否権なし！」

「おやおや、それは少しばかり用意が必要になりそうだね。」

「ふっふっふ、胡桃さん考案のスーパーハイパーセラピーリザレクションをお見舞いしてあげちゃうゾー！」

「嫌な予感しかないねえ。まあ、お手柔らかに頼むよ。」

スーパーハイパーセラピーリザレクション。今さつき胡桃が考案し名付けた超究極体力快癒プランである。相手は死ぬ。

—————

さて、胡桃のお泊りが決定した直後、突如胡桃の後ろから来たバイト占星術師が

「おや、かの有名な文豪、芥川敦殿は、『田中の怪異』に侵されているようで。よくわかりますよ、私も論文の納期が際になると屢々田中の怪異に囚われるものですから。」

とか言い出したのである。

胡桃は息を吸い損なった。咽た。

漸く外なる理からその意識を現世に戻した七七が、耳慣れない語彙について占星術師に問い掛ける。

「…青タイトのひと。『田中の怪異』って、なに。」

「たっ、えっ、タイトのひと?!?!」

占星術師は驚愕した。水占的芸術評点の高い（自分の好みともいう）自分の服装について、一括りに青タイトと表現されるのは甚だ心外だったのである。

自分の服装が他人からどう見えているのかを彼女があまり把握していなかったというのもある。あと卯師匠が事情―娘がスライム創

作料理を作っている最中に爆発し、干していた制服がすべて台無しになったのだ―があつて店の制服を切らしていて服装自由になっていたのにも原因がある…かもしれない。

兎角、驚愕のあまりか固まって動かなくなつた彼女、アストローギスト・モナ・メギストスに痺れを切らしたのか、七七は驚くことに脅しに入った。

「教えなかったら、いあいあしてやる。」

「そういうのは自分でたどり着くものと決めているので結構ですつ！  
教えますから大人しくしててくださいい！」

効果覲面である。

モナのような自己研鑽意識の高い学者というのは、自らの手で真理に到達したくなるものであり、自分が研鑽をかけている先の行き着くところである真理の究極を道半ばにて会得させられるというの、それが参考資料でない限り避けようとするのだ。

いわゆる、「ネタバレは犯罪」というやつである。

—————

これは璃月の伝説上の話である。

嘗て、璃月にはクオンと呼ばれる名匠がいた。

試作と題した数々の武器を作つたことで有名な雲氏や、古の千岩軍が愛用した刃を作つた星氏と寒氏にも及ぶほど、いや、技量だけで言えば先に述べた名匠をも凌ぐかもしれない。

それほど腕を持つ彼が、神をも凌駕する神業を有していると信じている璃月の人もいる。

彼が作つたとされる武器はたくさんあるのだが、その中でもとくに有名なものは次の三つである。

若い頃に作つたとされる剣である匣中龍吟は、彼の生まれながらの才覚を工夫することなくそのまま埋め込んでしまった、無念、無慈悲



の極みとも評される血吸の魔剣である。

彼が自らの才覚を万全に扱えるようになった頃に作られた長槍である、匣中滅龍は龍の素材で作られた強大な武器であり、龍によって龍を征する、英雄の為の武器である。

彼の老年の作品である宝珠、匣中日月は、天地日月の力を満ち溢れさせる法器であり、天変地異までももたらしたと噂される、神器に及ぶ暗金の宝珠である。

これらの武器がとくに有名なものには理由があつて、明確な形で保存状態も良く現存しているからなのだ。

例えば、岩武帝君が愛用していたとされる虹をも $\boxtimes$ く(つらぬく)破天の槍や、彼が嘗てのテイワツトに聳え立っていた山から切り出したとされる斬山の刃などに当てはまるように、多くの伝説上の武器は現存していない、または保存されていないというのが普通なのである。匣中の武器は今現在、モラの製造所である黄金屋に収蔵されている。

なので、武具鍛造を志す多くの人々は、年に数回ある黄金屋の観覧日にこの伝説の武器たちを拝みに足？く黄金屋に通うのだそうだ。

だから、往生堂の裏庭に制服を干す物干竿に使われているやたら光る棒や、鍾離が草刈りをするときに使っている妙に切れ味の良い剣は、別に伝説上の武器を無意味極まる使い方で用いているというわけではないのだ。ないったらない。

何の話ですうく!!!

鬼哭啾々。

これは、どこぞの虫相撲達人（他称（自称））が感動的な小説を読んでいる時に声を大にして泣き喚く様を指した熟語のことである。

…という訳ではなく、怒ると鬼のように怖いどこぞの代理団長が仕事のしすぎで感性がおかしくなって、大して心を揺さぶられないような恋愛小説を読んで何故か号泣してしまったその様を表している言葉のことである。

…という訳でもさらさらない。

本来の意味は…

未練を抱えた亡霊が、自らの無念を怨み生者を嫉み、慟哭を上げて叫ぶ様のことである。

旧き戦のあったところでは、感の強い人には心の底から冷え切るような声が怨怨と聞こえてくるのだそうなの。

そう、ちようどこんなふうに…

臆嗟！ワレはヌシ等が憎い！ワレより恵まれたヌシ等が、ワレを顧みぬヌシ等が！ワレの呪いを受けよ！ヌシ等が此の呪いを享けるのが恵まれしヌシ等の義務である！厭、口惜しや！忌々しう口惜しや！

啞々！怨めしや！

「…………お前の後ろにだアアアアアアアアアアアア!!」  
「「「「ギャ……………」!!!」」」」  
「わー?」

灯りの少ない暗い部屋の中で、金髪の旅人が話したお話の余りの臨場感に、思わず叫んでしまった5人。

と、その5人をみて多分叫んだほうが良いのだと判断して喃語を上げた七七。

季節は夏。

煌めく海に飛び込んで、大海に身を委ねるのもよし、祭り囃子に身を浸し屋台を回り花火を嗜むのもよしの良い季節である。

そんな夏の代表的な風物詩。

花火、祭り、海、TGS、期間限定マップ、などなどと色々がある。だが、なんといつでも欠かせないものがある。

そう、怪談話である!

この世ならざる魑魅魍魎の類に少し触れ、その悍まじさに背筋を凍らせる。

暑い夏を寒々と過ごす格好のイベント、それが怪談話なのだ。

璃月の一角、芥川邸。

その居間では、本来集う筈のない人たちが、納涼のために訪れて、社交を温めていたのだが、誰が言い出したか納涼耐久。

「……百物語をみんなですれば、話もつきることがなくて済むからちようど良いんじゃないか？ さつそくやってみようぜ！」

：台詞だけで誰の提案か想像がつくのだが、スルーである。

兎に角、一番手からぶつ飛んだ話題を提供した旅人であるが、その恐怖度のほどは聴衆のリアクションから察せられるだろう。

さて、旅人の意外なほどのお話の才能に、素直に脱帽している芥川。彼が多少眉間を窄めて困惑の表情を軽く浮かべながら苦笑しているのは他でもない。

意気揚々と自分がいかに怖い話を恐れていないかを演説してくれただけであり、それと同時に芥川が少し怪談の類を苦手としているというのを思う存分にあざ笑いきってくれたはずの阿呆が、すっかり顔色を青ざめさせ足腰を砕いてしまい、芥川の左腕に思いつきりしがみついて涙目になっているからである。

「いやいやいやいや！ちがうよ、ちがうんだよ!!ぼぼぼぼ僕が、あああんなお話に遅れをとるなんて、あ、ありえないだろ?!神様を舐めてもらっちゃこま……」

「うらめしやあ(こんにやくペチャア)」

「うぴやああああ!!!」

口先だけの弁解で、もうほとんどあつてないような恐怖していないという信用を取り戻そうとしていた彼女は、出会って早々にこいつは弄ると面白いおもちゃ、もとい玩具だ、と確信してしまった胡桃が後ろからこんにやくを不意打ちにてほほ肉に張り付けたことで、その引き攣った笑みを恐怖におびえる表情に変化させて抱き着く腕の絡めどころを芥川の腕から芥川の胴へと変えて、珍妙不可思議で神としての威厳(笑)をかなぐり捨てたなつつつつさけない悲鳴を上げる。

恥ずかしくなったのか顔を芥川の服に押し付けてフゴフゴと言葉にもならない音を出す。おそらく、懲りずに何か言い訳をしているのだろう。

「あれれ〜？怖いものなかつたんじゃなかつたつけえ〜、うりうり〜」

「ンンンンンンンンンン！！！！」

「何て？」

「怖くない!!!」ってさ」

「なぜわかるんだ」

彼の目前には、前回から家の建て付けメンテナンスを買って出てくられていて、同居人が来ている都合上なし崩し的に芥川邸に居座ることになった建築士カーヴェ。

彼が、同居人の口車に半ば勝手に乗せられて（側から見たら自分から聞きに行ったように見えたのである）、怪談話を聴くことになり息も絶え絶えに怖がり震えているのが見える。

「うそだろう…??僕はもう警戒なしには教令院の門をくぐることができなないぞ…。あの門が見えただけで、今の話がフラッシュバックしてしまう…」

「君はまさか今の話を毎時毎分に留めてスメールシテイでの生活を過ごそうとしているのか？俺は例えそう言う事実があつたとしても、全く気にすることなく過ごすことができるんだが。やはり君にはなにか致命的に度胸の足りない部分があるらしい」

「君はまったくどうしてこう毎回僕に対する表現の語彙がそうやって苛烈に批判的になるんだ!!僕に限らず、人に対してかける言葉の使い方を見ると言う知性ある生き物として守るべき当然のルールを、なぜ僕には適用しない!」

「ほう？君が俺に対して、何の負い目もなく接することができる立場だと主張するのであれば、滞納している家賃をさっさと払ってもらい

たい。あくまで持論だが、尊重する人間は選ぶべきだと考える。君は自分が何時であっても優先されるべき立場であると勘違いしている節があるが、果たして君は俺に対して、一体どのくらいの恩があり、そしてそれを踏み倒そうとしているのか、是非そのご高説を聞いてみたいのだが」

「つぐ…、逃げ場を封じる言い方をして…、君ってやつは本ツ当に!!」

「ねえ、せんせい。あの二人、なかよし?」

「ハハハッ、きつとそうだね。でも、直接聞くのはやめておきなさい。多分ああだこうだ言って否定しようと躍起になるはずだからね」

「わかった」

やいのやいのと言いつている書記官と建築家の横では、幽夜浄土なる秘された聖園の、紫雷迸る神座に坐す運命?織る断罪の皇女、フィツシユル(emilichang)が、顔を青ざめさせてカーヴェの隣にて縮こまり、彼女の忠実なる従者オズに慰められている。

「あばばばばば、し、知らなかったわ!!このような事実が門扉には隠されていたなんて!!私はこれからどういう気持ちで門をくぐればいいのかよ!!!」

「落ち着いてくださいませお嬢様、例えそのような事実があろうとも、皇女殿下に置かれましてはそのような出来事はあくまで些事に過ぎません。気にすることでは無いのです」

「分かってるわよオズ!!!で、でも…、一人でトイレ行けないよお……」

「……はあ」

「あ、あわ、我が預言者たる芥川よ!きよ、今日の夜は私に傍で伴をする事を赦すわ!」

「あ…、お嬢様は、一人で寝たり花を摘むのが怖いのだとおっしゃっ

て…」

「どおオズツ!!」

「うーん、私がついてあげようか？フィツシユルちゃんにさ」

「…いんや、私が座って寝ずの番をしておくよ。それで、お前もいてくれれば助かるよ」

「ふふん、せんせの監視員ってことだね？まっかせて！」

怖じ惑い給う皇女殿下エ m : フィツシユルの近くでは、何故か男泣きをしておいおいと泣き喚いている狂喜乱舞の剛力無双こと、荒瀧・何物をも平等に扱い戦いに反則は持ち込まない・一斗が同じ荒瀧派の久岐忍と、偶然居合わせたヨオーヨの肩を掻き抱き、まるで酔っ払った泣き上戸のおじさんのように絡んでいる。

「うおおおおおおおおおお!!!俺は、俺はあ!!!同じ妖怪として、こんな仕打ちを受けた奴のことを!!!思わずにはいられねえ!!!え!!!せめて

この俺様、荒瀧・人情に人一倍、いや鬼一倍厚い頼れる漢の中の漢・一斗は、ここで知り合ったお前達のことを2度と忘れないで大切にしてみせるぜええええ!!!うおおおおおあああ!!!」

「親分ちよつと、かなりだいぶすごくうるさい…!! 耳が壊れそうなんだけど…」

「一斗さん、私たちだけじゃなくて、貴方のまわりのみーんなも、大切にしてあげてくださいね！一斗さんみたいになかったこいいい人に守ってもらうのが、ヨオーヨだけだなんて、もったいないですもの。ね？」  
「おおおおおんんん!!!ヨオーヨおおお!! お前、良いこと言うじゃあねえか!!当たり前だろうがよ!!俺が、お前達を、全力で守ってやるからなあああ!!おおおおおおおお!!」

「親分ちよつと耳痛くなってきたから、一旦離れる。ほら、ヨオーヨ。」



こっちで次の話の準備をしないと…」

「ふふ、もうちよつと一斗さんのお話を聞いてから、準備してもいいですか?」

「はあ、ヨオーヨ、あんたホントに…」

「あの歳であんなにおだて上手になっちゃって…、末恐ろしい子だわ!」

「なんだその口調、似合わないぞ」

「へへ、一回言ってみたかったんだよねこの台詞!」

「とつてもおあほさん」

「んなゝっ」

さて、こんな惨状を巻き起こした張本人であるが、なんと本人満更でもなさそうな顔で芥川の方を見つめてドヤ顔をしているではないか。

そして本人が全く気にしていないがその腕には某非常s…、基い案内人のペエモンがひつしと抱きついており、号泣しながら罵詈雑言(世界ランク0)を投げつけている。もちろん、世界ランク8相当の実力を持つ旅人蚩には全くと言って良いほど通じていない。しようがないね(諦観)

「たあああびいいいいびいいいいとおおお!!!こんな、こ、怖い話をするなんて聞いてないぞおお!オイラ、オイラっ、もう少しで背中が凍っちゃうとこだったんだぞっ!!ばーかばーか!!うえええええんん!!!」

「まあ、パイモンには何も言っていなかったもん。聞いてないのは仕方ないよ」

「そんなことは知ってるんだよお！でっ、でも、でもお！オイラがこういう怖いのが苦手なの知ってるだろ!?なら、それならちよつとくらい言っておいてくれてもよかつたじゃないか！けちゃんぼめえ！」

「ふふ、こんなにパイモンを怖がらせられるなんて、もしかしたら私も芥川みたくお話の才能があるのかも（ドツツヤアアア）」

「そんな才能よりオイラをもつと気遣う才能を磨くべきだぞ!!」

「…あらら、パイモンちゃんにはこの類のお話はまだまだ早かつたらしいねえ」

「まあ、慣れればこういう恐怖感も楽しめるようになるよ。それにしても、蛍の話の技量、なかなかのものじゃないか」

「お？せんせーのお墨付き？へー！せんせーがお話の技量を褒めるなんて中々ないのにどしたのさ！珍しーじゃん！」

「いやいや、しっかりと私が話を聞いた結果の真面目な評価だよ。あの子には自分の経験してきたことを脚色装飾織り交ぜて話す能力が、豊富にあるように見えたんだ。そんなに間違っていないだろう？」

「ん（便乗）、せんせーの見たてなら間違いないと思う。知らないけど」

「とりあえず、私は寢床を整えたあと、少し出る用事があるから、先に始めておいてくれ」

騒がしすぎる面々が、以上のようにあほうへんかん（阿鼻叫喚）の様相をみせるなか、芥川はここにいる全員の分の寢床を用意しにそつと席を離れる。

「あ、そうそう」

と、扉の取っ手に手をかけいざ部屋を出ようとしたそのままの格好で思い出したかのようにその場にいる全員に告げた。

妙に通る声で、彼はこう言った。

「あまり騒がしくしすぎると、知らない奴が会話に参加していても気づけないぞ。だってほら、さっき」

「叫び声、5人だけじゃなかったら?」

パタン。

「「「「:」」」」」

「ほう、まさか本当にここで怪異の類が起こっていたとは、是非とも気付いてみたかったものd」

「「「「「ギャー」」」」」

「うわー（無感動）」

!!!!!!  
「「「「」」」」」

-----

「?、如月、ナヒーダ。いるか」

「我を呼んだか」

《うん?何かしら、如月は私の近くにいるわよ?》

《な、に、兄さん?!?!なんだい、出番なのかい?!》

「恐らく、数多の魔を屠ってきた蚩に憑いて来た魔が、いま僅かながら悪さをしているらしい。幾ら神の目の所有者だとはいえ、これはあまりにも危険だ。私は少し席を外し、母二人の下へ樹の調整の報告をしに行かなければならない。」

「それで。何が起ころう?」

「権能全てのメンテナンスをするから、一時間ほど私の家の【壁】が崩れる。その時を狙って、魔が蚩を屠ろうと動くはずだ。お前達には、彼らの安全を守ってほしい」

「良からう、其方がそこまで警戒するとなると、彼のアビスに関係のある禁忌が悪さを為しているのだろう。ならば、我は其方との契約に従い、帝君の名の下に、黻魔するのみ」

《わかったわ、私はアナタの家の周りに殿堂を敷くわね。必ず無事に帰ってくるのよ、…お兄ちゃん?》

《ハハ、ハハハハハハツツ!!!!この僕の兄さんの家を穢らわしい足で汚辱せしめようとするだけに飽き足らず、兄さんが人を思いやるその尊い気持ちをも踏み躪ろうとするその愚行、フフ、フフフハハハフハハハハ!!死すら生温いツ!!ああ、見てよ兄さん!僕は兄さんのことを汚そうとした愚か者共を誅滅してみせるからね!アツハハハハハハハツツハハハハハハ!!!!》

「…如月、程々に、ね?」

《解ったよ兄さんツツツ!!!!》

「あー、ナヒーダ。ストップパー役宜しく」

《フフ、了解!》

「まあ、一応保険の保険を掛けるか…」

「■者権限、擬似発動。自動承認。虚無の星神のヴェールを以て、世界を遠ざける。ア■ス粒子、結束。生成、完了。樹との連結申請、管理者権限により自動承認。命令授与。■ナー||イマジナリ、この家を守

「…蜚、どうか、無事で」  
れ」

〜 者の章 第i幕〜  
虚軸を歪める、魔の胎動

…続かない

グロシを、引くゾ！

田中の怪異。

それは第四の壁を超えて彼方の常識で語ってしまうと、「過労により併発される症状」のことである。

疲労のあまり、面白がる基準が変容してしまう。

疲労のあまり、些細なことに怒りを覚えてしまう。

疲労のあまり、思考が陰鬱になってしまう。

疲労のあまり、気分が高揚して思考と行動が噛み合わなくなってしまう。

健康的な人物が、疲労のあまり、普段の振る舞いとは異なった行動をしてしまうその様のことを、此方の常識に当てはめると、「怪異」と言うことになるのである。

コレを、『怪異』として扱うのは、その現象の要素全てを遍く照らし返した言葉であるとは言えないのだが、実際に生きる空間に於いて集合に包含するという面で、何も間違ったことと必ずしもならない。

このことを説明する上で、壁越しの面々には『怪異』と言う概念がこの空間に於いて如何様な扱われ方をするのかを先に説明せねばならない。

この空間、すなわちテイワット大陸で、『怪異』とは稲妻発祥とされる言葉ではなく、璃月発祥の言葉なのである。その意味は『妖魔、業魔など、この世の遍く全てに蔓延る、生命繁栄に仇為すもの』という容易に想像できる意味と、『思惟を尽くそうとそれについて計り知れない謎が残り続ける怪しい事象』、そしてこれを転じて『生ける者の裡に潜む狂気、あるいはこれに類する諸事象』という意味が存在する。

前者であれば、『人でなし』という蔑称ローテイワット大陸には、人ではないが人に仇なさないものも存在している（この蔑称自体、人類普遍を重視した見方ではあるが）ので一概にはこの言い方は適したものであるとは言い難いローが当て嵌まるだろう。

稲妻での、魑魅魍魎名椎ノ合戦にて、人を喰らい人外を淘汰した妖怪共は、この『怪異』に入るだろう。

そして、璃月に於いては、かつて帝君の愛する民を護るべく、その命運の尽きるまで存護を貫いた護法夜叉に立ち塞がった妖魔業障の類共は、間違いなく『怪異』に入るだろう。

しかしながら、中々に皮肉となるのだが、次の意味については、前者の意味での『怪異』を破る存在とされる護法夜叉、仙人、龍王、そして帝君自身でさえ、『怪異』とカテゴライズされてしまうのである。

そして、例えば人間が空中浮遊を行うという事象ロー勿論、自らの存在を世界樹にて荼毘に伏し、自らを真名なき我他彼此たる放浪の身へと貶めたどこぞの阿羅漢の場合は、風の元素力の操作によりその身の地面からの解脱を可能にしているし、行脚し諸国にて我慢を忘れた精進を積み七星を統べることとなったどこぞの女傑の場合は、岩元素の持つエネルギーを法力へと変換して、浮遊の術を行っているの、この限りではないローについて、その浮遊の原理が理解できず、人々に畏怖や憧れをただ持たせる現象として名を残す時、その存在は『浮遊の怪異』として名を馳せるだろう。

そして、最後の意味については、そのまま、生きとし生けるものの中に潜む狂気を示すものだ。

私たちは、自らの認可できる領域よりも外に存在する出来事に出会う場合、大抵は自らの存在を守ろうとする。

或いは、肉体に傷をつけて、その痛覚で意識を分散させようとする。或いは、阿鼻叫喚を起こし、思考という論理づけの無いままに行動を起こそうとする。

或いは、自らの機能を封じて、その不自由を以て自身の意識の容量を増やそうとする。

これを、我々は『不定の狂気』と呼び、そしてこれもまた、『怪異』として数えるのである。

人が思う、生命が思う、意識体が思う、「わからない」もの、それがそのまま『怪異』として扱われる。

さて、ここまで『怪異』について話しておけば、『田中の怪異』について様々な話をしたことが注釈づけされた定義として皆々様の頭の中に入ってくるだろう。

そもそも、これは故事成語、昔にあった出来事を語り継ぐ最中に人々の中に定着した言葉である。

その昔、璃月には多忙を極める仙人がいた。

彼は、帝君より賜った能力を存分に扱うため、勉学に励み、修練を積み、諸戦を鎮め、衆人の艱難辛苦を救けてきたのである。

そんな彼について、他の仙人が悩んでいることがあった。

彼は休むことを怠るのである。

先達の夜叉や様々な仙人が、あの手この手を使って彼を休ませようとしたが、彼は帝君と彼の愛する民の為に働く事を何よりの喜びとしており、頑なに自らの身の休息を取ることにはなかった。

しかしながら、如何に帝君の為、民の為と、身を粉にして働く頑丈な彼の身には、否が応でも疲労は積もるのが世の理である。

ある日、彼は、帝君に仕える法術使いと、帝君に助力する魔神、帰終と共に、農作物の収量の計算をしていた。

作業を一度休止し、回しに回した頭を休めるため、飲茶を3人で嗜んでいた時のことである。

法術使いが、自身が帝君より使う事を許されたある法器についての話を持ち出した。

「この法器は帝君に献上されたものなのだが、これは帝君も驚く程の



技量が詰まっているのだそうだ。解るか、あの帝君がだぞ。鍛造においてはこの大陸に並ぶものがないと言っても過言でない帝君が、この法器を私に渡す時、『俺はこの法器に詰まった技量と神秘に深く感心した。これはお前が用いるのが最も良いだろう』とおっしゃったほどのものなのだ」

「へえくえ？そーんなにすごいんですねコレ。ちなみにこの法器、なんて言う銘なんですか？」

「ああ、円い匣の内に日月の神秘を封じ込めたという意味を込めて、『匣中日月』と銘をつけられたらしい。ほら、こう言う字だ」

「うわあ、おつ洒落く！ねえねえ、甘晴？この字お洒落じゃないですか？」

法器使いに、法器の銘の字を教えられ、その風貌に感銘を受けた帰終が、彼にその感動を共有しようとした。

しかし、彼は自らを苛む疲労に無意識にやられており、話を全く聞いておらず、帰終に呼ばれ、初めてその字を見たのである。

するとどうしたのだろうか、彼は頻りに首を傾げ、眉を顰め、妙な事を言い出したのである。

「…なんだこれは、『田の中にて月を目にす』？凝明よ、貴様、詩でも始めたのか。僕はこの続きを考えれば良いのだな？」

これを聞いた二人は、その思考を止めた。止めざるを得なかった。帰終に至っては「へや？」とかいう間の抜けた声を漏らしてしまうほどであった。

彼の放った言葉の意味を理解してくると、ようやく、彼の思い違いが如何様であるかを理解できた。

そうなれば、彼らの中に爆速の速さで擦られる感覚が膨らみ、堰を切ったように笑い始めてしまうのは、不思議なことではないだろう。

彼が、大真面目な顔で、詩を考えようとしたのも可笑しいし、何故そうなったのかよく分からない謎の間違い方そのものもまた面白い。

腹が振れ、呼吸ができなくなる程に笑い、何も気が付いていない彼のみが、自分が仲間外れにされている感覚を覚え、その小さな頬を膨らませて不満を露わにするのを、暫く経って法器使いが見つけ、その

笑いの訳を話した。

「や、いや、何。お前がまさか字の読み違いをこんなにも派手にするのは思わなくてな……。いいか、よく聞けよ。」

これは『田中日月』ではない。『匣中日月』だ。

『匣の中に日月を封ず』という意味であって、決して、た、『田の中に月を見ゆ』という韻律に富んだ面白……。珍妙極まる意味ではないのだよ」

それを聞いた彼は忽ち赤面し、顔を覆って「忘れよ……。今すぐ忘れよ……」と密やかに漏らした。

彼のその様な珍しい様を見て、法器使いと帰終は、また大いに笑ったのである。

この話を後日、帰終が帝君に伝えた際に、帝君もまた大いに顔を綻ばせ声を大にして笑い、そして彼に「六つの日月が地平を回ったのちの朝より、また月が沈むまで、匣中にて休むことを命ずる」と伝えた。それから彼は、日を六つ跨いだその次の日は、体を休める様になり、その甲斐あつてか、彼の活躍はさらに目覚ましいものになっていったのである。

講談師が、このことを大いに語り、璃月の民の間でこの話は親しまれた。

そうして、この頑張り屋の仙人の事を『日月の君』と呼び、皆が親しむ様になり、彼の様に、「疲労のあまりに、普段はしない様なミスや、普段はしない様な行動をしてしまうこと」を、『怪異』の最後の意味に準えて、『田中の怪異』と呼ぶ様になったのである。

—————

「へー、じゃあせんせも『目月の君』みたいに疲れちゃってるんだー？」  
「はは、全く以て否定できないねえ」

「うん、せんせい、悪い子。お仕置きで、七七がせんせいと一緒に寝て、寝やすくなる」

「そのどこがお仕置きなんです？社会的地位にヒビを入れるとかですか…？」

「ちがう。せんせいの寝つきをよくして寝坊させる。締切に間に合わない。うん、完璧なお仕置き」

「うつわあ…、最悪のお仕置きです…」

『田中の怪異』が起こっている時点で、仕事の能率などあつて無い様なものである。

七七のお仕置きは、芥川にとっては間違いなく有利に働くはずのものであるが、それはそれとして執筆が締切に間に合わないというのは、筆を手にする者にとっては致命的な失敗になりかねない。

それを聞き、自分の身にも心当たりのあるアルバイトのモナは、顔を青ざめさせ、締切の恐怖に苛まれるのであった。

—————

食事を終えた3人は、金銭面に異常な欠陥を抱えるモナに多少の『お小遣い』を恵み（モナはあまりの幸運に涙を流し、「この恩は一生忘れません!!!」と感謝を述べていた。その真剣さに、若干胡桃は引いていたのであるが）、芥川邸に戻った。

七七を風呂に入れ終えて、寝巻きに着替えさせた彼が、七七と共に居間で冷たい茶を飲んでいると、胡桃が後ろから肩に腕を置いて、腹の立つ表情でニヤニヤしながら尋ねてきた。

「それで…？ぶにぶにの七七ちゃんの体を堪能した変態のせんせい、

感想をどうぞぞ?」

「きもちわるい」

「グハツ…」

七七の容赦ない一言、リフトオフ。

胡桃のなけなしの信用も、リフトオフ。

誰も得をしない、散々な結果である。

「そんな妙な弄り方をするからだこの阿呆…。そもそも私は欲情はしない体だから、その手の話題は意味がないと前に言っただろうに」

「ブーブー、こういう弄り方をしてあたふたするのを見るのが楽しみなのにいー。はいせんせーは私のお楽しみを一つぶんどりましたあー。責任をとってこの私をお布団まで運ぶよーに!」

「はいはい、仰せのままに、お姫様?」

「ん(憤懣やる方ない)。せんせ、七七も連れて行かないと、進捗終わってたって、勝手に手紙だす」

「そんな事しない様に。全く、そんな確実に人に被害を与える脅し方をどこで覚えたんだか。はい、七七くんは背中に乗りなさい」

「ん(密告)、蛇のせい」

「よし、次あの蛇しばく」

そのまま3人は寝室に向かっていった。

今日も璃月の小説家は、平和を享受したのである。

「どこぞの蛇が被害を受けることが確定しているが、平和だったら平和なのである。」

――

「全くもう！急に不卜廬に来たと思ったらこれまた急に頭をシバくなんて！なんて奴だ！」

「いや、お前、七七くんに変なこと教えただろ？」

「一体全体私が何を教えただって言うんだ！」

「ん（ハンケツを出す）。相手を確実に従わせる、脅し方」

「あー、うん、教えたなあ……」

「白朮、判決を」

「有罪ですね、長生。今日の昼ご飯は没収です」

「そんな殺生な?!交渉術の一つや二つくらい七七に教えただって良いじゃないかー!」

「それはそれ、これはこれ（です）」

「ちくしょう!!!」

……平和だな。

新編 第一章 風を捕まえる異邦人  
生存報告

平穩を護るものに、最大限の祝福を。

平穩を崩すものに、最大限の悔恨を。

羅針盤の指し示す先を、ただ目指し。

墜ちる先をも、綿密に嚮導してゆく。

奇跡なんて望むべくもないし、或いは奇跡を作ろうなんて思わな  
い。

さてもさても祭りの如くに。しかしながらも葬儀の如くに。

騒ぎ歩き静々走り、叫び臥せり黙し暴れる。

逆さまに順繰りに、私はただただ在るくのみ。

彼女はただ、普通の女の子だった。

ただ、だれにとつても普通であることができるだけの、普通の女の

子だったのだ。

彼女に求められたのは、姉であること。

だから彼女は一人のお姉ちゃんになった。

天真爛漫、皆を明るさで照らす、太陽のような女の子。

そんな「お姉ちゃん」を、彼女の神話は映し出したのだ。

…「それ」を求めているのは彼女だけだと云うのに。

――

テイワツト大陸には現在七つの国が存在している。

契約を重んじ、自らの磐石なる歴史を誇る璃月。

永遠を希求し、自らの独特なる国風を誇る稻妻。

知恵を涵養し、自らの秀逸なる聡慧を誇るスメール。

正義を遵守し、自らの華麗なる裁決を誇るフォンテーヌ。

戦争を肯定し、自らの雄邁なる咆哮を誇るナタ。

慈愛を焼灼し、自らの悲愴なる篤厚を誇るスネージナヤ。

そして。

自由を存護し、自らの無垢なる希望を誇るモンドである。

どの国にも多様で珠玉の文化が根付いているが、中でもこの国には  
刹那的でありながら不変的な、美しい文化が根付いている。

「久々に来てみるが、相も変わらずこの城の風は透き通った香りをして  
いるものだ」

昨今の冒険者協会主催のジェブラ賞において、八重堂出版の王道冒  
険小説「枝葉物語」が大賞を受賞し、もはや彼の名を冠した新たな文  
学賞を作成すべきかとまで議論されているほどの、新進気鋭の小説  
家・芥川敦は、実家のある璃月を遠く離れて、取材旅行と称し二週間  
の旅行をここモンドにて満喫しているのである。

今日の彼は毎時もの黒外套を羽織ってはいない。この時点で彼を  
知る人間は驚いた顔を隠すことは能わないだろう。現に、彼の出立を  
見送った（ことになった）某鶴は「貴様が黒くない様を見ると寒気が  
してくる」と辛辣にも言われた程なのである。彼女が聊か弁舌の棘を  
取り払うのを怠る節があったとしても、彼の纏う色が黒くないとい  
うのは違和感を厭が応にでも与えるものであるのだ。

と、ここまで酷評してきたのだが、彼が実に着ている服装がとんで  
もなく「ダサイ」ものであるかといえればそういうわけでもないのだ  
る。



序話 年賀ハガキのインクジェット紙からしか採れない栄養がある

平穩を護るものに、最大限の祝福を。

平穩を崩すものに、最大限の悔恨を。

羅針盤の指し示す先を、ただ目指し。

墜ちる先をも、綿密に嚮導してゆく。

奇跡なんて望むべくもないし、或いは奇跡を作ろうなんて思わな  
い。

さてもさても祭りの如くに。しかしながらも葬儀の如くに。

騒ぎ歩き静々走り、叫び臥せり黙し暴れる。

逆さまに順繰りに、私はただただ在るくのみ。

彼女はただ、普通の女の子だった。

ただ、だれにとつても普通であることができるだけの、普通の女の

子だったのだ。

彼女に求められたのは、姉であること。

だから彼女は一人のお姉ちゃんになった。

天真爛漫、皆を明るさで照らす、太陽のような女の子。

そんな「お姉ちゃん」を、彼女の神話は映し出したのだ。

…「それ」を求めているのは彼女だけだと云うのに。

彼女の本質は悲觀的である。それは望まれてはいない。

――皆が望むは彼女そのものだと云うのに。

彼女は樂觀的な少女に擬態している。その様を皆は愛している。

――皆は彼女の存在そのものを愛しているというのに。

彼は言った。

「結局、君のことを愛せてないのは君だけなんじゃないか？」

――

テイワット大陸には現在七つの国が存在している。

契約を重んじ、自らの磐石なる歴史を誇る璃月。

永遠を希求し、自らの独特なる国風を誇る稻妻。

知恵を涵養し、自らの秀逸なる聡慧を誇るスメール。

正義を遵守し、自らの華麗なる裁決を誇るフォンテーヌ。

戦争を肯定し、自らの雄邁なる咆哮を誇るナタ。

慈愛を焼灼し、自らの悲愴なる篤厚を誇るスネージナヤ。

そして。

自由を存護し、自らの無垢なる希望を誇るモンドである。

どの国にも多様で珠玉の文化が根付いているが、中でもこの国には刹那的でありながら不変的な、美しい文化が根付いている。

「久々に来てみるが、相も変わらずこの城の風は透き通った香りをしているものだ」

昨今の冒険者協会主催のジェブラ賞において、八重堂出版の王道冒険小説「枝葉物語」が大賞を受賞し、もはや彼の名を冠した新たな文学賞を作成すべきかとまで議論されているほどの、新進気鋭の小説家・芥川敦は、実家のある璃月を遠く離れて、取材旅行と称し二週間の旅行をここモンドにて満喫しているのである。

今日の彼は毎時もの黒外套を羽織ってはいない。この時点で彼を知る人間は驚いた顔を隠すことは能わないだろう。現に、彼の出立を見送った（ことになった）某鶴は「貴様が黒くない様を見ると寒気がしてくる」と辛辣にも言われた程なのである。彼女が聊か弁舌の棘を取り払うのを怠る節があったとしても、彼の纏う色が黒くないというのは違和感を厭が応にでも与えるものであるのだ。

と、ここまで酷評してきたのだが、彼が実に着ている服装がとんでもなく「ダサイ」ものであるかといえはそういうわけでもないのである。

裾にかけて藤色から白董色に変わっていく桜柄の着物を羽織り、その中には首元を隠すくらいに長めの襟をつなげた襯衣を着ている。そして枯草色の水国袴を履いて、草鞋（サンダル）を着用している。

無難極まる、春先の装いなのだ。普通の人々が普通に着る分には何の

違和もないはずなのだ。

しかしここにおわすは普段から夜のごとき黒装束を纏っている小説家である。

諸兄も、ヒルチャールが急に王冠をかぶってキャベツを投げつけてきたらきつと困惑して…、いや。例が悪いな。

普段愛嬌千万で名をはせる水神が、急に裁判にかけられて有罪判決を…、これもまたよくない。まだ始まってすらいらないことに対して言及するのはやめよう。

とかく、人間が普段見慣れた格好からかけはなれた様相をしているのは、想像以上に衝撃を与えるものだというわけなのである。

「ふふん、他でもないキミにそう言ってもらえるなんて。僕は幸せ者だね！」

「おい莫迦、ともすればその言はここではまずいんじゃないか…？」

「どうつてことないさ！こんな木端の吟遊詩人がこの城で言う言葉にいちいち目くじら立てる狭量な子なんて、この国にはいない。なんてったって…！」

「はいはい、【自由】だから、だろう？」

「へへ、だあい正解！」

彼の隣にて、手慰みにライターをかきならしつつ、彼との世間話(世間話というには少々内容に重みがあるように感じるが触れないでこう)に興じているのは、様々な国の様々な催しごとでお呼びがかかっていて、最早モンド城を代表するといっても過言ではないくらいに有名な吟遊詩人のウェンティである。

さて、この詩人にはとある秘密がある。無論、読者諸賢の心当たりにあるような秘密の話と言われれば否定はできないのであるが、これより触れる秘密においては件の秘封は関連しない。もう一つ言うならば、そもそも彼の元素力に関する秘密についてあれやこれやと書き

ののしれども、話の展開にそれ以上の興隆を見込むことが私には出来そうもないのである。全く、私の筆舌の稚拙に恥じ入るばかりである。

### 閑話休題。

無類の酒好きであり、モンドの中でも一二を争う程の酒マニアを自称する彼であるが、その本職は風の赴くままにさすらい歩く吟遊詩人だ。たとえば彼の演奏の技量に（字面が聊か皮肉ではあるが）神がかかるものがあつたとしても、たとえば各国より演奏の依頼が来るような仕事に困ることのない珍しい詩人であるとしても、やはり本質として吟遊詩人とは薄給なのである。世知辛いものだが、モラがなければ貨幣経済社会に属する存在は文化的生活を送ることが非常にむづかしいのである。

ところで、文化的生活と述べたが、壁の向こうの諸兄からすれば驚きあきれてしまうこと請け合いなしな話がある。

テイワットにおいて、明確に憲法というべきもの、具体的に言えば最高法規が制定されている国は、なんとフォンテーヌ及び璃月のみなのである。フォンテーヌにおける最高法規とは、最高審判官によって定められた「水国法規（フォンテーヌ・レギュレーション）」。条項自体は少なく、裁判において諭示裁定カードイナルの判決を不可侵のものとする「最高裁定権」を定めるもの、メロピデ要塞における看守を筆頭とする自治権を恒久的に認める「監獄自治権」を定めるもの、そして国立学院たるフォンテーヌ学院における研究を許可する「学問研究権」を定めるものの三つのみである。璃月における最高法規とは、かつて帝君によつてもたらされたという「岩王之詔」。これが定める条項は水国法規よりも少なく、璃月章典は璃月において準最高法規として扱われるものであり、これの変更については七星の承認を必要とする、というもの、そして、岩王帝君モラクスによつて定められた法

は第三位最高法規として扱われ、璃月章典の条項を侵害することはない、という岩王帝君自身によって宣言された誓約の二つのみである。

このような有様でありながら、二国の治安が維持されているのは、この最高法規の定めるところの巧妙な仕掛けによるものなのである。というのは、例えばフォンテーヌにおいては「最高裁定権」によって、諭示裁定カーディナルのよる採決内容と最高審判官による刑罰内容の集積によって、国民に許される「健康的な」生活が保障され、璃月においては、実質的に璃月章典の条項が最上位として優先されるのであるからだ。

そして、最高法規として定められた法律が存在しない各国についても、そもそも最高法規が必要ない国風という理由がある。例えば、稲妻においては国民にあらゆる事項について雷電將軍に御前試合にて直訴する権利があり、仮に最高法規が存在しても、その最高法規そのものすらも理論上覆すことが可能であるので、そのような条文を制定する意味が薄い。また例えば、スメールにおいては実質的統治は教令院が担っており、学院を最高権力としている以上、最高法規を論文発表によって覆すことが可能であり、事実かつての草神マハールツカデヴァータの時代には、大賢者の名の下に定められた法律を論文発表にて改定させることがある種の「流行」と化していた時代があり、それを鑑みて先代草神により「法律についての学術発表を行うことで法律を変更する場合は、改正案の法律を予め考案すること」という「校則」が制定された程である。ならばこの校則こそが最高法規であると定義することもできないのではないのだが、その内容が頻りに変更される以上、教令院の校則を最高法規とすることが難しいのだ。

そして芥川が現在滞在しているモンドにおいても、そもそも風神が「最高法規によって国民の【自由】を縛ること」を禁じており、またある意味で西風騎士団の存在こそがモンドの自由を保障する権力であるために、二重の理由から最高法規を制定することができないという

ものがある。

またそもそも、各国において争いを禁じるほどに治安が保証されているとは言い切れないのも一つの理由である。フォンテーヌにおいては執律庭、璃月においては千岩軍、モンドにおいては西風騎士団といったように、確かに治安維持組織は存在するのだが、如何せん各地での騒乱が多すぎて、騒乱を起こす本人に過剰な権利を与えることが、治安維持組織の行動を一定以上に制限するという意味で危険になつてしまつているのである。

読者諸兄に納得のいく説明をするならば、ファンタジー世界であるテイワットにおいて、法律で縛ることができない因子が多く存在しているために、優先度の高い法律を制定する意味が薄くなつてしまうということになるのだ。

話を戻そう。

吟遊詩人のウエンティは、所持金が少ない。しかしながら、彼の趣味は酒をたしなむことである。そして、モンドではそこまでではあるのだが、そもそも酒類の値段は高額である。

以上より導かれる彼の秘密。それは、結構な額の借金が彼にはあるということである。しかも、そのモラを貸しているのがよりによってこの芥川だということである。

まあ、芥川が返金期限を無期限かつ無利子にしている上にウエンティの稼ぎならばぎりぎり返せなくもないというのが救いといえれば救いだらうか。

ウエンティは彼に対する「恩義」に対して、（文字通り）風の噂を伝えることを代価、というほど高尚かつ重厚なものではないが、とにかく恩義の見返りとして彼と定期的に交流しているのである。

さて、そんな風の噂から、彼は芥川に興味深いことを伝えたのである。

――異邦人、来る

これは、異郷の旅人の歩む珠玉の旅の始まりと、そのささくれを掬肘する囁しく美しい物語。



一話 電車を寝過ごしして起きたら県を二つまたいでいた。

守るとは何か。

摩耗することでもない。

過酷なことでもない。

それは即ち、護持することである。

お姉ちゃんの勤めとは、下を守ること。

お姉ちゃんの義務とは、下を照らすこと。

恐ろしいものだ。

時に縛りとは強い力を与えるが、時には大いなる代価を求めるものでもある。

諸刃の剣ということではない。

それならば持ち手を掴めば怪我をしないだろう。

これはただの手榴弾だ。

自分の元で炸裂するという代価を背負い、その炸裂を武器にし得るという利潤を得るだけの、欠陥構造だ。

はたして、彼女はそのことに気づいているのだろうか。

一人で踊り、独りで躓き、孤りで斃れる。

滑稽だが、確かに悲惨だ。

なあ、お前のことだよ。

一人芝居、やめなよ。

――

それは、吟遊詩人との語りよりしばらく時を経て、芥川が遅めの夕食をエンジェルズシアにて取っていた時のことである。

彼はこの酒場に来て、この酒場の客としては珍しく、酒は飲まずにノンアルコールカクテルを傾け、奇遇にもカウンターに立っているワイナリーのオーナーと、キッチンで彼が注文した「かにみそとハムのグリル野菜」を調理しているチャールズと共に談笑していた。

事件が起こったのは丁度彼等が稲妻の鎖国政策についてあれやこれやと話を巡らせ、とうとうその話題の結論が緋櫻毬や鳴草などの稲妻特産品の輸出入が余りにも滞っているのは、単純に稲妻国内外問わず不利益を被っているのです、少なくとも通商について何らかの策を講ずるべきなのではないか、という非常に建設的なものへと至った直後である。

「最近では風災も強まっておりますから、このような通商の問題は出来る事なら皆無とまではいかずとも、少なくともあつてほしいものなのです

が…」

「今度の風災、分かっていたことだがやはり影響が大きい」

「この酒場で様々な美食を堪能したいと思っっているんだ。早く災害が治まってくれるといいんだけどねえ」

「ええ、やはり災難は少ない方がいいものですからね…、ん？」

と、三人が談話していると、チャールズが少々騒がしくなりだした店の入り口に目を向けた。

すると、店頭は何某かの足音が沸き立ち、戸口が聊か乱暴に開け放たれた。

デイルックが少し倦怠感を混ぜた視線を扉に向けたので、芥川も背を向けていた方に振り返ってみると、少し焦った顔をしている緑衣の吟遊詩人と、何が何やらわからないといった困惑しきった顔をしている金髪の少女、そして昨今俗世で目にしなくなって久しい妖精の少女が息も絶え絶えに入店していた。

幸い、他に客もおらず、このことについて声を上げて騒ぎ立てるような輩も店にはいなかったというのは、間違いなくこの場にいるだけにとっても幸運だと言うことができるだろう。

件の吟遊詩人、ウエンティは連れて来た二人に息を落ち着かせるよう促して、芥川に目線で挨拶をした後に、酒場のオーナーに向かって早めの注文を申し付けた。

「オーナー、えつと…人が少ないところないかな」

「二階なら、人は少ないと思うが。まあ今日は貸し切りで人は彼以外にいないのだがな。しかし、そもそも君は吟遊詩人だろう？人が多いところの方が何かとやりやすいと思うが」

「あはは…、演奏はまた今度やらせてもらおうよ。先に二階に行くね。また後で！」

ウエンティはデイルックの回答に曖昧に答えたのちに、「おい！ほ

んとにここなら大丈夫なんだろうな！」と不安がる妖精と「はあ、こんなことになるなんて…」と疲弊を示す少女を連れ立って二階へと足早に去っていった。

芥川が、知り合いが見せる焦った態度に虚を突かれて呆然としてみると、デイルックが少し階段の方に視線を向けつつ口を開いた。

「料理は僕が変わろう。代わりに彼らを見張っていてくれ。あの詩人は怪しい」

「は、はい…。しかし、なかなか鬼気迫る様子でしたが、いったいどうしたのでしょうかね」

「それじゃ、私は状況を聞いて来ようかい？」

「えっと…、誰にですか？」

「それは勿論、モンドの『警備員』達に、だよ」

店の問題対処に向けて動き出そうとしていた2人に協力しようと、モンドの現在の状況を然るべき人に尋ねに行こうとし、芥川が椅子を引いて立ち上がるうとしたところで、またも戸口の方が騒がしくなる。

今度の来客は礼儀正しく扉を数度叩いた後に、「失礼します。西風騎士団所属のアートとマイルズです。」と断りを入れ、入店してきた。

「すまない、今日は貸し切り営業中なんだ。酒は出せないが、それ以外の用事であれば聞こう」

「あつ、デイルック様。それに芥川さんまで。ご無沙汰しております。少々事件が起こりまして、聞き込み調査中なのです。泥棒を見かけませんでしたか？」

「何があつたんだい？こんなに人を出して。単なる万引き程度なら、騎士団員が大勢かかりきりになるほどの事でもないだろうに」

「芥川さんはご存じなかったのですね。泥棒二人が天空のライアーを盗もうとしたのです！」

「天空のライアー、ねえ…。確か、風神様がモンドを去る前に遺した神

器の一つ、だったかな?」

「ほう?それは珍しい」

「ええ、天空のライアーは芥川さんが言ったように風神様の宝物です。これほど貴重な文化財を――」

西風騎士団から状況を聞き取るに、「天空のライアー」と呼ばれる神の遺物を何者かに盗まれたのだという。

なかなかの大事事件に芥川が少し目を見開く中、丁度グリル野菜が完成したようで、カウンターに出来上がった料理を置いたデイルツクは少々眉を顰めつつ、口を開く。

「金にならないものを盗む莫迦がいるとはな。うちの酒蔵を狙った方がまだ儲かると思うが」

「はは、デイルツクさん。まさか盗む方の儲けの心配をするとは、着眼点が独特だね」

「は、はは…。デイルツク様、それに芥川さん、急かすようで申し訳ないですが金髪と緑色の人影を見かけたりしていませんでしたか?」

「…うーん、私は見かけていないねえ。窓にもそれらしいものは見当たらなかったな。…デイルツクさんはどうだった?」

「ああ、この店には入ってきていないが、窓の外に裏門に向けて走り去るその色の影は見えた。恐らく、あっちの方面に行ったのだろう」

「と、いうことらしいよ?」

「かしこまりました。デイルツク様、それに芥川さん、ありがとうございますー!」

「いいよいいよ、お勤め頑張ってね」

何故か二人して騎士団員をはぐらかした後に、芥川が上から顔をのぞかせていたウエンティに目配せをすると、足早に三人が階下に向かって降りてきた。

約一名の目線がグリル野菜の方にくぎ付けになっているのをほほえましく思いながら、芥川がウエンティの方を見やると、何と酒を注

文しようとしていた。

ところで、デイルツクのウエンティに対する態度が聊か冷たいということに、賢明なる読者諸兄は気が付いているかもしれない。

もちろん、絶賛手配中の吟遊詩人に対する態度としては何もおかしいところはない、と言われれば否定する材料は皆無なのであるが、実のところもう一つ理由があるのである。

というのは、この飲兵衛詩人は何度かエンジェルズシアに来店しているのであるが、その来店日に限ってデイルツクが不在であったということなのである。

両者ともに何ら意図するところのものではないという、天文学的確率レベルの偶然と言わざるを得ない、どころかもはや運命だと言い切りすらできる程であるのだが、実際に起こっているのも何とも言えない。

所感として、その豪運を何か別のところで使えなかったのだろうか、とは感じた。星五五枚抜き位してるんじゃないだろうか、知るところではないが。

「今日は何れにしようかなあ…」

「カウンターからとった瓶を置け。それは彼が注文したもので、まず酒じゃないし、少なくとも君のものじゃない。そしてそもそも、今日は貸し切り営業だ」

「こ、コイツ…、矢継ぎ早にツツコミを入れたぞ！目ざといやつなんだなあ」

「ありやりや、じゃあ敦君に後でおごってもらおうと」

「はあ、お前さんが負債を増やすのに障りがないのなら別におごつてもいいんだけどね。まず君にはやるべきことがあるのではないかな」  
「そうだな。そろそろ、僕の質問に答えてもらおうか」

さりげなく芥川のジュース（ググプラム100%である）の瓶を分捕ろうとした不届きな盗人容疑者を制止しつつ、デイルツクは彼に少

し強めの口調で状況を問い質した。

「えーっと、ウエンティが質問に答える前に一つ聞かせて欲しいんだけど、この人たちは誰なの？」

「こちらはデイルック。この酒場のオーナーの…、そのさらに上のオーナーだ。そしてここに座って料理を食べているのが、かの有名な作家の芥川敦君だよ」

「えええ!! 正真正銘の有名な人ばかりじゃないか! こんなところで会うなんて想像もしてなかったぞ!!」

「その通り! 彼等は有名人だよ。ちなみに、ボクは彼のワイナリーの蒲公英酒が大好きだし、敦君の書いてくれた詩を演奏するのも大好きなんだ」

「…衛兵から泥棒の話聞いた。先に言っておくと、天空のライアーを盗む度胸は気に入った」

「あはは、あれを盗むなんて、君たちは間違いなくお馬鹿さんだね。最も、かなり珍しい類のお馬鹿さんだけけど」

彼等が盗人どもの度胸に言及すると、白い妖精ちゃんがかなりムツとした顔をして、如何にも遺憾だといった声色で抗議した。

「盗んでない、真犯人はほかにいるぞ!」

「こちらは騎士団のスーパールーキーだよ、モンドの聖遺物を盗むなんてありえないよ?」

「スーパールーキー…。ああ、君が。君は、この吟遊詩人と仲がいいのか?」

「あはは…、言うほどそんなに仲は良くないかなあ…」

「あつははは! い、言われてるぞウエンティ!」

「えー! 旅人お! ボクたちの仲はそんなに浅いものだったのかい?!」

旅人とやらの衝撃発言に少しだけ場が柔らかくなるが、芥川とウエンティの絡みには構わずデイルックは彼女に対して所感をこぼした。

「ふむ…、旅人の君がモンドの危機を救ってくれたとは。聞いたところで風魔龍を退け、四風守護の神殿を浄化した、ということだ。中々の偉業だ」

「えっへへ、それほどでもあるぜ！」

「苦労したのはパイモンだけじゃないでしょ」

「君のような人材が騎士団に入るなど、もったいない。西風騎士団は、風魔龍の件に関してずっと臆病で、それでいて効率も悪い。外交面も、フアデュイに対して弱いうえに保守的だ」

「おっ、おう…。そう、なんだな」

少々（個人の感想）、騎士団に対して思うところのあるデイルツクは、荣誉騎士の任命についての話をするはずが、徐々に話を騎士団の運営体制に対しての愚痴に無意識に転換させてしまう。

旅人としては、未だモンド来訪一週間ほどとはいえ、騎士団がこぶる活躍している場面を数か所見ているため、「もう少し評価してあげてもいいんじゃないかな…？」と思わないでもなかったが、デイルツクの妙に鋭い剣幕と重いものがにじみ出た口調から、どうにも戯言の類だとは思われず、「（まあ、そういう見方もあるのか）」と結論付けた。

星海を長年旅してきた人間の器の大きさは、伊達ではないのだ。

「チツ…、いい。この話はしたくないんだ。忘れてもらって構わない」

「デイルツクは、西風騎士団が好きじゃないみたいだね」

「目指す道が違うだけだ。モンドに対して、僕は僕なりの期待を持っている。話を戻そう。なぜ天空のライアーを盗もうとした？」

「本当に知りたいの？騎士団関係のトラブルに巻き込まれるかもしれないよ？」

「ふん、トラブルは怖くないさ。そもそも僕自身が西風騎士団にとってのトラブルの種みたいなものだしね。その質問を聞くべきは僕じゃないだろうっ。」



「ふふ、そうだったね。さて、それではボクの盟友にも同じ質問を問うてみようかな？でも、君の答えは正直予想できているんだけれどね」  
「ああそうさな。お前さんの予想通り、私にも一枚噛ませてくれるよう頼むつもりだったよ。きっと小説の題材になるだろうからね！」

芥川の強く、そして好奇に満ちた眼差しを受けて、ウエンティは満足気に頷く。

と、芥川の「小説」という言葉に記憶が想起されたのか、パイモンが旅人に楽しそうに話しかける。

「旅人おーこいつの小説はすつごく面白いんだぜ！この前読んだ『恐れ知らずのスメールローズ』は特に面白かったなあ！また機会があったら一緒に読んでみような！」

「おやおや、パイモンちゃんには拙作を楽しんでもらっているようで、幸甚だよ。しかし…、そうか。君が件の『異邦人』、だね？君にも、いつか機会があれば、拙作を楽しんでくれると嬉しいよ」

「決まりだね！敦君は旅人との親交を深めているようだし、いい兆しが見えているようだ！それじゃあ、これからボクが真実の物語を演奏してあげよう。ところで…、報酬はくれたりするかい？」

「報酬は5モラから天空のライアー。君の物語次第だ」

「いいね！じゃあ敦君には、彼女らの食事代を奢ってもらおうかな？」

「はあ…、勝手に私の金銭の行方を決めないでほしいものだ。まあ奢るけどさあ」

虚像にまみれた信仰の中から  
ワタシが一つ真実を語ってしんぜよう  
神が未だ神になり切れなかった時のことである  
そこには仰天なる王が在った  
王の偉大なる恩恵は従順な臣民に施される  
王は天理の代弁者を唯一許された存在である  
王の類まれなる執政は即ち世界の摂理である  
王に愚かにも疑念を抱くことは思考の崩壊を意味する  
王は則ち絶対である  
王の暴威に曝された民たちは  
息をするだけで身が崩れる  
王の庇護に与った民たちは  
息をするだけで力が溢れる  
身が崩れる痛みを受けた民たちは  
神に助力を恃んだ  
力を持たない神は大いなる羽を望んだ  
即ちそこに大龍喚ばれて民を盛んに存護した  
その羽は民を王威より守るため  
その顎は民の暗雲を喰らうため  
龍は民に感謝を捧げられ  
龍は民に安心を与えた  
しかし姦計の輩が龍を侵す  
毒に侵され薬に冒され  
龍は変転した  
その羽は民を暴威にて弄るため  
その顎は民の幸福を貪らうため  
龍は民に怨恨を投擲され  
龍は民に不穩を与えた  
月日は進みすべては摩耗する  
民も龍も始めを忘れて  
いつしか総てが全てを忘れた

後に残るは魔龍のみ  
その瞋恚を忘れて  
ただ空虚な怒りで身を炙るのみだ  
自業自得というなかれ  
勸善懲惡と述べてくれるな  
これはもう戻らない禍根の話  
彼に待つ救いはいつかきたるだろうか  
それを知るは神と異邦のみ

――

「先ほどの叙事詩は、一体……。これは重要な秘密のはずだ。なぜ僕に見せた？」

「何故、なんだろうねえ。うん、風向きが変わろうとしているからだろうね。――どうかな？ デイルツク？」

誰も聞いたことのない、誰にも聞かせたことのない、一滴の悪意の為した悲劇の瀑布の話は、強かにデイルツクや旅人たちの身体を穿つた。

デイルツクは自らの為すべきことを考え、パイモンは悪龍の真実に眦を重くして、旅人は旅先の物語の絶望と希望を確かに感じ取っていた。

「…面白い。少し時間をくれ。情報をまとめよう」

「一応聞こうか。敦君は？」

「風向きは変わった、んだろ？ならばその風向きに従ってやるまでだよ」

「ふふ、心強いね」

ウエンティに優しい気な声色で背中を叩かれた芥川は、何とも言い難い「浅い」笑いを顔に浮かべ、瞬時に何時もの柔和な笑顔にもどした。そして、その優しい顔のまま、旅人とパイモンに助言を施した。

「旅人、それからパイモンちゃん。君たちには聞くとこころによれば『榮譽騎士』の肩書があるらしいね？だったら、疑いの目は君たちには向かない筈だね。さつき渡された指名手配には金髪と緑色、としか書かれていないし、パイモンちゃんのことなんて一切書かれていないからね」

「わかった。それと、私の名前は蛍。よろしく」

「ああ。そうだね…、よろしく、だ」

芥川の言に付随させて、デイルックが念頭に置いておくべき重要事項をこれでもかというくらいは無表情で吐き出した。

彼には、感情の閾値に達したときに表情がなくなる仕掛けでもあるのかもしれない。

「だが吟遊詩人。君は酒場から出ない方がいい」

「それなら願ったりだ！ボクは今から敦君に奢ってもらうんだからね！」

「はア、ウエンティ？君に奢るのは今日は五杯だけだよ？このあとデイルックさんが帰ってきたら話し合いをするんだからさ」

「ええ〜!!!いいじゃんいいじゃんいいじゃんやあん!!」

「コイツ、芥川の前ではやたら子供っぽいんだな…」

「では僕は少し出る。旅人、注文があるならそこにいるウィリアムに頼んでくれ。ウィリアム、二番テーブルに彼女らを案内してくれるか。僕はワイナリーまで資料を取りに行ってくる」

「畏まりました。では後ほど」

「うん！それじゃ、後での会議に向けて、まずは栄養補給と行こう！」

旅人とパイモン、そしてウエンティは、思い思いに注文をする。

芥川はその様子に苦笑を浮かべながら、ウィリアムと話したり、ウエンティと軽口をたたきあつたり、パイモンを揶揄ったり、旅人に話を聞かせたり、騒がしく時を過ごした。

この騒音は、彼らの物語の開幕の鐘となるのだろう。

——彼らはそれを知らず、ただの虚軸の樹が彼らを見詰めるだけである。